加納古墳群・平石古墳群

－中山間地域総合整備事業「南河内こごせ地区」に伴う発掘調査－

本　文　編

大阪府教育委員会

加納古墳群・平石古墳群

－中山間地域総合整備事業「南河内こごせ地区」に伴う発掘調査－

本　文　編

大阪府教育委員会

はじめに

大阪府教育委員会では、南河内郡河南町加納・平石地区の中山間地域総合整備事業「南河内こごせ地区」に伴う埋蔵文化財調査を平成11年度から平成18年度にかけて実施しました。その結果、6世紀から7世紀にわたって平石谷の下流より上流へかけて築造された加納古墳群、シシヨツカ古墳、籠田古墳、アカハゲ古墳、ツカマリ古墳などの学術的に貴重な内容が明らかになりました。これらの古墳の中で、アカハゲ古墳は昭和40年（1965）に、ツカマリ古墳は昭和54年（1979）に石槨内部の調査が実施され、早くから注目されてきました。一方、シシヨツカ古墳は平成11年度に初めて発見した古墳ですが、その内容はアカハゲ・ツカマリ両古墳と非常に類似しつつも、また相違するところもあるという興味深い事実が判明してきています。調査成果の概要については、現地調査終了後、逐次刊行してきましたが、本報告は特に平成12年度から16年度にかけて実施した加納古墳群・平石古墳群について、その後整理した出土品の具体的な観察結果も加え、これらの古墳群の重要性を広く認識していただくために作成しました。本書が今後この地域の豊かな自然環境と歴史的環境の調和を図る指針として活用されるよう願っています。

調査の実施にあたっては、地元加納地区、平石地区の方々や広く府民の皆様、関係機関に多大なご協力をいただきました。深く感謝するとともに、今後ともこの地区における文化財保護行政にご理解、ご協力をお願い申し上げます。

平成21年3月

大阪府教育委員会
文化財保護課長　冨尾昌秀

例　　言

1．本書は、大阪府教育委員会が、大阪府環境農林水産部の依頼を受け、府営中山間地域総合整備事業「南河内こごせ地区」に伴って、平成12年度より平成16年度にかけて実施した南河内郡河南町加納・平石所在、加納古墳群・平石古墳群発掘調査の概要報告書である。

2．調査は、文化財保護課調査第二グループ主任技師今村道雄（平成12年度）、同技師枡本　哲（平成13～16年度）が担当し、遺物整理については、調査管理グループ主査三宅正浩（平成18～20年度）、同副主査藤田道子（平成16～20年度）、同技師山田隆一（平成12～14年度）、同技師小浜　成（平成12～15年度）、同技師林日佐子（平成15～17年度）が行った。

3．発掘調査及び遺物整理に要した経費は、農林水産省の補助を受けた大阪府環境農林水産部と文部科学省の補助を受けた大阪府教育委員会が負担した。

4．航空写真測量は、株式会社日測関西支社（平成12～13年度）、和歌山航測株式会社大阪支店（平成14年度）、株式会社国土開発センター大阪支店（平成15年度）、株式会社ウエスコ大阪支社（平成16年度）に委託し、撮影フイルムは各社において保管している。

5．遺構・遺物の写真撮影は、（有）阿南写真工房に委託した。

6．漆ほか炭化材の放射性炭素年代測定は、株式会社パレオ・ラボへ委託した。

7．調査番号は、平成12年度（00008）、平成13年度（01026）、平成14年度（02014）、平成15年度（03007）、平成16年度（04007）である。

8．調査にあたり、以下の方々にご指導、ご教示をいただきました。記して謝意を表します。
赤井毅彦、石野博信、石部正志、泉森　皎、市川秀之、伊藤聖浩、猪熊兼勝、上野勝巳、上原真人、江浦　洋、太田宏明、大橋　勉、置田雅昭、奥田　尚、小野山　節、笠井敏光、片本憲一、金関　恕、神谷正弘、河内一浩、北野耕平、木下光弘、木場幸弘、下大迫幹洋、白石太一郎、竹本　勇、伊達宗泰、塚口義信、中村　浩、西谷安一、西山要一、畑　信次、平田政彦、広瀬和雄、藤澤典彦、堀田啓一、水野正好、宮原晋一、森岡秀人、森村健一、安村俊史、柳沢一男、山口誠治、吉井秀夫、吉年研一、和田晴吾、渡邊邦雄。（敬称略）

9．本書の編集は、枡本及び調査第二グループ主査上林史郎が担当した。執筆者は目次及び文頭に記した。

10．本報告書は、300部作成し、一部あたりの単価は8,085円である。

加納古墳群・平石古墳群

第1部　調査報告

第1章　調査の経緯　枡本　哲　1

第2章　地理的及び歴史的環境　庵ノ前　智博　5

　第1節　地理的環境

　第2節　歴史的環境

第3章　調査・研究史　庵ノ前　智博　13

第4章　加納古墳群の調査成果　庵ノ前　智博

　第1節　加納1号墳　19

　第2節　加納2号墳　36

　第3節　加納5号墳　55

　第4節　加納6号墳　66

　第5節　小　結　72

第5章　平石古墳群の調査成果

　第1節　シシヨツカ古墳　枡本　哲・森川祐輔　82

　第2節　籠田古墳　枡本　哲　171

　第3節　アカハゲ古墳　枡本　哲・庵ノ前　智博　182

　第4節　ツカマリ古墳　枡本　哲・庵ノ前　智博・進藤智美・関本優美子　218

第6章　調査のまとめ　枡本　哲　269

第2部　分 析・考 察

第1章　分　析

　第1節　石材の石種とその採石地　奥田　尚　283

　第2節　物理探査　置田雅昭　307

　第3節　放射性炭素年代測定　パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ　324

　第4節　シシヨツカ古墳出土遺物の科学的保存処理　西山要一　333

第2章　考　察

　第1節　アカハゲ古墳とツカマリ古墳の石室設計企画　山本　彰　357

　第2節　シシヨツカ古墳出土の象嵌遺物の年代　西山要一　363

　第3節　シシヨツカ古墳出土小札甲の編年的位置づけ　森川祐輔　371

　第4節　アカハゲ古墳出土の円面硯　西口陽一　383

　第5節　シシヨツカ古墳出土漆塗籠棺の製作技法について　岩立美香　384

　第6節　シシヨツカ古墳、改葬墓の可能性　西川寿勝　392

　第7節　平石古墳群の被葬者像　上林史郎　398

挿　図　目　次

第１図　　南河内こごせ地区事業位置図
第２図　　平成12～16年度調査区位置図
第３図　　周辺の古墳分布図
第４図　　周辺の地形模式図
第５図　　南加納村の横穴式石室
第６図　　平石谷古墳分布図
第７図　　平成12年度９区（平成13年度第１調査区）位置図
第８図　　加納古墳群調査前地形図
第９図　　加納古墳群全体図
第10図　　調査区北壁断面柱状図
第11図　　加納１号墳全体図
第12図　　加納１号墳墳丘盛土および周溝断面図
第13図　　加納１号墳石室検出状況平面図・断面図
第14図　　加納１号墳石室平面図・断面図
第15図　　加納１号墳玄室断ち割り状況平面図・断面図
第16図　　加納１号墳出土遺物実測図
第17図　　加納１号墳出土鉄釘実測図
第18図　　加納２号墳全体図、墳丘盛土および周溝断面図
第19図　　加納２号墳墳丘盛土断面図
第20図　　加納２号墳石室平面図・立面図・断面図
第21図　　加納２号墳羨道部平面詳細図
第22図　　加納２号墳閉塞凝灰岩加工痕拓影
第23図　　加納２号墳石室床面断ち割り状況平面図・断面図
第24図　　加納２号墳遺物出土状況図
第25図　　加納２号墳出土遺物実測図
第26図　　加納２号墳出土赤色彩文付黒塗大刀実測図
第27図　　加納２号墳出土鉄製品・耳環実測図
第28図　　加納５号墳平面図・立面図・断面図
第29図　　加納５号墳全体図・墳丘盛土横断面図・周溝断面図
第30図　　加納５号墳平面図・立面図・断面図
第31図　　加納５号墳検出状況平面図・断面図

第32図　加納５号墳出土遺物実測図
第33図　加納６号墳全体図・墳丘盛土断面図・周溝断面図
第34図　加納６号墳石室平面図・立面図
第35図　加納６号墳排水溝検出状況平面図・断面図
第36図　加納６号墳出土遺物実測図
第37図　加納古墳群周辺調査区平面図
第38図　１・２・７・11・13・14区出土遺物実測図
第39図　16区出土遺物実測図
第40図　平成13年度調査区位置図
第41図　シシヨツカ古墳全体図
第42図　墳丘盛土断面図（１）
第43図　墳丘盛土断面図（２）
第44図　墳丘第３段北西コーナー平面図・断面図
第45図　墳丘第３段北東コーナー平面図・断面図
第46図　墳丘南側前面貼石平面図・立面図
第47図　墳丘第１段西側貼石出土状況平面図・断面図
第48図　南東トレンチ貼石出土状況平面図・断面図
第49図　第７トレンチ（墳丘）東側貼石出土状況平面図・断面図
第50図　第７トレンチ（墳丘）西側貼石出土状況平面図・断面図
第51図　第６トレンチ（墳丘）北側貼石・石敷出土状況平面図・断面図
第52図　前面テラス状施設下裾石出土状況平面図・断面図
第53図　第８トレンチ石列および遺物出土状況平面図・断面図
第54図　第23・24トレンチおよび第３調査区東壁断面図
第55図　第６～第８トレンチ断面図
第56図　石室～羨道部平面図・立面図
第57図　石室内堆積土第207・208層遺物出土状況平面図・断面図
第58図　礫敷上須恵器壷出土状況平面図・断面図
第59図　礫敷上挂甲小札・鉄鏃・鏡板出土状況平面図・断面図
第60図　閉塞施設平面図・立面図
第61図　羨道埋甕出土状況平面図・断面図
第62図　羨道西側埋甕内須恵器高杯発見状況平面図・断面図
第63図　石室内および墳丘撹乱土出土土器実測図
第64図　礫敷上出土須恵器四耳壷実測図
第65図　羨道出土須恵器甕実測図
第66図　羨道出土西側埋甕内発見須恵器無蓋高杯実測図

第67図　第６～８・23・24トレンチ出土土器実測図
第68図　第６トレンチ南端撹乱部出土土器実測図（１）
第69図　第６トレンチ南端撹乱部出土土器実測図（２）
第70図　装身具類実測図
第71図　鉄刀・刀子類実測図
第72図　刀装具類実測図
第73図　象嵌刀装具類実測図（西山要一原図）
第74図　鉄鏃形式模式図
第75図　鉄鏃類実測図（１）
第76図　鉄鏃類実測図（２）
第77図　鉄鏃類実測図（３）
第78図　鉄鏃類実測図（４）
第79図　小札類実測図（１）
第80図　小札類実測図（２）
第81図　小札類実測図（３）
第82図　小札類実測図（４）
第83図　小札類実測図（５）
第84図　小札類実測図（６）
第85図　小札類実測図（７）
第86図　小札類実測図（８）
第87図　小札類実測図（９）
第88図　小札類実測図(10)
第89図　小札類実測図(11)
第90図　小札類実測図(12)
第91図　小札類実測図(13)
第92図　小札類実測図(14)
第93図　鞍金具類実測図（象嵌金具西山要一氏原図）
第94図　馬具類他実測図
第95図　飾金具類他実測図
第96図　鉸具・鎖類他実測図
第97図　金製品実測図
第98図　石室内撹乱土出土榛原石・アプライト片実測図
第99図　羨道部撹乱土出土榛原石片実測図
第100図　第６トレンチ南端撹乱部出土榛原石片実測図

第101図　平成14年度調査区位置図
第102図　第11調査区平面図
第103図　第11調査区断面図（１）
第104図　第11調査区断面図（２）
第105図　第11調査区断面図（３）
第106図　駕田古墳平面図
第107図　駕田古墳埋葬施設平面図
第108図　駕田古墳東西石室前面立面図
第109図　第11調査区出土遺物実測図
第110図　平成15年度調査区位置図
第111図　調査区と地籍の位置関係図
第112図　アカハゲ古墳調査前の地形図
第113図　アカハゲ古墳全体図
第114図　第３調査区断面図観察位置図
第115図　アカハゲ古墳詳細図位置関係図
第116図　第３調査区断面図
第117図　第１・３・５調査区断面図
第118図　墳丘盛土断面図
第119図　墳丘第１段南辺東半部および東辺貼石平面図・立面図
第120図　墳丘第１段西辺および第２段南辺西半部貼石平面図・立面図
第121図　墳丘第１段南辺西半部貼石平面図・立面図
第122図　墳丘第２段西辺・南辺東半部貼石および第１段西辺敷石平面図・立面図
第123図　墳丘第２段南辺東半部・東辺貼石および第１段東辺敷石平面図・立面図・断面図
第124図　壇南辺盛土断面図
第125図　排水施設 1 断面図
第126図　排水施設１・２平面図・断面図
第127図　排水施設５平面図・立面図・断面図
第128図　排水施設４・６平面図・立面図・断面図
第129図　第３調査区小土坑および同南トレンチ検出遺構平面図・断面図
第130図　壇上面流水跡断面図
第131図　アカハゲ古墳石室現状図
第132図　第３調査区出土遺物実測図
第133図　平成16年度調査区位置図
第134図　調査区と地籍の位置関係図

第135図　ツカマリ古墳調査前の地形図
第136図　ツカマリ古墳全体図
第137図　断面観察位置図
第138図　ツカマリ古墳詳細図位置関係図
第139図　墳丘第１段西辺敷石および第２段西辺貼石平面図・断面図
第140図　墳丘第１段南辺貼石および第２段南辺貼石平面図・立面図
第141図　墳丘第１段東辺貼石・敷石および第２段東辺貼石平面図・断面図
第142図　羨道平面図・断面図
第143図　埋葬施設全体図
第144図　羨道埋土南北・東西断面図
第145図　墳丘盛土南北断面および壇盛土東西断面模式図
第146図　墳丘第３段盛土南面および壇盛土東西断面図
第147図　壇南斜面補足トレンチ断面図
第148図　中央南北断面図
第149図　壇東側南北トレンチ断面図
第150図　壇西側Ｌ字形トレンチ断面図
第151図　壇東半部礫敷施設平面図・断面図
第152図　壇東辺排水施設５受水口平面図・断面図
第153図　壇東辺排水施設５排水口平面図・断面図
第154図　墳丘第１段北東敷石上凝灰岩製石櫃出土状況図
第155図　土器類他出土遺物実測図
第156図　墳丘覆土出土陶製棺台・榛原石実測図
第157図　墳丘盛土・覆土出土石器・銭貨実測図
第158図　平石谷の古墳立地図
第159図　墳丘比較図
第160図　埋葬施設比較図
第161図　礫敷出土小札型式別分布図
第162図　加納１・２・５・６号墳の石材の石種
第163図　シシヨツカ古墳の石材の石種
第164図　駕田古墳の石材の石種
第165図　ツカマリ古墳の石材の石種
第166図　壇電気探査位置
第167図　墳丘のレーダ探査全体図と地区名
第168図　レーダ探査断面図（１）

第169図　レーダ探査断面図（２）
第170図　壇全面の平面図
第171図　壇東西方向断面図（１）
第172図　壇東西方向断面図（２）
第173図　壇南北方向断面図
第174図　別区の平面図
第175図　東西方向排水溝の南北断面図
第176図　東西方向排水溝の東西断面図
第177図　壇の電気探査東西断面図（１）
第178図　壇の電気探査東西断面図（２）
第179図　壇の東西断面図
第180図　各古墳試料の暦年較正確率分布（１）
第181図　各古墳試料の暦年較正確率分布（２）
第182図　各古墳試料の暦年較正確率分布（３）
第183図　各古墳試料の暦年較正確率分布（４）
第184図　各古墳試料の暦年較正確率分布（５）
第185図　暦年代較正結果
第186図　保存処理前後の状態
第187図　漆塗籠棺の保存処理実験
第188図　漆塗籠棺のＸ線透過写真
第189図　分析対象遺物各図（１）
第190図　分析対象遺物各図（２）
第191図　分析対象遺物各図（３）
第192図　分析対象遺物各図（４）
第193図　分析対象遺物各図（５）
第194図　分析対象遺物各図（６）
第195図　分析対象遺物各図（７）
第196図　分析対象遺物各図（８）
第197図　シシヨツカ古墳の設計
第198図　アカハゲ古墳の設計
第199図　ツカマリ古墳の設計
第200図　象嵌円頭大刀の編年
第201図　亀甲繋鳳凰文円頭大刀・柄頭のＸ線写真
第202図　亀甲繋鳳凰文円頭大刀・鞘尻のＸ線写真

第203図　亀甲繋鳳凰文円頭大刀・巾頸のＸ線写真
第204図　亀甲繋鳳凰文円頭大刀・鞘尻の象嵌線断面
第205図　雲龍文金象嵌大刀の象嵌文様
第206図　雲龍文金象嵌大刀のＸ線写真
第207図　龍文金象嵌鞍金具のＸ線写真
第208図　龍文金象嵌金具の象嵌線
第209図　シシヨツカ古墳出土の小札模式図
第210図　縅孔２列小札甲
第211図　縅孔１列小札甲の腰札にみられる多様性
第212図　シシヨツカ古墳出土附属具と関連資料
第213図　縅孔１列小札甲編年図
第214図　アカハゲ古墳出土円面硯復元想定図
第215図　分析試料
第216図　内面赤色顔料のスペクトル
第217図　素地木口面
第218図　素地板目面
第219図　復元品
第220図　試料312－①外面　マッピング画像
第221図　試料312－①内面　マッピング画像
第222図　漆塗籠棺断面写真
第223図　八尾市愛宕塚古墳石室と玄室出土土器(左)・羨道出土土器(右)
第224図　平石古墳群分布図
第225図　シシヨツカ・アカハゲ・ツカマリ古墳の墳丘
第226図　シシヨツカ・アカハゲ・ツカマリ古墳の石槨
第227図　金山古墳
第228図　寛弘寺45号墳
第229図　白木古墳
第230図　富田林市大伴などの位置図
第231図　大伴氏系図

図　版　目　次

図版１　平石谷　全景
図版２　加納古墳群・平石古墳群　全景
図版３　加納古墳群　近景
図版４　加納古墳群　全景（１）
図版５　加納古墳群　全景（２）
図版６　加納１号墳　近景（１）
図版７　加納１号墳　近景（２）
図版８　加納２号墳　近景
図版９　加納２号墳　羨道
図版10　加納２号墳　石室（１）
図版11　加納２号墳　石室（２）
図版12　加納２号墳　石室遺物出土状況
図版13　加納２号墳　床面
図版14　加納２号墳　羨門部凝灰岩
図版15　加納５・６号墳　全景（１）
図版16　加納５・６号墳　全景（２）
図版17　加納５号墳　近景
図版18　加納６号墳　近景
図版19　加納７号墳　残存状況
図版20　シシヨツカ古墳　調査前全景
図版21　シシヨツカ古墳　調査後全景
図版22　シシヨツカ古墳　近景（１）
図版23　シシヨツカ古墳　近景（２）
図版24　シシヨツカ古墳　墳丘貼石（１）
図版25　シシヨツカ古墳　墳丘貼石（２）
図版26　シシヨツカ古墳　墳丘北側全景
図版27　シシヨツカ古墳　墳丘前面
図版28　シシヨツカ古墳　埋葬施設前面
図版29　シシヨツカ古墳　羨道両側壁
図版30　シシヨツカ古墳　閉塞施設
図版31　シシヨツカ古墳　石室細部
図版32　シシヨツカ古墳　奥室
図版33　シシヨツカ古墳　壁面細部
図版34　シシヨツカ古墳　羨道埋土細部
図版35　シシヨツカ古墳　遺物出土状況（１）
図版36　シシヨツカ古墳　遺物出土状況（２）

図版37　シシヨツカ古墳　遺物出土状況（３）
図版38　シシヨツカ古墳　墳丘盛土断面
図版39　シシヨツカ古墳　墳丘第３段貼石細部
図版40　シシヨツカ古墳　前面テラス状施設（１）
図版41　シシヨツカ古墳　前面テラス状施設（２）
図版42　シシヨツカ古墳　墳丘周辺遺物出土状況
図版43　シシヨツカ古墳　前面テラス状施設南端裾石
図版44　シシヨツカ古墳　貼石中出土榛原石
図版45　駕田古墳　全景
図版46　駕田古墳　墳丘盛土
図版47　駕田古墳　埋葬施設（１）
図版48　駕田古墳　埋葬施設（２）
図版49　駕田古墳　周溝
図版50　駕田古墳　東石室榛原石床面確認坑
図版51　駕田古墳　遺物出土状況
図版52　アカハゲ古墳　航空写真
図版53　調査前のアカハゲ古墳
図版54　アカハゲ古墳　全景（１）
図版55　アカハゲ古墳　全景（２）
図版56　アカハゲ古墳　全景（３）
図版57　アカハゲ古墳　全景（４）
図版58　アカハゲ古墳　貼石・敷石（１）
図版59　アカハゲ古墳　貼石・敷石（２）
図版60　アカハゲ古墳　貼石・敷石（３）
図版61　アカハゲ古墳　貼石・敷石（４）
図版62　アカハゲ古墳　貼石・敷石（５）
図版63　アカハゲ古墳　貼石・敷石（６）
図版64　アカハゲ古墳　貼石変色部分
図版65　アカハゲ古墳　墳丘盛土
図版66　アカハゲ古墳　墳丘盛土観察坑断面
図版67　アカハゲ古墳　壇断ち割り断面（中央南北断面）
図版68　アカハゲ古墳　排水施設１
図版69　アカハゲ古墳　排水施設２
図版70　アカハゲ古墳　排水施設３
図版71　アカハゲ古墳　排水施設５（１）
図版72　アカハゲ古墳　排水施設５（２）
図版73　アカハゲ古墳　排水施設４・６

図版74　アカハゲ古墳　壇上面流水跡（１）
図版75　アカハゲ古墳　壇上面流水跡（２）
図版76　アカハゲ古墳　壇盛土断面
図版77　アカハゲ古墳　その他の遺構・遺物出土状況
図版78　アカハゲ古墳　榛原石出土状況
図版79　ツカマリ古墳　全景（１）
図版80　ツカマリ古墳　全景（２）
図版81　ツカマリ古墳　全景（３）
図版82　ツカマリ古墳　全景（４）
図版83　ツカマリ古墳　羨道（１）
図版84　ツカマリ古墳　羨道（２）
図版85　ツカマリ古墳　羨道（３）
図版86　ツカマリ古墳　石室現状
図版87　ツカマリ古墳　羨道埋土（１）
図版88　ツカマリ古墳　羨道埋土（２）
図版89　ツカマリ古墳　墳丘第３段盛土状況（１）
図版90　ツカマリ古墳　墳丘第３段盛土状況（２）
図版91　ツカマリ古墳　礫敷施設
図版92　ツカマリ古墳　貼石・敷石（１）
図版93　ツカマリ古墳　貼石・敷石（２）
図版94　ツカマリ古墳　貼石・敷石（３）
図版95　ツカマリ古墳　土留め施設
図版96　ツカマリ古墳　墳丘段盛土状況（中央南北トレンチ断面）
図版97　ツカマリ古墳　壇盛土状況（１）
図版98　ツカマリ古墳　壇盛土状況（２）
図版99　ツカマリ古墳　壇盛土状況（３）
図版100　ツカマリ古墳　壇西側尾根部堆積状況
図版101　ツカマリ古墳　排水施設（１）
図版102　ツカマリ古墳　排水施設（２）
図版103　ツカマリ古墳　遺物出土状況
図版104　ツカマリ古墳　物理探査状況
図版105　加納古墳群　出土遺物（１）
図版106　加納古墳群　出土遺物（２）
図版107　シシヨツカ古墳　出土遺物（１）
図版108　シシヨツカ古墳　出土遺物（２）
図版109　シシヨツカ古墳　出土遺物（３）
図版110　シシヨツカ古墳　出土遺物（４）

図版111　シシヨツカ古墳　出土遺物(５)
図版112　シシヨツカ古墳　出土遺物(６)
図版113　シシヨツカ古墳　出土遺物(７)
図版114　シシヨツカ古墳　出土遺物(８)
図版115　シシヨツカ古墳　出土遺物(９)
図版116　シシヨツカ古墳　出土遺物(10)
図版117　シシヨツカ古墳　出土遺物(11)
図版118　シシヨツカ古墳・ツカマリ古墳　出土遺物
図版119　加納古墳群　土器類(１)
図版120　加納古墳群　土器類(２)
図版121　加納古墳群　土器類(３)
図版122　加納古墳群　土器類(４)
図版123　加納古墳群　土器類(５)
図版124　加納古墳群　土器類(６)
図版125　加納古墳群　金属製品
図版126　駕田古墳・アカハゲ古墳・ツカマリ古墳　出土遺物
図版127　シシヨツカ古墳　土器類(１)
図版128　シシヨツカ古墳　土器類(２)
図版129　シシヨツカ古墳　土器類(３)
図版130　シシヨツカ古墳　武器類(１)
図版131　シシヨツカ古墳　武器類(２)
図版132　シシヨツカ古墳　武器類(３)
図版133　シシヨツカ古墳　小札類(１)
図版134　シシヨツカ古墳　小札類(２)
図版135　シシヨツカ古墳　小札類(３)
図版136　シシヨツカ古墳　小札類(４)
図版137　シシヨツカ古墳　小札類(５)
図版138　シシヨツカ古墳　小札類(６)
図版139　シシヨツカ古墳　小札類(７)
図版140　シシヨツカ古墳　小札類(８)
図版141　シシヨツカ古墳　小札類(９)
図版142　シシヨツカ古墳　小札類(10)
図版143　シシヨツカ古墳　馬具類他(１)
図版144　シシヨツカ古墳　馬具類他(２)
図版145　シシヨツカ古墳　漆塗籠棺
図版146　シシヨツカ古墳　榛原石他

表　目　次

表１　加納古墳群出土土器観察表（１）
表２　加納古墳群出土土器観察表（２）
表３　加納古墳群出土土器観察表（３）
表４　加納古墳群出土土器観察表（４）
表５　加納古墳群出土土器観察表（５）
表６　シシヨツカ古墳出土土器観察表（１）
表７　シシヨツカ古墳出土土器観察表（２）
表８　シシヨツカ古墳出土土器観察表（３）
表９　シシヨツカ古墳出土土器観察表（４）
表10　シシヨツカ古墳出土土器観察表（５）
表11　シシヨツカ古墳出土土器観察表（６）
表12　シシヨツカ古墳出土鉄鏃計測表
表13　シシヨツカ古墳出土小札型式別数一覧
表14　ツカマリ古墳羨道各部の長さ
表15　ツカマリ古墳出土土器観察表（１）
表16　ツカマリ古墳出土土器観察表（２）
表17　ツカマリ古墳出土緑釉陶製棺台観察表
表18　ツカマリ古墳出土石器一覧
表19　ツカマリ古墳出土寛永通宝一覧
表20　平石谷大型方墳の壇・墳丘規模比較
表21　平石谷大型方墳埋葬施設の規模比較
表22　高句麗王陵の墳丘と祭台の規模・位置関係
表23　駕田古墳使用石材の石種と長径
表24　アカハゲ古墳の石材の使用位置と石種構成
表25　ツカマリ古墳の調査箇所ごとの石材の石種と粒径
表26　アカハゲ古墳レーダ探査地区別測線距離
表27　アカハゲ古墳レーダ探査の異常地点と発掘結果との照合
表28　測定試料及び処理
表29　放射性炭素年代測定及び暦年代較正の結果
表30　シシヨツカ古墳出土金鋲成分比
表31　シシヨツカ古墳出土金糸成分比
表32　シシヨツカ古墳出土金薄板成分比
表33　シシヨツカ古墳出土空玉成分比
表34　シシヨツカ古墳出土垂飾成分比

表35　シシヨツカ古墳出土帯飾成分比
表36　シシヨツカ古墳出土銀環成分比
表37　シシヨツカ古墳出土帯金具銙具成分比
表38　シシヨツカ古墳出土瓔珞鎖成分比
表39　シシヨツカ古墳出土金銅環成分比
表40　シシヨツカ古墳出土金銅製刀装具(責金具)成分比
表41　シシヨツカ古墳出土銀製刀装具成分比
表42　シシヨツカ古墳出土亀甲繋鳳凰文象嵌円頭柄頭成分比
表43　シシヨツカ古墳出土亀甲繋鳳凰文象嵌鞘尻金具成分比
表44　シシヨツカ古墳出土銀象嵌線成分比
表45　シシヨツカ古墳出土勾玉文象嵌巾頸成分比
表46　シシヨツカ古墳出土柄巻線成分比
表47　シシヨツカ古墳出土雲龍文象嵌刀装具成分比
表48　シシヨツカ古墳出土龍文象嵌鞍金具成分比
表49　シシヨツカ古墳出土金象嵌線成分比
表50　シシヨツカ古墳出土ガラス玉成分比
表51　亀甲繋鳳凰文銀象嵌円頭大刀組成成分
表52　雲龍文金象嵌大刀象嵌線組成成分
表53　龍文金象嵌鞍橋金具象嵌線組成成分
表54　分析試料一覧
表55　終末期古墳の副葬品
表56　終末期古墳の編年

加納古墳群・平石古墳群

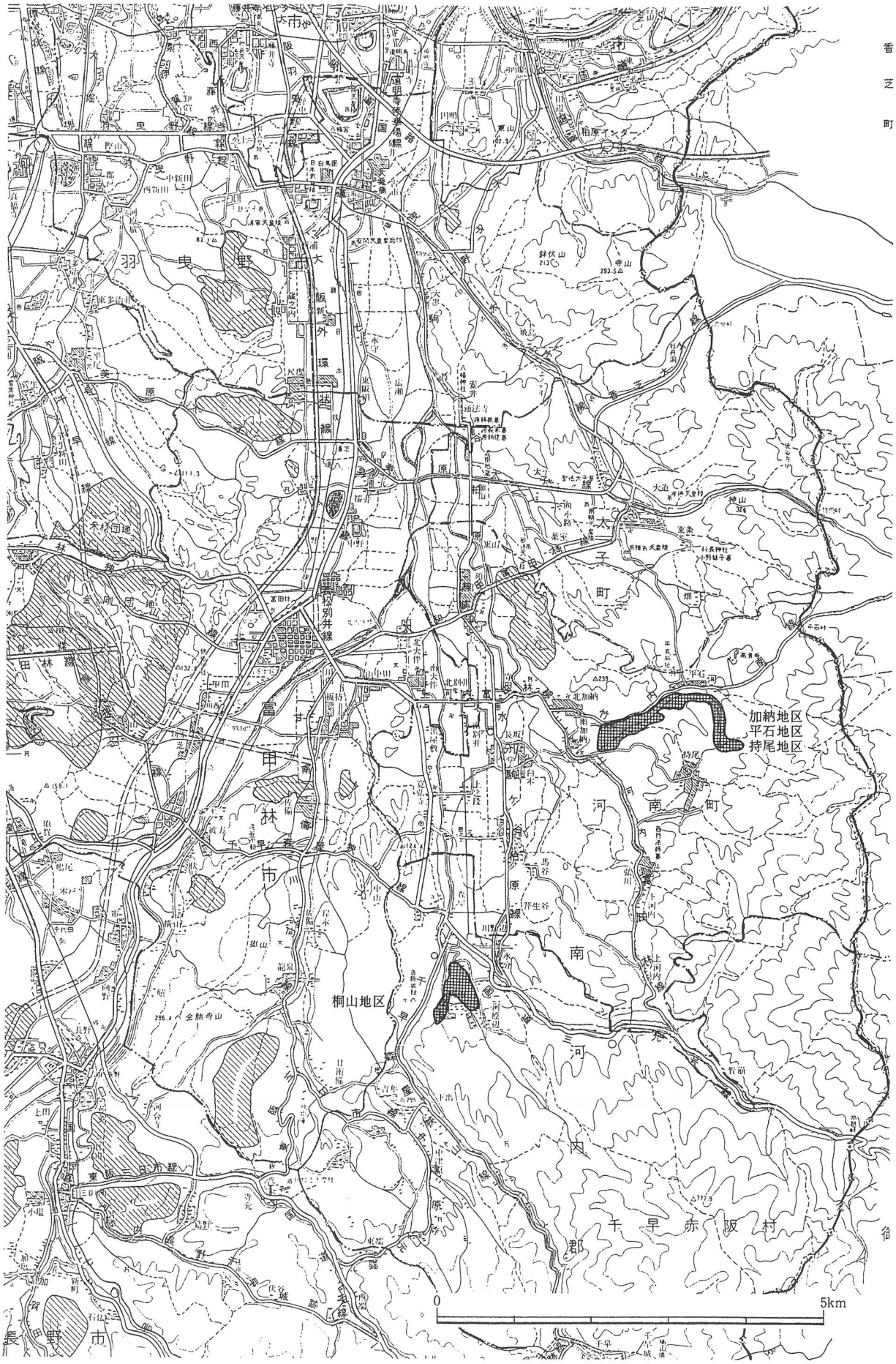
第１部　調査報告篇

第１章　調査の経過

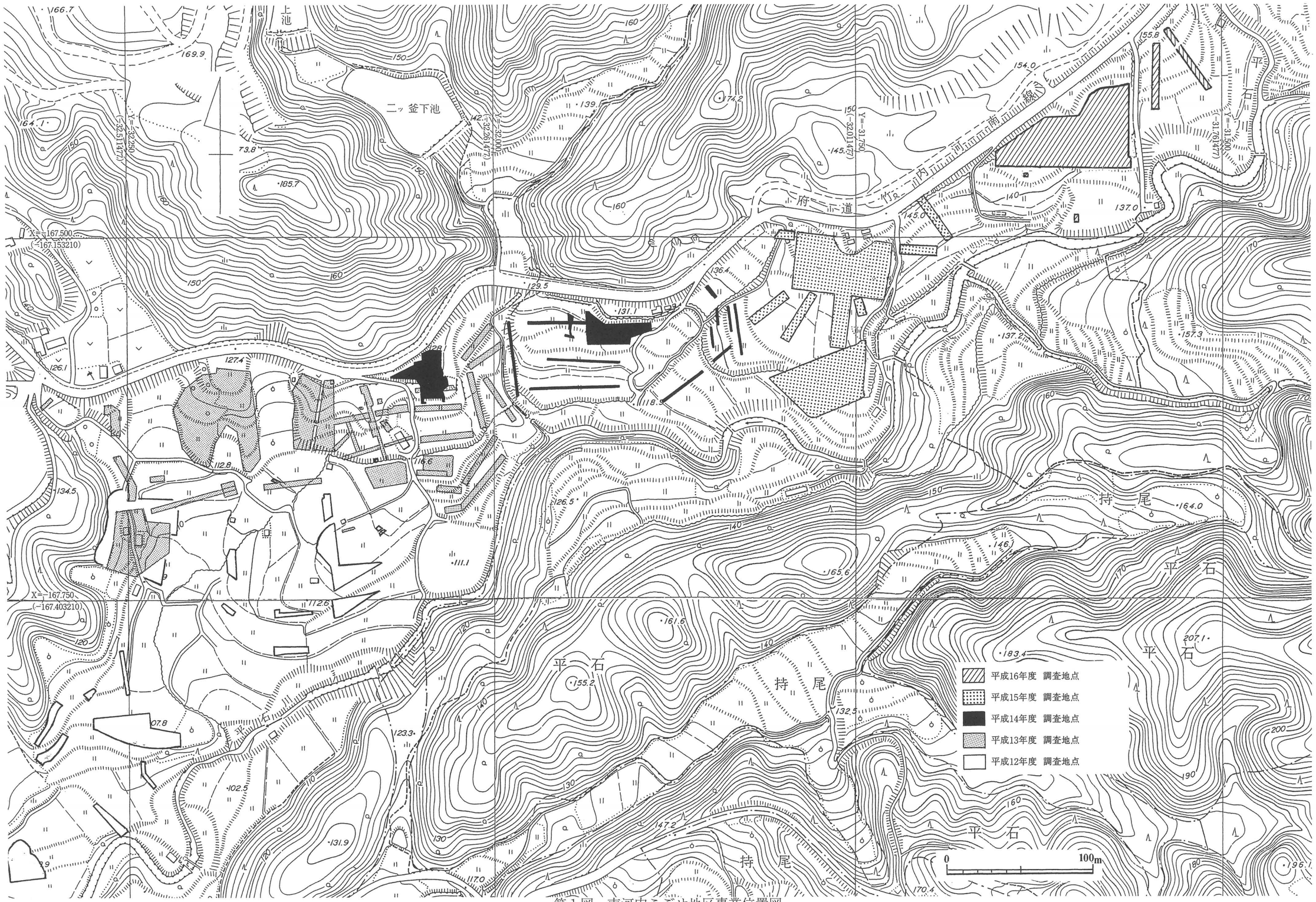
大阪府環境農林水産部は、南河内郡河南町加納及び平石において「南河内こごせ地区の農空間整備事業」を平成10年度より平成16年度にかけて、実施することになった（第１図）。事業は、農作業の省力化・効率化を図るため、大雨災害を受けにくい農地・農業施設を作り、豊かな自然遺産と歴史資源を有効に活用しつつ、都市住民との交流型農業の展開に寄与する目的で立案された。新しい圃場の対象となるのは、白木小学校北東の平石谷開口部より北東1.5㎞の平石集落を経て、さらに南東0.5㎞の持尾集落へ至る谷間両岸に展開する美しい段状の耕地、約55.7haである。それはいうまでもなく、古代・中世以来千年以上にわたり、代を重ねて営まれきたった棚田を大規模に再造成しようとするものである。棚田の地下には、次章以下で詳細に語られるように、本府分布図にも登載された数多くの文化財が存在し、長い土地の歴史に馴染んで既にこの地域の特徴的な景観を形づくってきた。事業目的に「歴史資源を有効に活用する」ことが謳われている以上、その資源の内容を確認しなければ、文化財遺産の活用もありえない。そこで、文化財保護課は環境農林水産部より依頼を受けて、年度毎に進められる一定面積の事業地を対象とし、それに先立って発掘調査をおこない、地下の遺構・遺物を把握し、その成果に基づいて事業計画にも反映させる方向を選んだ。

平石谷全体にわたる事業地内の埋蔵文化財を前もって確認するべく、平成11年秋より上記の範囲に、１ｍ×２ｍの試掘坑を１１１箇所設けて調査をおこなった結果、従来知られていた情報を検証・補足し、また新たなデータを得ることができた。その最たるものがシシヨツカ古墳の発見であった。個々の調査の経過については、第３章にまとめられているのでそれに譲るが、この11年度の調査結果にしたがってその後の調査計画を立て、年度ごとに谷間の下流より上流にかけて発掘調査を実施した。各年度の調査面積は、平成12年度の加納古墳群で5,105㎡、同13年度の加納古墳群・平石古墳群（シシヨツカ古墳とその周辺）で10,150㎡、同14年度の平石古墳群（駕田古墳とその周辺）で1,399㎡、同15年度の平石古墳群（アカハゲ古墳とその周辺）で5,191㎡、同16年度の平石古墳群（ツカマリ古墳とその周辺）では3,997㎡である。平成17年度および18年度は平石遺跡の調査に移り、それぞれ4,651㎡、1,957㎡の面積を対象として実施した（第２図）。

調査方法については、現耕土・現地表土（主に腐植土）を機械にて除去した後、人力を投入して堆積土層の内容を確認しつつ掘り下げ、遺構・遺物の検出に努めた。検出された遺構、その他の図化については航空測量を行ったが、平成12年度までは日本測地系（国土座標第Ⅵ系）を使用し、以後は世界標準座標値を用いた。本書ではすべて世界測地系に改めている。



第１図　南河内こごせ地区事業位置図



第１図　南河内こごせ地区事業位置図

第２章　地理的および歴史的環境

第１節　地理的環境

河内古刹の一つ、蘇我氏の氏寺と伝える龍泉寺を中腹に抱える嶽山（標高２７８ｍ）、そこからは南河内一帯が一望できる。西方は石川の北流、東方は自然豊かな田園風景、さらにその奥を望めば金剛山地が聳え立つ。金剛山地は、北より二上山（標高５１７ｍ）、葛城山（標高９５９ｍ）、金剛山（標高 1125 ｍ）と連なる府下最高峰の南北延長 48㎞の山塊である。このうち葛城山麓北方に谷の開口部が際立つ場所がある。谷あいには開墾された田畑が広がり、奥には村落が展開している。この谷こそ、加納古墳群・平石古墳群が存在する平石谷である。

加納古墳群・平石古墳群は、大阪府南河内郡河南町加納・平石に所在する古墳時代後期から飛鳥時代にかけての古墳群である（第３図）。

河南町は、大阪府の東南部に位置し、北は太子町、西は富田林市、南は千早赤阪村、東は金剛山地の稜線を境として、奈良県葛城市（旧北葛城郡當麻町・新庄町）と接する東西 6.7㎞、南北 7.5㎞、面積２５.２６㎢、人口 16781 人の町である〔平成 20（2008）年１月末現在〕。河南町は平成 18（2006）年に町制施行 50 周年を迎え、現在は阪南ネオポリスやさくら坂など新興住宅の建設が進み、大阪中心部へのベッドタウンとして発展を遂げている。

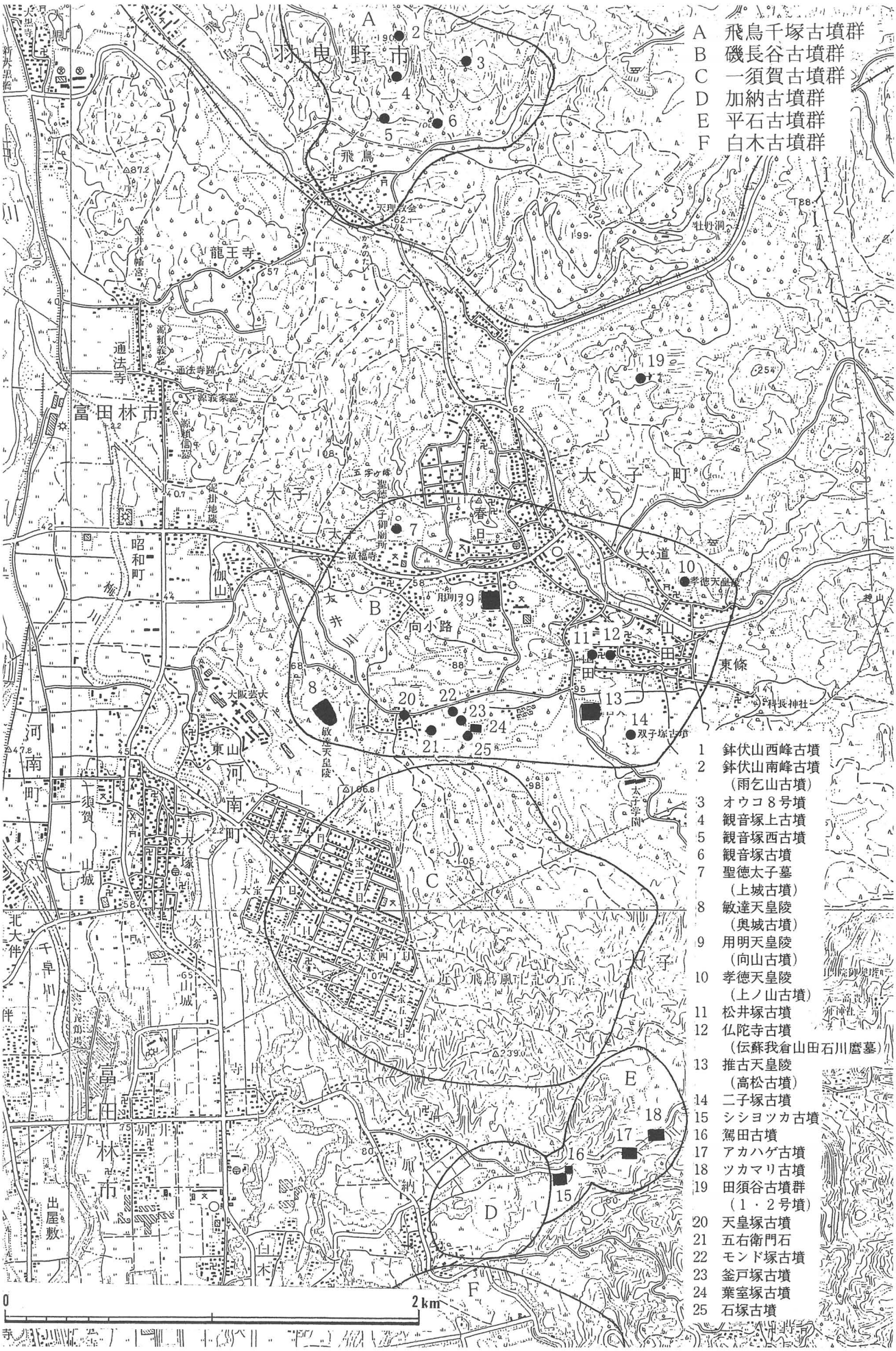
次に、河南町の地形を概観してみると、東西で二分される（第４図）。

東部は葛城山の西麓にあたる山地部である。金剛山地の両翼は対照的で、東麓が急峻な面に対し西麓は緩傾斜面で、いわゆる傾動地塊の地形を有している。葛城山西麓では、北から一の禿山塊、持尾山塊、白木・中村山塊の三つの前山が存在し、階段状の丘陵地形を成している。三つの山塊の谷間には葛城山を水源とする河川が西流し、谷の開口部には発達した扇状地がみられる。

一方、西部は上述した河川の浸食作用によって形成された河岸段丘が広がる台地地形となっている。特に梅川流域（白木・寺田・大ヶ塚）により形成される南北約 3.0㎞、東西約 1.0㎞の河岸段丘は河南台地と称されている。河南台地は、台地上は広い平坦面であり、河川が流れ込む谷間は急傾斜の崖面となる幼年地形の特徴を有する。

さて、当古墳群がある加納・平石地区は、河南町東部北方に位置する。当地区は葛城山系北方の岩橋山（標高６５８.８ｍ）の西麓に位置し、岩橋山を水源とする平石川によって形成された平石谷の谷あいとその先端で発達した扇状地上に展開している地域である。前者に平石、後者に加納（南加納）の集落が広がっている。

平石谷は、一の禿山塊の南麓から平石川に向って幾筋もの尾根が舌状に派生している。これに沿って敷設された府道７０４ 号竹内河南線は「平石七曲がり」と称されるほどである。これらの尾根の中でも突出した尾根の先端を利用して、東からツカマリ古墳、アカハゲ古墳、シシヨツカ古墳といった大形方墳が造営されている。また、シシヨツカ古墳の西約１２０ｍの尾根には加納



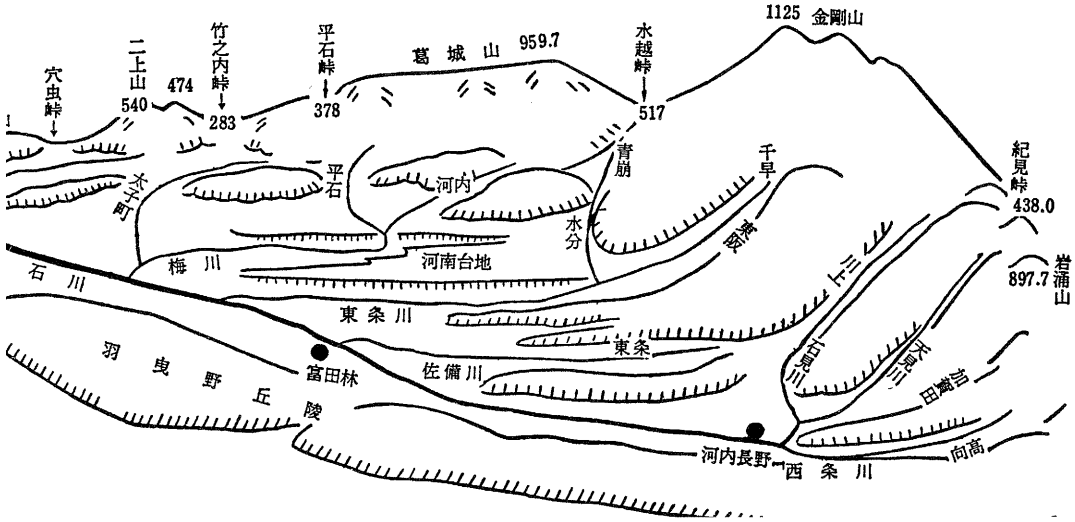
第３図　周辺の古墳分布図（1/25000）

7号墳が、北東に隣接して方墳で双室墳である駕田古墳が築造されている。

平石谷の西端には、一の禿山塊の南西端から平石谷を袋状に包み込むかのように張り出している丘陵がある。この丘陵の頂上付近はすでに削平され、現在は墓地（やすらぎ霊園）となっており、西麓の扇状地上には南加納の集落が立地している。東麓から南麓にかけては平石川に向って尾根が4本派生している。そのうち、最北の尾根の東斜面の腹部から裾部にかけて加納1・2・5・6号墳が築造されている。また最南端の尾根上に1基、西麓に1基の古墳が存在していたらしいが、すでに破壊されており、今は知る由もない。

岩橋山山頂から北に約1.5㎞下ったところに（竹内峠から南に約1.7㎞）、平石峠（標高378 m）がある。平石峠は南河内地方、特に石川上流の山間地域と大和・當麻とを結ぶ交通の要衝であり、このルートは平石嶺道として知られていた。平石嶺道は當麻で竹内街道と合流し、横大路を経て飛鳥へと通じている。平石嶺道を利用すると、平石から當麻までは徒歩1時間ほどで越えられる。

平石峠から西に下山していくと、眼下に平石谷が拡がってくる。平石谷の北方尾根先端にツカマリ古墳とアカハゲ古墳が、その西に加納古墳群、さらに谷の開口部後方に聳える嶽山が遠望できる。加納・平石地区は今でこそ緑美しい里山の風景であるが、古代人は雄大かつ壮大な古墳を北方山手に望みながら、南河内と大和の間を往き来していたに違いない。



第4図　周辺の地形模式図（河南町教育委員会1968年『河南町誌』10頁左図使用）

参考文献

河南町誌編纂委員会　1968 『河南町誌』

大阪府教育委員会　1988 『長尾街道・竹内街道』 歴史の道調査報告書第三集

第２節　歴史的環境

１．平石谷の歴史

平石谷の奇石にまつわる伝承

「天祖以天爾瑞宝十種、授饒速日尊、則此尊禀天神御祖詔、乗天磐舟而天降、坐於河内国河上哮峰」

上記は『旧事記』天孫本記にある一節で、平石谷に関する最古の神話である。天照大神の仰せを受けた饒速日尊は十種の神宝を授かり、天磐舟に乗って河内国河上哮峯に下られた、とある。河上哮峯の所在地に関しては、『河内志』〔享保 19（1734）年〕では「河内国之九　讃良郡」の［山川］の項で紹介されるなど、交野市私市の諸説もある。しかし、江戸時代中期の国学者である阿闍梨覚峯が記した『河内国河上哮峯之考証』や秋里籬島の『河内名所図会』〔享和元（1801）年〕には、平石の磐船山がまさにそうであると記されている。平石の村民は、集落の北に位置する岩船神社の境内にある奇石を磐舟や浪石などと称し、饒速日命が天降りされた場所として信仰し続けている。また、岩船神社の後方（北方）の山を「哮ヶ峯」、この地周辺を「神下山」と称している所以である。

岩橋山西麓や一の禿の山中を散策すると、いたるところに巨岩が点在し、岩盤の山肌が露出しているところが多いことに気づく。また、発掘作業中にも、地山面に直径 1m を優に越す巨石が含まれており、谷部埋土や棚田造成時の盛土に埋められている大石が多い。棚田の所有者に話を伺うと、このような大きい石は耕作時に邪魔で取り除くのにいつも難儀している、とのことである。平石は、「平岩」とも記される時期もあり、その表記の如く平滑な面をもつ巨石が数多く散在している。その中でも奇形なものについては、「天磐船」をはじめとして、岩橋山中に残る「胎内くぐり岩」などと古くから称され、それらにまつわる多くの伝承が今も残っている。

古墳築造以前の平石谷

考古学的に見ると、平石谷では旧石器時代から古墳時代中期にかけての遺構は未確認である。平成 11 年度以降の調査成果をみても、サヌカイト製の石鏃・石槍や縄紋・弥生土器といった遺物は出土しているが、すべて二次堆積層からの出土遺物であり、古墳築造以前の様相はなお不明瞭といわざるをえない。平石谷周辺を見渡してみても旧石器時代の遺跡は希薄であり、二上山麓に残る岩屋峠西方石切場跡まで北上しなければみられない。

縄紋時代の遺跡としては、河南町山城廃寺周辺や寛弘寺遺跡・神山遺跡・本遺跡、太子町植田遺跡がある。寛弘寺遺跡や神山遺跡では早期の押型紋土器、有舌尖頭器、無茎式の石鏃などが出土している。また、神山遺跡では河道内より後期の土器が出土している。住居遺構の検出はなされていないが、集落遺跡が近隣に存在する可能性は高いと考えられている。

弥生時代になると、一の禿山塊の西麓には東山遺跡が、河南台地上には神山遺跡・寛弘寺遺跡がある。前者は、平石谷から北西約 3㎞に位置する中期から後期にかけての高地性集落遺跡である。大阪府教育委員会による昭和 43・44（1968・69）年の調査で竪穴住居が 53 棟検出され

るなど、その成果は学会の注目を浴びている。後者は後期の集落遺跡として知られており、寛弘寺遺跡では小銅鐸なども出土している。

群集墳・大形方墳の登場－加納古墳群・平石古墳群－

南河内では、古墳時代前期に造営された古墳の数こそ少ないが、古墳時代中期になって平野部に古市古墳群などが、さらに古墳時代後期になると金剛山地の山間部に群集墳が形成されはじめる。特に河内三大群集墳の一つである一須賀古墳群は、一の禿山塊の尾根ごとに支群を形成し、総数２５０基ともいわれる古墳が築造されている。一須賀古墳群の周辺にも古墳時代後期から飛鳥時代にかけての古墳群が多数存在しており、一須賀古墳群の北側では磯長谷古墳群や飛鳥千塚古墳群などが、南側では当古墳群のほかに持尾古墳群、白木古墳群、金山古墳などが見られ、西側に寛弘寺古墳群などが存在している。

なお平石谷周辺の各古墳の詳細は次項に記す。

高貴寺・善成寺－弘法大師－

7世紀後半以降、葛城山は役行者が修験道の練行の場として開かれた。開祖とされる役小角は文武天皇の頃、平石村の北東に高貴寺を建立した。当初は香花寺（香華寺・香気寺）と呼ばれ、葛城山の峯々に開いた28ヶ所の霊場のうち25番目の寺院としてその寺名を轟かせた。

奈良時代に平城京、平安時代に平安京へ遷都されて以後、飛鳥・奈良の都とを結ぶ交通の要衝で繁栄したこの地域は次第に衰退していった。だが、平安時代前期、弘法大師が香花寺を訪れ、この地で安居して高貴徳王菩薩を感得したことにより香花寺は高貴寺と改められた。また弘仁12（８２１）年、平石村の入口に善成寺が開基され、天長３（８２６）年に伽藍が建立されるなど、高貴寺の寺域は、村一帯に拡張された。承平４（９３３）年に平岩家に生誕した真興阿闍梨が、仏学を修め密教において子島流を開祖したとされ、この地域でも仏教信仰が盛んであったことが窺える。現在、大門や善成寺の痕跡は遺存していないが、平石の集落内には「大門」「舎利」など、高貴寺の東方には「安居」といった小字名が残っている。

南北朝期－平石城－

善成寺の壇越となった平岩氏は次第に勢力を蓄え、鎌倉時代になって通称城ヶ塚（標高244.5m）の頂上に平石城を築城した。南北朝期、平岩茂直は楠氏の赤阪挙兵に応じて、平石城に後醍醐天皇を迎え入れようとした。しかし、足利氏の軍勢に阻まれ、正平15（1360）年に敗北を喫する。この戦乱時、元弘元（1331）年に高貴寺は戦火を浴び、また善成寺もこの頃に焼失したとされる。

戦乱以降荒地となった平石の様子は、江戸時代前期の『河内鑑名所記』にある狂歌、

過てこしむかしを今もしろあとにその名はかりやのこるひら石

に詠まれ、往時の状況を推測できる。

平石城跡に関する記述は、寛政12（1800）年に菅原長親が作成した碑文が『河内名所図会』の中に記されているにすぎない。碑文の中に「碑碣雖未成風因聴銘書焉」とあり、石碑は建立さ

れるまでに至らなかったようである。

平石城跡は、これまでに発掘調査が実施されておらず、依然として不明瞭である。しかし、平成６年に実施された平石城跡の北西約５００ｍにある松山山城遺跡や蜂ヶ尾遺跡の調査において、平石城の周囲に補助的な設備の存在を示すと考えられる遺構が確認されている。

中世・近世の棚田造成

平石川右岸沿いでは、平成 13 年度の 12･22 調査区で検出された掘立柱建物や、平成 14 年度の第９調査区で検出された石組溝などが確認され、その周囲には奈良時代の土師器・須恵器を主体とする遺物が多数出土している。平石川右岸一帯は遅くともこの頃には開発･開墾の手が入ったと考えられよう。

平石谷がさらに広汎に開墾されたのは、中世以降であった。尾根斜面を削平し、棚田を造成して開発が進められ、耕地面積が拡大された結果、北面の日当たりの悪い左岸一帯も耕地となっていった。江戸時代の慶長の検地〔慶長 13（1608）年〕の記録には、谷あいの平石村の村高は４０４ 石６斗４升２合とあり、平地の南加納村より 40 石余多い。また、『河内国支配帳』によると延宝年間（1673 ～ 1681 年）には４０４ 石余と高貴寺本坊石蔵院灯明料１石８斗であったとある。平石地区の活発な棚田造成がこの資料からも知り得る。

高貴寺中興－慈雲尊者－

江戸時代中期になって、慈雲尊者が南北朝の戦乱以降廃頽していた高貴寺を安永５（1776）年に中興した。彼は梵学・仏学・儒学・神道などを学び、僧侶の育成や袈裟の改革など業績は多大なもので、帰依する人々は在地の人々のみならず、藩主・皇族にまで及んだといわれる。

また、この頃盛んであったお伊勢参りの名残りとして、平石村には明和３（1766）年製の灯籠が現存しており、南加納村にも残っている。

近代－神仏分離令－

明治初年の神仏分離令により、高貴寺と岩船神社は分離され、今の形に整えられた。元弘の兵乱の際に焼失を免れた善成寺地蔵堂も、明治６（1874）年に廃寺となり、地蔵堂は明治 18（1888）年頃に持尾村の真念寺に移転され、本尊の地蔵菩薩像（通称「桜木の地蔵」）は現在高貴寺で祀られている。なお、その用材は境内の「御衣着桜」であったとされている。この桜木については『河内名所図会』の中で観衆の賞美するところが描かれており、名木として知られていたが、現在その面影はない。

２．周辺の古墳（南河内の後・終末期古墳）

前述の通り、南河内には多くの古墳が密集している。古墳時代前期は数こそ少ないが、柏原市玉手山古墳群や松岳山古墳などがあり、寛弘寺古墳群も前期から古墳築造が開始されている。近年では羽曳野市庭鳥塚古墳の調査が実施され、注目を集めた。

古墳時代中期になると、それまで大和に造営されていた大王墓が石川左岸の平野部に移り、古市古墳群が形成される。その中で初期の大王墓とも考えられている津堂城山古墳（全長２０８

m)、誉田御廟山古墳（伝応神陵・全長420 m）や河内大塚山古墳（全長335 m）など200 mを越す前方後円墳が6基、昭和53（1978）年に修羅が出土し話題となった三ツ塚古墳など計123基の古墳から成立している。また、古市古墳群と百舌鳥古墳群の中間に位置する黒姫山古墳（堺市美原区・全長114 m）では、前方部中央の竪穴式石室内から24領分の甲冑をはじめ、大量の鉄製武器・武具が発見され、それらは国史跡に指定されている。

古墳時代後期になると、それまで石川流域の河岸段丘・平野部に多く見られた古墳の分布は、金剛山地の山間部へ移り始め、そこに多くの群集墳が形成されるようになる。南河内では、特にこの時期から飛鳥時代にかけての古墳が多い。

以下に当古墳群周辺に存在する古墳・古墳群を簡潔にまとめておく。

a.一の禿山塊南麓の古墳（バチ川古墳・大原古墳・一須賀P支群など）

一の禿山塊の南麓には、バチ川古墳・大原古墳・一須賀P支群などといった古墳が築造されている。一須賀P支群は一須賀古墳群よりも平石古墳群の様相に類似するので、一の禿山塊南麓に築造された古墳は、バチ川古墳・大原古墳も含め、平石古墳群に含めるのがよいかもしれない。

バチ川古墳・一須賀P－2号墳は無袖式の横穴式石室で、小石室ともよばれるタイプである。側壁材に花崗岩切石を用いていることは、平石古墳群と同様である。大原古墳は奥壁・両側壁・天井石がそれぞれ1石ずつしか残存していないため石室構造は把握しがたいが、石槨状あるいは横穴式小石室を呈する埋葬施設であったと考えられる。なお、アカハゲ古墳・ツカマリ古墳の北方にも古墳があったとされる。府道の北側はかつての宅地造成地域であり（工事は途中で中止)、その工事中に内面のみ加工された石材が掘り出されたという。石材の規模からみて、石室幅1 m前後と推定されているが、すでに消滅してしまっている。

b.一須賀古墳群

八尾市高安古墳群、柏原市平尾山古墳群と並ぶ河内三大群集墳の一つである。一の禿山塊北側の尾根ごとに支群が形成され、総数250基ともいわれる群集墳が密集している。墳丘は直径10～20 mの円墳で、横穴式石室を埋葬施設にもつ古墳が多い。玄室部床面が羨道部のそれよりも低い構造を持つ石室構造や、ミニチュア炊飯具形土器や韓式系土器が副葬される古墳が多く見られるなど、百済系の渡来系氏族との関連が指摘されている。

c.持尾古墳群

岩橋山山頂から西へやや下った標高635 m付近に造営された古墳群である。現在4基が確認されており、内部構造は無袖式の横穴式小石室である（3号墳は未開口)。この4基の付近には横口式石槨の未成品とも考えられている「久米の岩橋」がある。

d.磯長谷古墳群

一の禿山塊の北方に磯長谷がある。ここは難波津と飛鳥を結ぶ最古の官道、竹内街道の通過点でもある。奥城古墳（敏達陵）・向山古墳（用明陵）・高松古墳（推古陵）・上ノ山古墳（孝徳陵）といった歴代大王の陵、上城古墳（聖徳太子墓）・小野妹子・蘇我倉山田石川麿の墓などが存在

していることから、「王陵の谷」とも称されている。これら以外にも松井塚古墳・仏陀寺古墳・御嶺山古墳・小口山古墳・二子塚古墳・田須谷古墳群・葉室古墳などがある。

e．白木古墳群

白木・中村山塊中に位置する古墳群である。昭和40年代後半から昭和50年代にかけての土取り工事により、未調査のまま破壊された古墳も少なくないという。白木山北部においては、住宅団地の建設が計画され、それに伴う調査で白木古墳・白木北古墳が発見された。白木古墳は横口式石槨を埋葬施設にもつ直径10 m程の円墳であり、白木北古墳は石槨部の底石のみが確認されている。山中にはその他にも、横穴式石室墳が存在し、12基周知されているが、現存するものは5基に満たない。また、白木古墳群と加納古墳群の間にも古墳が点在している。俗称ベライト山の頂上付近にも横穴式石室墳が2、3基あるという。さらに、南加納と弘川とを結ぶ道路の東約100 mの丘陵の西麓に右片袖式の横穴式石室墳があるといい、規模は全長5 m、玄室部長3.5 m、幅1.6 m、羨道部長1.5 m、幅1.3 mである。

f．金山古墳

河南町芹生谷にある幅4～6mの周濠を伴う墳丘長85.8mの双円墳である。昭和21(1946)年8月に北丘で全長10.6mの横穴式石室と2個の刳抜式家形石棺が、玄室部と羨道部に1基ずつ安置されていることが偶然に発見され、9月に小林行雄氏らを中心に大阪府教育委員会によって石室の調査が実施された。1993（平成5）年には、河南町教育委員会が調査を実施し、南丘で墓道・排水溝が検出され、これにより南丘にも埋葬施設があることが確認された。築造時期は、石室や石棺の構造により西暦600年前後と考えられている。

金山古墳の西方500 mには同時期の御旅所古墳や御旅所北古墳がある。

g．寛弘寺古墳群

ツギノ木山古墳群とも言われる。千早川と宇奈田川に挟まれた標高90～100 mの丘陵上に築造された古墳群である。1934年（昭和9年）に梅原末治氏が「河内寛弘寺の一古墳」（『近畿古墳墓の調査』）で寛弘寺5号墳の埴輪列について紹介された。以降、発掘調査はしばらく実施されなかったが、府営農地開発事業に伴い大阪府教育委員会が昭和57（1982）年から発掘調査を実施し、これまでに古墳時代前期後半から飛鳥時代にかけて築造された総数100基の古墳、火葬墓、木棺墓、土器棺墓などを検出している。

なお上記以外にも、磯長谷古墳群の北方には飛鳥千塚古墳群があり、6世紀代の横穴式石室墳、観音塚古墳やオーコー8号墳など7世紀に築造された横口式石槨墳が存在する。また石川左岸の羽曳野丘陵上には、お亀石古墳・宮前山古墳（富田林市）、徳楽山古墳・ヒチンジョ池西古墳・小口山古墳（羽曳野市）など、南河内には横口式石槨墳が多く分布している。

第３章　調査・研究史

地誌の編纂－江戸時代－

江戸時代になって地誌類の編纂が盛行し始めたころ、河内国でも延宝７（1679）年に三田淨久によって『河内鑑名所記』が編纂された。これは現存する河内国最古の地誌とされるが、法華寺(北加納)や高貴寺(平石)など加納・平石地区の記述も見られる。江戸時代中期、享保 19(1734)年に発表された並河永の『河内志』にも神下山・石橋（久米の岩橋）などの項目がある。しかし、加納・平石地区の古墳に関する記載は見当たらず、当時まだ認識されるに至っていなかったようである。古墳について触れられるのは、『河内名所図会』の出現を待たなければならない。

『河内名所図会』は、享和元（1801）年に秋里籬島が著し、丹羽桃渓が描いた。全６巻６冊からなり、巻之弐が石川郡を扱っている。中でも、加納・平石地区については、十九から三十の「岩橋」「胎内くぐり」など葛城山中に存在する奇石や、「高貴寺」「岩船明神」「善成寺」の寺社などの描写が表現されている。二十一の「葛城山細圖」には「穴」という文字がみられ、石材を「冂」形に組み合わせている様子が窺える。これは横穴式石室墳の開口部を描いているのではなかろうか。しかし、図中の位置からして岩橋山山頂付近で確認されている持尾古墳群の横穴式小石室４基とは別個の古墳とみられ、岩橋山西麓にはなお多数の古墳の存在が想像できる。また、二十五の「高貴寺門前」には「平石古墳」と記されている。『河内名所図会』の中で古墳は「塚」「穴」で表現され、陵墓には「陵」とするのが一般的である。ここに「古墳」と記すのは実に興味深いが、平石村北方の尾根の山頂より一段低い平地で、石燈が２基あることからすれば、「平石古城」（平石城跡）の誤記の可能性も否定できない。当地区の古墳が世に知られ、研究され始めるのは明治以降であったからである。

梅原末治の研究－近代－

近代に入り考古学研究が進展すると、加納古墳群・平石古墳群を対象とした研究も本格化する。梅原末治氏はそのパイオニアともいえるだろう。梅原氏はこれら古墳群の踏査記録を以下のように紹介している。

まず大正２（1913）年の「河内踏査報告（六）」では、「南河内郡加納村大字北加納字バチ川に一古墳」が存在すると報告している。この古墳は最近までその位置が不明であったが、平成13年に今村道雄・木下光弘両氏の踏査により再確認された（バチ川古墳）。また、「南加納村の東南に連なる小丘陵腹に二個の古墳」、「南加納領内水車東方」に古墳が１基あることも確認されている。

翌大正３（1914）年に「近時調査せる河内の古墳（上）（河内踏査報告八）」の中で、南加納村にある２基の横穴式石室を調査したと報じている。東方にある古墳については、実測図が掲げられている（第５図）。これをみると、両袖式の横穴式石室で、全長 33.79 尺、玄室長 16.19 尺、幅 7.5 尺、羨道長 17.6 尺、幅 5.65 尺を測り、玄室部の最下段の奥壁は横位に１石、

側壁は両側ともに縦位に３石据えており、奥壁・側壁ともに２段積みの構成である。羨道部は両側ともに４石を縦位に１段積む。羨道部右側壁先端にはその終止符を示すらしき、小形の石材を置いている。玄室内奥壁付近には箱式石棺と思われる棺を設置し（長さ 6.1 尺）、玄門には仕切り石が敷かれている。梅原氏が報告したこの２基の古墳は、従来は加納１・２号墳とも考えられていたが、大阪府教育委員会による平成 12 年度（2000）の調査成果によって別個の古墳であることが明らかとなった。

『白木村誌』・『河南町誌』の編纂－昭和 30・40 年代－

昭和 32（1957）年に発刊された『白木村誌』では、加納古墳群・平石古墳群は白木古墳群の呼称でまとめて紹介されている。加納地区を中心に「いずれも径数尺にも達する大きな石をもつて築き上げた円墳」であり、「既に発掘せられたり、破壊せられて石を他に持ち去られたものが多い」とある。また、

・大字加納字バチ川（北加納）の山上櫟林の中に南面して後期式の円墳がある。切石で周壁をめぐらし技巧の進んだ古墳として珍しいものである。

・北加納の南の墓山の東麓に、二つの古墳が東南に向つてあらわれている。一部破壊されている。

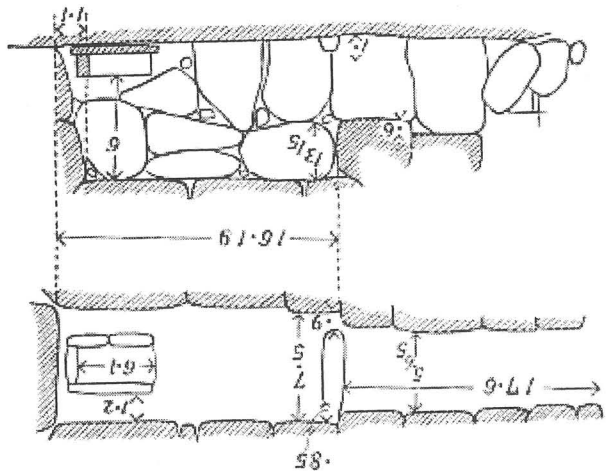
・府道富田林高田線の平石の西方三百米程の南側水田の傍（府道から十米位の地）に二個所南に向つて横穴古墳の口が開いている。

との記載があり、バチ川古墳、加納１・２号墳、アカハゲ古墳、ツカマリ古墳を含む８基の古墳の紹介と一須賀古墳群の様相を述べている。

その後、昭和 43（1968）年に『河南町誌』が編纂され、その附篇に「河南町の古墳」が収録された。そこに昭和 40（1965）年に行われたアカハゲ古墳の内部調査の報告がある。これについては次項に記すとして、ここでは「四、加納、白木地域に散在する墳墓遺跡」に記されている古墳の状況を列記しておく。

・ベライト山（標高２４０m 余・白木領）の頂上付近に横穴式石室墳がある。石室は、南を向いて開口し、花崗岩の自然石をもって構築している。石室南半部が崩壊している。現況は全長約３m、内部幅２m、高さは 1m 内外（土砂流入のため詳細不明）。

・南加納と弘川とのほぼ中程あたりの道路の東方約１００ m附近の丘陵の西麓に横穴式石室がある。全長５m、玄室長 3.5 m、幅 1.6 m、羨道部長 1.5 m、幅 1.3 m、高さ 1.5 m余を測る（土砂流入のため詳細不明）。梅原末治の南加納領内水車東方の古墳と同じである。



第５図　南加納村の横穴式石室

（梅原末治1914年論文所収図を使用）

・アカハゲ古墳の背後、府道の北方は宅地造成の開発が進められていたが、昭和39年8月、その工事中に古墳が発見されるも破壊された。残存した石材から石室は切石組で内部の広さは1m内外と推測される。

他方、加納古墳群については、1号墳、2号墳の存在が明らかにされている。

1号墳は、南面して開口しているが、大部分が破壊され、玄室の奥壁と両側壁の一部、それに一つの天井石のみが残存していた。石材は花崗岩の割石を用いているが、天井石付近まで土砂が堆積しているため、石室の規模等は明らかにされていない。1号墳の南にある2号墳は、羨道部の一部が破壊されているものの、玄室は完存していた。1号墳同様花崗岩の割石をもって架構されている。開口部からの土砂の流入によって石室内部へは進入できない状況であり、目測で長さ約4m、幅約2mと報告されている。

アカハゲ古墳の調査－昭和40年－

『河南町誌』の編纂に際して、昭和40年にアカハゲ古墳の内部調査が実施された。

全長9.66mの花崗岩切石を組み合わせた「横口式とも称すべき構造をもつ石室」であり、「奥室・玄室・羨道の三つの部分」で構成されている。奥室は長さ2.3m、幅1.5m、高さ1.14m、玄室は、長さ3.36m、幅1.84m、高さ1.5m、羨道は長さ残存4m、幅1.8m、高さ1.5mを測る。奥室の床面は、玄室のそれよりも約0.1m高く、底石中央部に長さ1.86m、幅0.66m、厚さ0.01mの漆喰が残存していた。西側と北側に残る漆喰の一辺はほぼ直線で、それらが直交することから棺台として塗布されたものとされた。玄室部の床面は地山層の上に厚さ約0.06mの砂礫層を敷き、その上に厚さ約0.05mに平面長方形に粗く加工した榛原石を敷いていた。玄室部と羨道部との境界には厚さ約0.04m、短辺の長さ約0.2mの長方形に加工した榛原石の板石が長辺を横にして埋め込まれていた。閉塞施設は、奥室部と羨道部の2箇所に見られた。奥室入口の天井石と左右側壁の木口にあたる箇所に縁取りが施され、玄室部で縁取りが施された厚さ0.08mの板石片が出土した。よって奥室部が1枚の板石で閉塞されていたと考えられた。また、羨道部には人頭大の玉石を5～8石並べて小口積みとしていた。

出土遺物は、朱彩漆塗網代編容器破片（漆塗籠棺片）や鉄釘、ガラス製扁平管玉が出土した。また、盗掘時期を示唆する須恵器片2片（白鳳期）や瓦器片25点、4個体分も見つかっている。

この調査では内部調査にとどまり、墳丘の規模等は確認されなかった。そこで棚田の現状により10m前後の円墳であろうとされている。

分布調査－昭和45・46年－

大阪府教育委員会は、昭和45（1970）・46（1971）年度の2年度にわたり近つ飛鳥地域一帯の分布調査を実施した。その成果は『近飛鳥遺跡分布調査概要』で報告されているが、その中に加納1号墳、加納2号墳の踏査報告がある。前者は「横穴式石室（自然石）半壊長さ7m、幅1.5m」とあり、後者は「横穴式石室　玄室　長さ3.2m　幅2.8m　片袖式、漆くい残存　完存」と記されている。それ以外に、古墳は発見されなかったのだろうか、それともすでに消

1　加納古墳群１号墳
2　同２号墳
3　同５号墳
4　同６号墳
5　同７号墳
6　平石古墳群シシヨツカ古墳
7　同アカハゲ古墳
8　同ツカマリ古墳
9　同大原古墳
10　同大原２号墳
11　同バチ川古墳
12　同バチ川２号墳
13～16　同ツカマリ北古墳地
17～19　一須賀古墳群Ｐ支群２～４号墳
20～23　同Ｍ支群２－５号墳
24　駕田古墳

第６図　平石谷古墳分布図

滅してしまっていたのだろうか、加納古墳群の報告はこの２基のみである。

昭和 50（1975）年に山本彰氏も加納・平石地区の古墳を踏査しており、加納１号墳については「自然石を積んだ横穴式石室で玄室のみが露出しており、当時の現状で奥壁・側壁ともに３段から４段を確認できる」、「天井石は最も奥のものが１石残るのみであった。幅は奥壁部で 1.55 メートル、手前で 1.71 メートル、長さは西壁で 2.40 メートル、東壁で 1.82 メートルを測る」と記録されている。

ツカマリ古墳の調査－昭和 54 年－

昭和 54（1979）年にはアカハゲ古墳東に隣接するツカマリ古墳の石室の内部調査が行われた。調査の結果によると、主体部はアカハゲ古墳同様、奥室と羨道からなる花崗岩切石を組み合わせた石棺式石室（横口式石室）で、石室内部は奥室の長さ 2.3 m、幅 1.31 m、高さ 1.31 m、羨道の長さ 5.2 m、幅は奥で 1.6 m、入口で約 1.85 m、高さ約 1.6 mを測る。奥室床石は羨道部まで約 1.3 m張り出しており、この上に二上山西方の寺山産の寺山青石（石英安山岩）を加工した扉石が載せられていた。羨道部床面には磚状に加工された榛原石が二重に敷きつめられ、羨道南端には人頭大の石を６段以上積み上げた閉塞石が確認された。遺物としては、漆塗籠棺、夾紵容器、緑釉陶製棺台、ガラス製扁平管玉、丸玉、七宝飾銀製刀子飾金具、金象嵌竜文大刀、金製コイル状金具、金糸などが出土した。この調査では外部調査が実施されなかったため、墳丘の形状、規模は不明で、当時の棚田の形状から 10 ～ 20 mの円墳と推測された。

この古墳の発掘調査以来、先のアカハゲ古墳とともに、これら平石谷の２基の横口式石槨墳は学界でもより一層注目されるようになる。奈良国立文化財研究所飛鳥資料館では昭和 54 年度に大和・河内の終末期古墳を中心とした特別展示「飛鳥時代の古墳－高松塚古墳とその周辺－」が開催したが、平石谷の古墳もその中で紹介された。その特別展図録『飛鳥時代の古墳』には、当時未公表であったツカマリ古墳の資料も掲載されている。また、日本考古学協会昭和 55 年度大会「終末期古墳の諸問題」では、調査を担当した北野耕平氏が「大阪の終末期古墳」の演題でツカマリ古墳の調査成果を発表している。

なお、ツカマリ古墳の石室構造について、北野氏は、平成 14 年（2002）に奈良県香芝市立二上山博物館開催『二上山麓の終末期古墳と古代寺院』の展示図録の解説で、「南に開口した横口式石槨で、奥室と前室からなる」とし、それまで氏が用いていた「羨道」を「前室」に改め、閉塞石の南方に羨道施設が付属するとの可能性を指摘されている。

大阪府教育委員会による試掘・発掘調査－平成 11 ～ 18 年度－

以上のようにアカハゲ古墳・ツカマリ古墳の研究が注目され、平石谷の考古学的重要性が認識されていったが、国の推進する中山間地域総合整備事業（「南河内こごせ地区」）がついにこの谷間にも及ぶこととなった。平石谷一帯の圃場整備に先立ち、まず平成 11 年度（1999）に加納・平石地区で試掘調査、続く平成 12 年度（2000）より平成 16 年度（2004）まで、５年にわたって加納古墳群・平石古墳群の発掘調査を、また平成 17 年度から 18 年度の２年にわたって現平

石集落を中心とする谷間一帯に分布する平石遺跡を調査した（第６図）。その調査結果は既刊概要報告８冊をもって公にしている。各年度の調査内容の概略は以下の通りである。

平成11年度　加納・平石地区の試掘調査。アカハゲ古墳・ツカマリ古墳の墳丘に貼石（概要では「集石」）が施されていることが確認され、アカハゲ古墳直下の№20試掘坑からは黄褐釉円面硯の蓋片が出土した。また№62試掘坑で天井石２石と版築状盛土層が確認された。新規発見になる古墳で、地籍に残る字名よりシシヨツカ古墳と命名された。

平成12年度　加納古墳群の調査。従来から知られていた１・２号墳と、新たに発見された５・６号墳を調査した。中でも２号墳は遺存状況は良好で、石室内には赤色彩紋入り黒漆鞘入り大刀や須恵器などが副葬されていた。

平成13年度　シシヨツカ古墳の調査。東西約60mを測る壇の上に３段築成された方墳で、花崗岩の切石を用いた奥室・前室・羨道を備えた石槨を内部構造とすることがわかった。一方で、前年度に引き続き加納古墳群の調査も実施された（墳丘規模確認、墳丘・石槨断ち割りなど）。加納７号墳が新規発見された。

平成14年度　駕田古墳の調査。シシヨツカ古墳の北東に接する尾根端に１墳丘２石室を有する双槨墳が新規発見された。小谷を挟んだ古墳の東方では奈良時代の導水用石組溝が検出された。

平成15年度　アカハゲ古墳の調査。従来は、直径10～20ｍの円墳と推測されていたが、東西約70ｍの壇上に３段築成の墳丘が載る方墳であることが確認された。

平成16年度　ツカマリ古墳の調査。アカハゲ古墳同様、直径10～20ｍの円墳とされていたが、アカハゲ古墳よりもさらに規模が大きい東西80ｍ以上の壇に築かれた３段の方墳であることが確認された。

平成17年度　平石集落付近の調査。「舎利」「大門」などの小字が残る周辺の調査。38～41区で９～10世紀の建物跡などが検出された。

平成18年度　ツカマリ古墳の東方、平石川を隔てた右岸の中世棚田造成痕の調査。

圃場整備によって古い地形が大きく改変され、旧来の景観を復し難い面は否めないが、一方ではこのような大規模な開発に伴う調査によって、従来の知見を検証し、補う結果を得たのも事実である。すなわち、昭和40年のアカハゲ古墳、昭和55年のツカマリ古墳の内部調査によって、この２基の古墳は全国的に広く注目され、飛鳥時代の古墳の内部構造を考察する上に不可欠のデータを提供した。本府教育委員会による調査では、シシヨツカ古墳、アカハゲ古墳、ツカマリ古墳がともに大形墳丘施設を備えていたことを確認し、加納古墳群についても、新に加納5･6･7号墳の発見があった。それら多くの情報が蓄積されつつある今、地下に保存された平石谷のこれら２つの古墳群の保護と活用を図る段階がきているように思われる。

第４章　加納古墳群の調査成果

第１節　加納１号墳

１．調査前の地形（第７～10図）

１号墳は、調査区の北西、尾根の東斜面腹部に築造された横穴式石室墳であり、昭和45・46年度の分布調査によって石室長7.0 m、幅1.5mの自然石で築造されたこと（半壊状態）が確認され、玄室部は奥壁・側壁ともに３～４段積みと推測されてきた。しかし記録保存されることもなく、昭和45～50年に羨道上部が、平成２年頃までには玄室上部までも破壊されてしまった。調査前は、石室の上面は整地され、平成９年12月から翌年１月にかけて建てられた農作業用の納屋が１棟あった。また、その北側斜面には陶芸用の登り窯とその覆屋が造られていた。このような状況であったため、発掘調査を実施するまでは石室の位置や残存状況を確認できなかった。ただ納屋南側の里道直下の盛土層中に羨道部側石（もしくは天井石）の転落石と思われる石材１石の露出が認められたに過ぎない（第７・８図）。

２．墳丘（第11・12図）

（1）墳丘の形状と規模　　墳丘は、尾根腹部の高さがT.P.113.5 m付近に築造され、墳丘西側で検出された周溝の形状および墳丘盛土横断面（第12図）から、径約16 mの円墳とわかる。残存状況は、石室上部及び墳丘東側が後世にＬ字形に大きくカットされるが、墳丘西側の残りは比較的良好だった。尾根の斜面に築造されているため、整った円形とはいえない。

墳丘の高さは、墳頂が削平されているため判然としない。残存墳丘高は、T.P.116.7mであるから、羨門部床面の高さT.P.113.4 mとの比高差が約3.3 mを測る。墳丘東側裾部の高さT.P.112.4 mとの比高差は約4.3 mを測り、墳丘盛土層の残存状況と考え合わせると、おそらく羨門部の床面より墳丘の高さは４m程度と思われる。

（2）墳丘の構造　　１号墳の築造前の旧地形は尾根の斜面地であったため、石室予定地となる周辺の地山層をカットし整形する必要があった。第12図の①（玄室部）第46～48・106～114層が墳丘築造時に盛土された整地土層に相当し、石室予定地西側の地山を削って0.2～0.3 mの厚さに盛り水平を得ている。整地土層はT.P.113.5 mで平坦面となる。

整地後、墳丘東側に溝１条を設けている（第12図第105層）。これはこの地点が旧地形の尾根からの流水に見まわれやすい場所であり、その排水のために掘削したと思われる。溝埋土上面に墳丘盛土が盛られていることからすると、石室予定地を整地して石室を構築するまでの間には少なからず時間の経過があったらしく、その間に機能していた溝であったと考えられる。

石室を構築する際、まず長さ9.1 m、幅4.2mの墓壙状となるように、墳丘東側に黄褐色系の粘性のある砂質土を主体にブロック状に積み上げて盛っている（墳丘盛土Ｉ）。墳丘盛土Ｉの上面は石室基底石の高さとほぼ同じである。その後掘方を設け、石室基底石を据え置き、裏込土

を積み上げていく。墳丘東側は、石室２段目以上が残っていないため、盛土の状況はわからない。

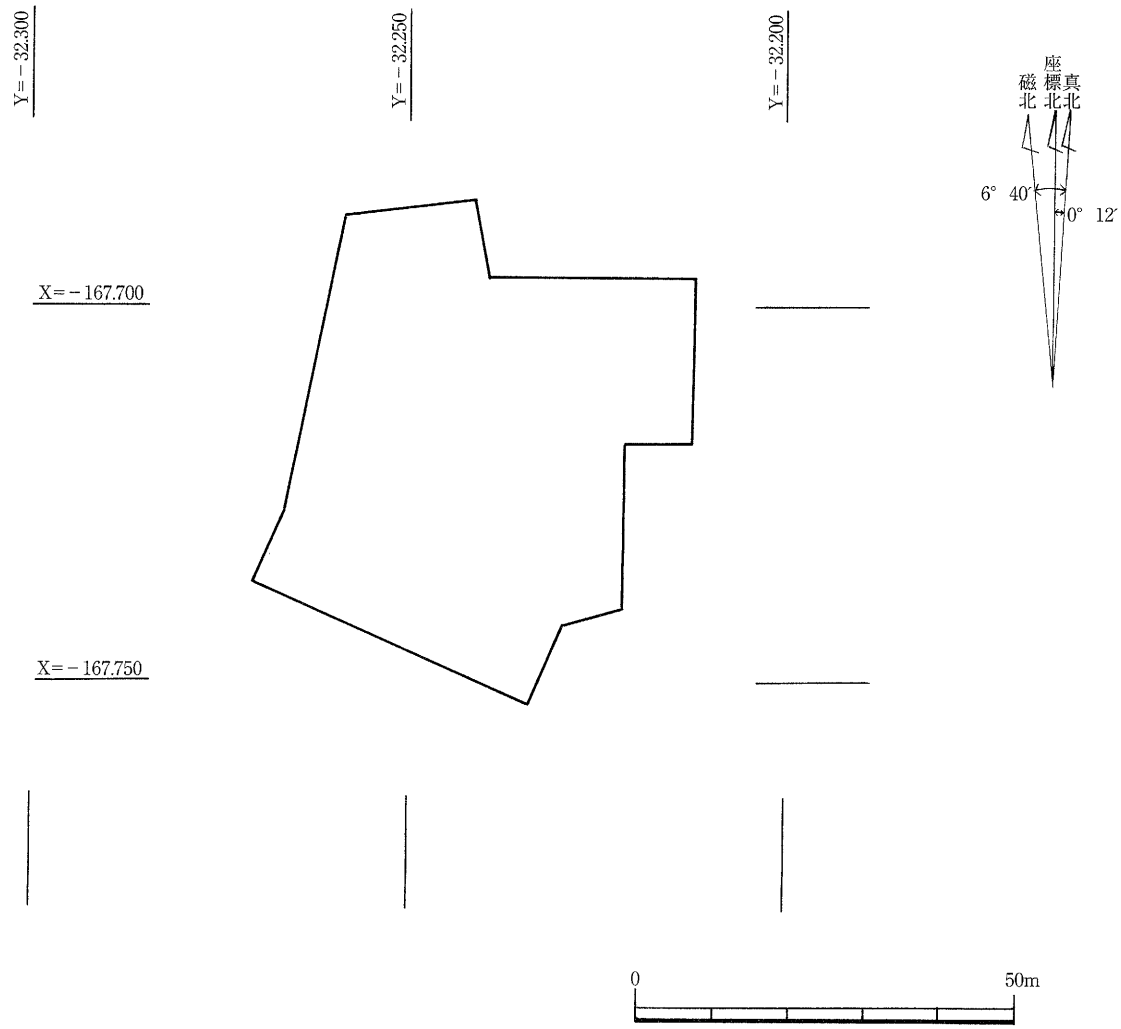
墳丘西側は、カットされた地山面と基底石との間に褐色系の粘質土を厚さ０.１～０.３ｍで水平に積んでいる。同様に２段目、３段目となる側石材を構築し、裏込土を積んでいる（墳丘盛土Ⅱ）。天井石横架後は、石室上面付近は明褐色系の砂質土を主体として層厚約０.１ｍの間隔で水平に盛土している（墳丘盛土Ⅲ）。

３．外部施設（第11・12図）

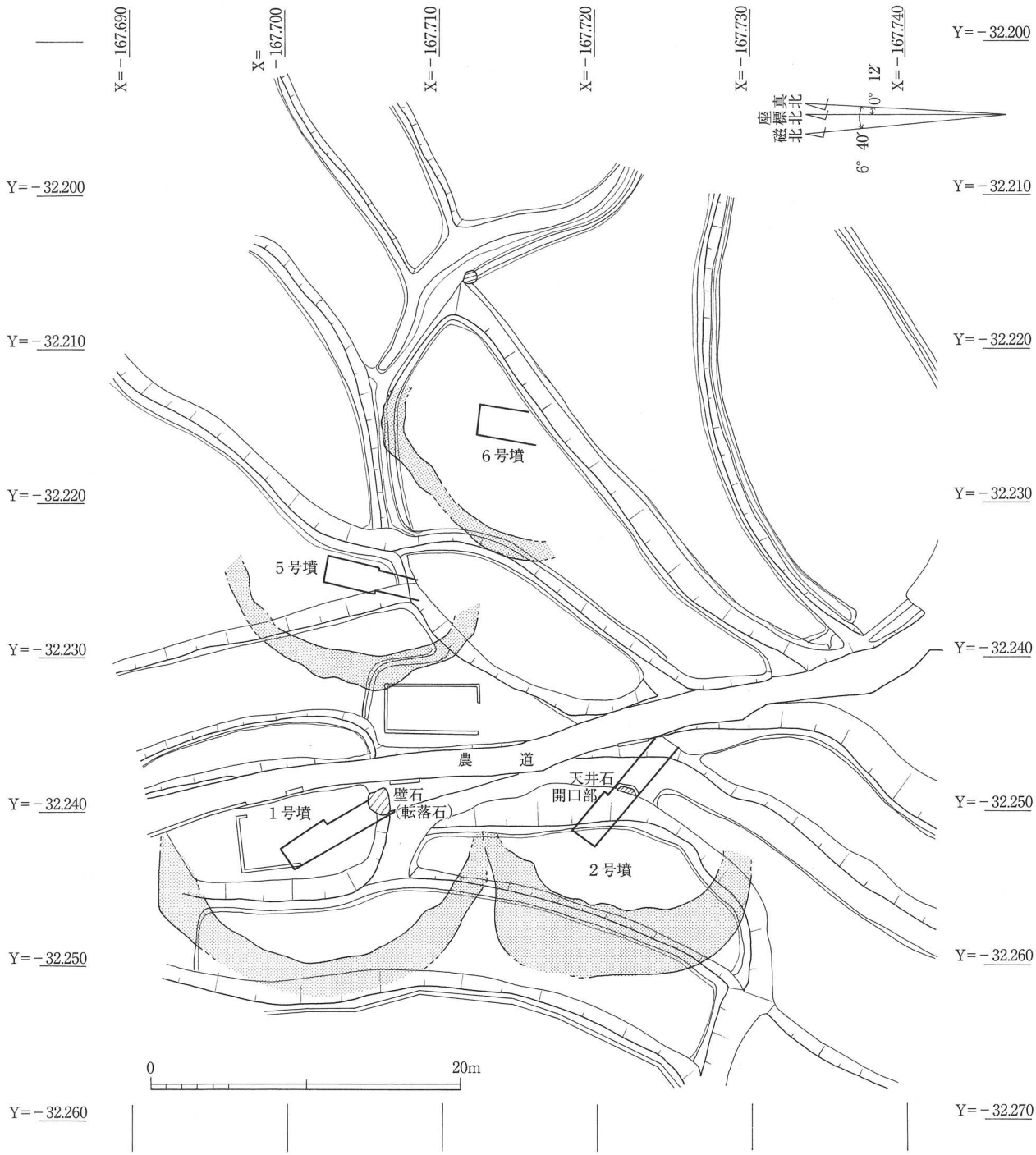
墳丘西側で周溝を検出した。周溝は幅約３～４ｍ、深さ約1m、断面は椀形で、墳丘西側を廻っている。周溝埋土は２層に大別でき、上層は黒褐色を呈する泥炭質の土で、下層は尾根からの自然流土による堆積層であった。埋土中より遺物は出土しなかった。周溝は丘陵斜面と墳丘とを区画するとともに、尾根からの土砂、流水による被害を防ぐためで、掘割的な機能を果たしていたと考えられる。したがって周溝の掘り込みは墳丘西半部に限られていたようである。１号墳の築造位置から考えても周溝は必要不可欠な施設であったろう。

４．埋葬施設（第13～15図）

(1) 石室の概略　　埋葬施設は、花崗岩の割石で構成された左片袖式の横穴式石室である。石

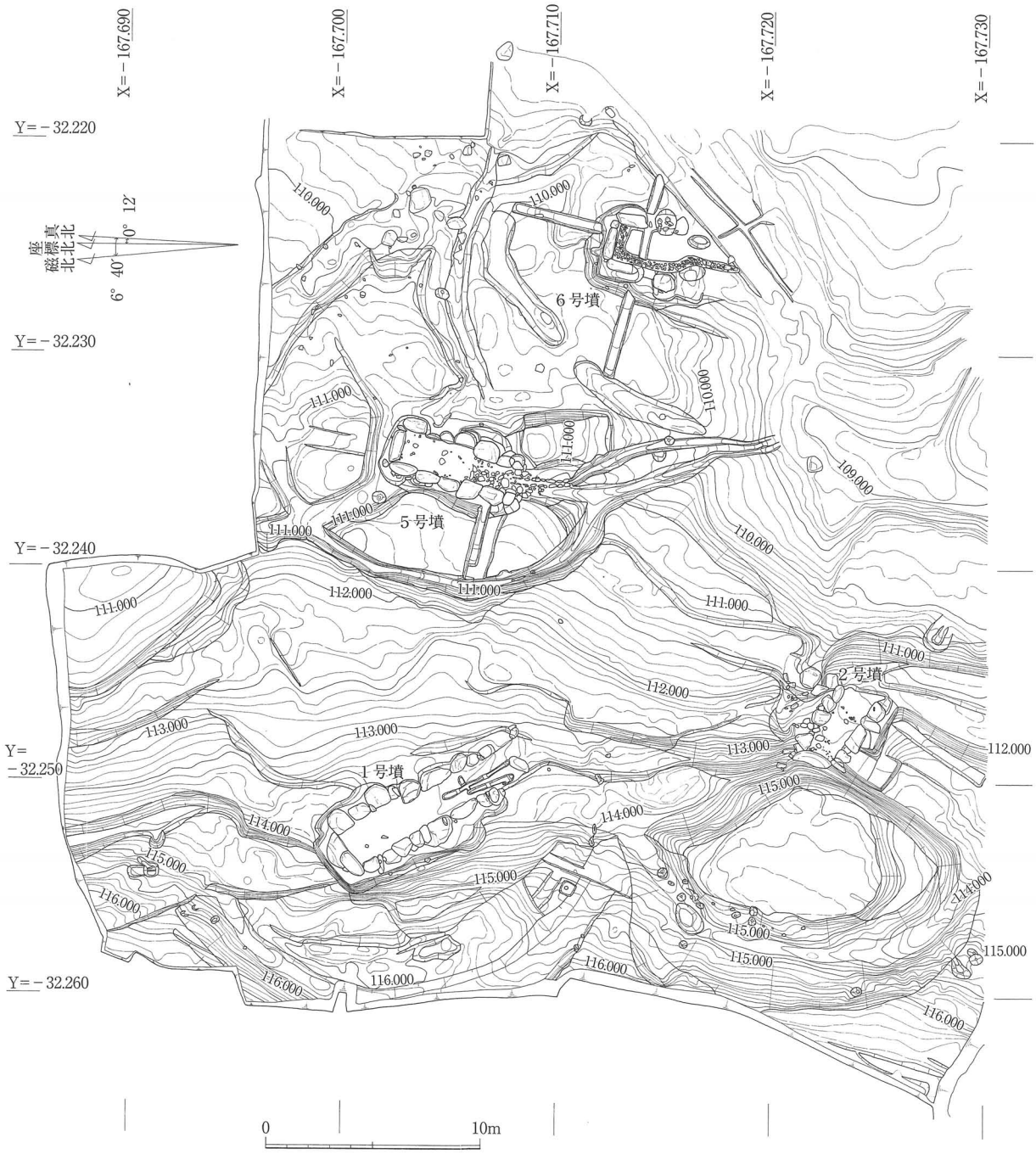


第７図　平成12年度９区（平成13年度第Ⅰ調査区）位置図（1/1000）

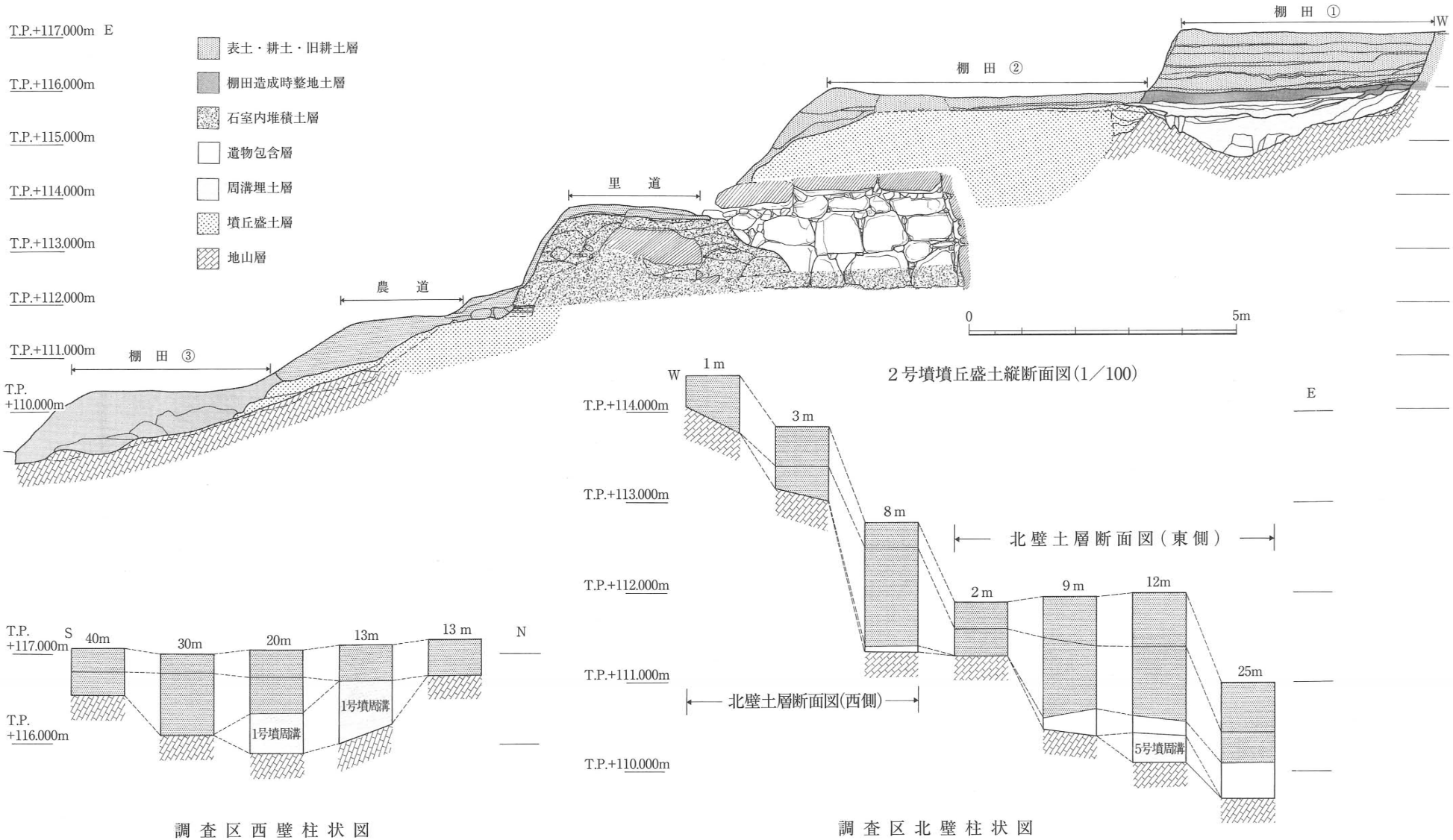


第８図　加納古墳群調査前地形図（古墳位置を重ねて表示）(1/400)

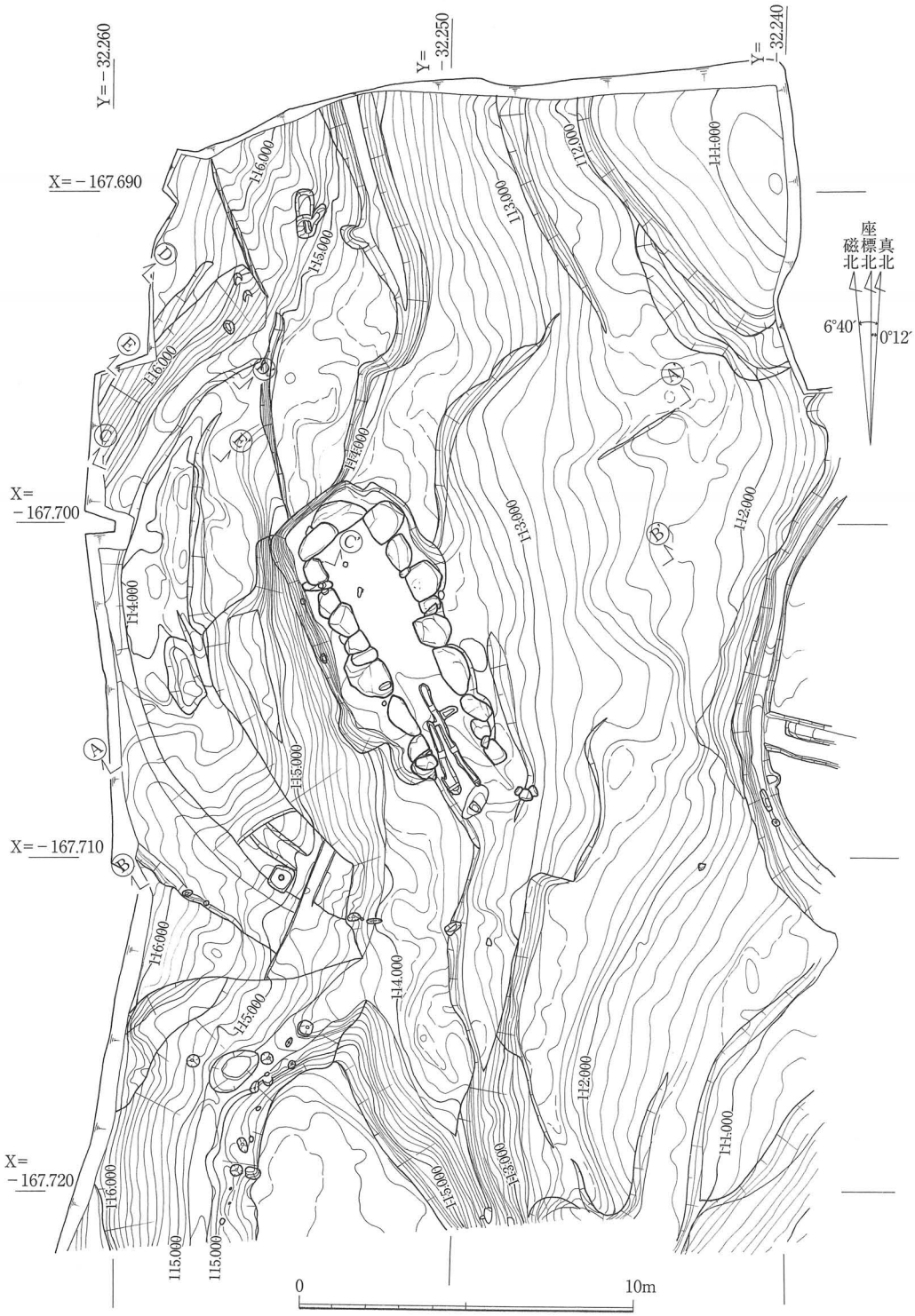
室の主軸方向はN-21° 30′-Wを示し、南南東に開口する。玄室部と羨道部からなり、羨道部先端には約2.7 mの墓道が付く。後世の撹乱で石室上部は消失していたが、基底石は完存していた。奥壁、右側壁には、基底石の間隙に谷積みされた間詰め石や２段目側石材が残存しているところもあった。規模は、石室長7.72 m(墓道も含めると約10.5 m)、玄室長3.24 m、玄室幅1.9 m、



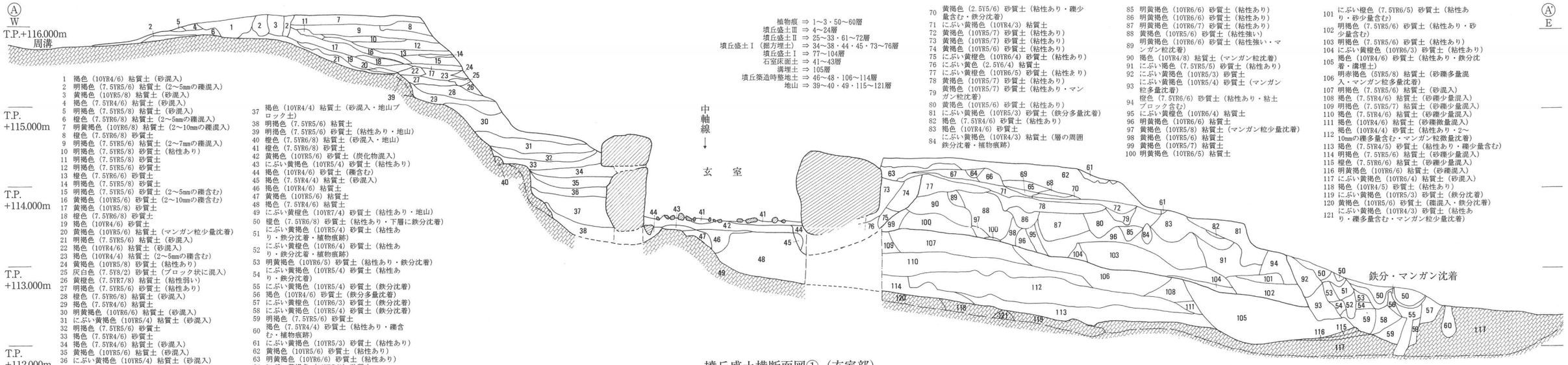
第９図　加納古墳群全体図（1/300）



第10図　調査区北壁断面柱状図（1/100）



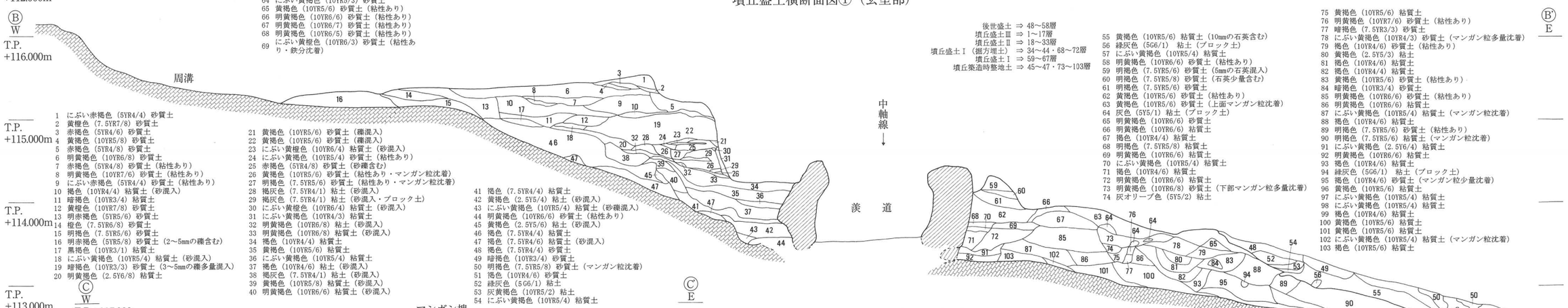
第11図　加納1号墳全体図（1/200）



1 褐色（10YR4/6）粘質土（砂混入）
2 明褐色（7.5YR5/6）粘質土（2～5mmの礫混入）
3 黄褐色（10YR5/8）粘質土（砂混入）
4 褐色（7.5YR4/6）粘質土（砂混入）
5 明褐色（7.5YR5/8）粘質土（砂混入）
6 橙色（7.5YR6/8）粘質土（2～5mmの礫混入）
7 明黄褐色（10YR6/8）粘質土（2～10mmの礫混入）
8 橙色（7.5YR6/8）砂質土
9 明褐色（7.5YR5/6）粘質土（2～7mmの礫混入）
10 明褐色（7.5YR5/8）砂質土（粘性あり）
11 明褐色（7.5YR5/8）砂質土
12 明褐色（7.5YR5/6）砂質土
13 橙色（7.5YR6/6）砂質土
14 明褐色（7.5YR5/8）砂質土
15 明褐色（7.5YR5/6）砂質土（2～5mmの礫含む）
16 黄褐色（10YR5/6）砂質土（2～10mmの礫含む）
17 黄褐色（10YR5/8）砂質土
18 橙色（7.5YR6/8）砂質土
19 褐色（10YR4/6）砂質土
20 黄褐色（10YR5/6）粘質土（マンガン粒少量沈着）
21 明褐色（7.5YR5/6）粘質土（砂混入）
22 褐色（10YR4/6）粘質土（砂混入）
23 褐色（7.5YR4/6）粘質土
24 黄褐色（10YR5/8）砂質土（粘性あり）
25 灰白色（7.5YR/2）砂質土（ブロック状に混入）
26 黄橙色（7.5YR7/8）粘質土（粘性弱い）
27 明褐色（7.5YR5/6）砂質土（粘性あり）
28 橙色（7.5YR6/8）粘質土（砂混入）
29 褐色（7.5YR4/6）粘質土
30 明黄褐色（10YR6/6）粘質土（砂混入）
31 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土（砂混入）
32 明褐色（7.5YR5/6）砂質土
33 褐色（7.5YR4/6）砂質土
34 褐色（7.5YR4/6）粘質土（砂混入）
35 黄褐色（10YR5/6）粘質土（砂混入）
36 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土（砂混入）
37 褐色（10YR4/4）粘質土（砂混入・地山ブロック土）
38 明褐色（7.5YR5/6）粘質土
39 明褐色（7.5YR5/6）砂質土（粘性あり・地山）
40 橙色（7.5YR6/8）粘質土（砂混入・地山）
41 橙色（7.5YR6/8）砂質土
42 黄褐色（10YR5/6）砂質土（炭化物混入）
43 にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土（粘性あり）
44 褐色（10YR4/6）砂質土（礫含む）
45 褐色（7.5YR4/4）粘質土（砂混入）
46 褐色（10YR4/6）粘質土
47 黄褐色（10YR5/6）粘質土
48 褐色（7.5YR4/6）粘質土
49 にぶい黄橙色（10YR7/4）砂質土（粘性あり・地山）
50 橙色（7.5YR6/8）砂質土（粘性あり・下層に鉄分沈着）
51 にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土（粘性あり・鉄分沈着・植物痕跡）
52 にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土（粘性あり・鉄分沈着・植物痕跡）
53 明黄褐色（10YR6/5）砂質土（粘性あり・鉄分沈着）
54 にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土（粘性あり・鉄分沈着）
55 にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土（鉄分沈着）
56 褐色（10YR4/6）砂質土（鉄分多量沈着）
57 にぶい黄橙色（10YR6/3）砂質土（鉄分沈着）
58 にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土（鉄分沈着）
59 明褐色（7.5YR5/6）砂質土
60 褐色（7.5YR4/4）砂質土（粘性あり・礫含む・植物痕跡）
61 にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土（粘性あり）
62 黄褐色（10YR5/6）砂質土（粘性あり）
63 明黄褐色（10YR6/6）砂質土（粘性あり）
64 にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土
65 黄褐色（10YR5/6）砂質土（粘性あり）
66 明黄褐色（10YR6/6）砂質土（粘性あり）
67 明黄褐色（10YR6/7）砂質土（粘性あり）
68 明黄褐色（10YR6/5）砂質土（粘性あり）
69 にぶい黄橙色（10YR6/3）砂質土（粘性あり・鉄分沈着）
70 黄褐色（2.5Y5/6）砂質土（粘性あり・礫少量含む・鉄分沈着）
71 にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土
72 黄褐色（10YR5/7）砂質土（粘性あり）
73 黄褐色（10YR5/7）砂質土（粘性あり）
74 黄褐色（10YR5/6）砂質土（粘性あり）
75 にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土（粘性あり）
76 にぶい黄色（2.5Y6/4）粘質土
77 にぶい黄橙色（10YR6/5）砂質土（粘性あり）
78 黄褐色（10YR5/7）砂質土（粘性あり）
79 黄褐色（10YR5/7）砂質土（粘性あり・マンガン粒沈着）
80 黄褐色（10YR5/6）砂質土（粘性あり）
81 にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土（鉄分多量沈着）
82 褐色（7.5YR4/6）砂質土（粘性あり）
83 褐色（10YR4/6）砂質土
84 にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土（層の周囲鉄分沈着・植物痕跡）
85 明黄褐色（10YR6/6）砂質土（粘性あり）
86 明黄褐色（10YR6/6）砂質土（粘性あり）
87 明黄褐色（10YR6/7）砂質土（粘性あり）
88 黄褐色（10YR5/6）砂質土（粘性強い）
89 明黄褐色（10YR6/6）砂質土（粘性強い・マンガン粒沈着）
90 褐色（10YR4/8）粘質土（マンガン粒沈着）
91 にぶい褐色（7.5YR5/5）砂質土（粘性あり）
92 にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土
93 にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土（マンガン粒多量沈着）
94 橙色（7.5YR6/6）砂質土（粘性あり・粘土ブロック含む）
95 にぶい黄橙色（10YR6/4）粘質土
96 明黄褐色（10YR6/6）粘質土
97 黄褐色（10YR5/8）粘質土（マンガン粒少量沈着）
98 黄褐色（10YR5/6）粘質土
99 黄褐色（10YR5/7）粘質土
100 明黄褐色（10YR6/5）粘質土
101 にぶい橙色（7.5YR6/5）砂質土（粘性あり・砂少量含む）
102 明褐色（7.5YR5/6）砂質土（粘性あり・砂少量含む）
103 明褐色（7.5YR5/6）砂質土（粘性あり）
104 にぶい黄橙色（10YR6/3）砂質土（粘性あり）
105 褐色（10YR4/6）砂質土（粘性あり・鉄分沈着・溝埋土）
106 明赤褐色（5YR5/8）粘質土（砂礫多量混入・マンガン粒多量沈着）
107 明褐色（7.5YR5/6）粘質土（砂混入）
108 褐色（7.5YR4/6）粘質土（砂礫少量混入）
109 明褐色（7.5YR5/7）粘質土（砂礫少量混入）
110 褐色（7.5YR4/6）粘質土（砂礫少量混入）
111 褐色（10YR4/6）粘質土（砂礫微量混入）
112 褐色（10YR4/4）砂質土（粘性あり・2～10mmの礫多量含む・マンガン粒微量沈着）
113 褐色（7.5YR4/5）砂質土（粘性あり・礫少量含む）
114 明褐色（7.5YR5/6）粘質土（砂礫少量混入）
115 橙色（7.5YR6/6）粘質土（砂礫少量混入）
116 明黄褐色（10YR6/6）粘質土（砂礫混入）
117 にぶい黄褐色（10YR6/4）粘質土（砂混入）
118 褐色（10YR4/5）砂質土（粘性あり）
119 にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土（鉄分沈着）
120 黄褐色（10YR5/6）砂質土（礫混入・鉄分沈着）
121 にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土（粘性あり・礫多量含む・マンガン粒少量沈着）

植物痕 ⇒ 1～3・50～60層
墳丘盛土Ⅲ ⇒ 4～24層
墳丘盛土Ⅱ ⇒ 25～33・61～72層
墳丘盛土Ⅰ（掘方埋土） ⇒ 34～38・44・45・73～76層
墳丘盛土Ⅰ ⇒ 77～104層
石室床面土 ⇒ 41～43層
溝埋土 ⇒ 105層
墳丘築造時整地土 ⇒ 46～48・106～114層
地山 ⇒ 39～40・49・115～121層

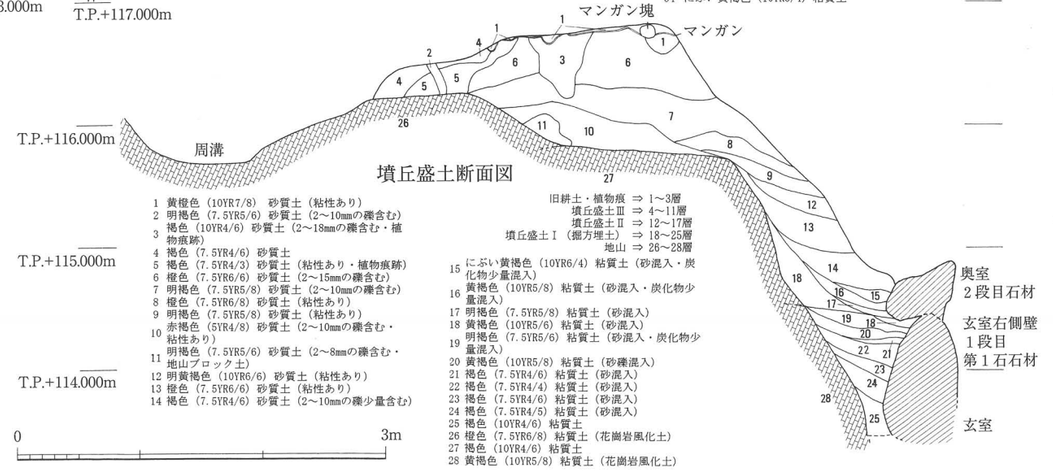
墳丘盛土横断面図①（玄室部）



1 にぶい赤褐色（5YR4/4）砂質土
2 黄橙色（7.5YR7/8）砂質土
3 赤褐色（5YR4/6）砂質土
4 黄褐色（10YR5/8）砂質土
5 赤褐色（5YR4/8）砂質土
6 明黄褐色（10YR6/8）砂質土
7 赤褐色（5YR4/8）砂質土（粘性あり）
8 明黄褐色（10YR7/6）砂質土（粘性あり）
9 にぶい赤褐色（5YR4/4）砂質土（粘性あり）
10 褐色（10YR4/4）粘質土（砂混入）
11 暗褐色（10YR3/4）粘質土
12 黄橙色（10YR7/8）砂質土
13 明赤褐色（5YR5/6）砂質土
14 橙色（7.5YR6/8）砂質土
15 明褐色（7.5YR5/6）砂質土
16 明赤褐色（5YR5/8）砂質土（2～5mmの礫含む）
17 黒褐色（10YR3/1）粘質土
18 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土（砂混入）
19 暗褐色（10YR3/3）砂質土（3～5mmの礫多量混入）
20 明黄褐色（2.5Y6/8）粘質土
21 黄褐色（10YR5/6）砂質土（礫混入）
22 黄褐色（10YR5/6）砂質土（礫混入）
23 にぶい黄橙色（10YR6/4）粘質土（砂混入）
24 にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土（粘性あり）
25 赤褐色（5YR4/8）砂質土（砂礫含む）
26 黄褐色（10YR5/6）砂質土（粘性あり・マンガン粒沈着）
27 明褐色（7.5YR5/6）砂質土（粘性あり・マンガン粒沈着）
28 褐灰色（7.5YR4/1）粘土（砂混入）
29 褐灰色（7.5YR4/1）粘土（砂混入・ブロック土）
30 にぶい黄橙色（10YR6/4）粘質土（砂混入）
31 にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土
32 明黄褐色（10YR6/8）粘土（砂混入）
33 明黄褐色（10YR6/8）粘質土（砂混入）
34 褐色（10YR4/4）粘質土
35 黄褐色（10YR5/6）粘質土
36 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土
37 褐色（10YR4/6）粘土（砂混入）
38 褐灰色（7.5YR4/1）粘土（砂混入）
39 黄褐色（10YR5/8）粘質土（砂混入）
40 明黄褐色（10YR6/6）粘質土（砂混入）
41 褐色（7.5YR4/4）粘質土
42 黄褐色（2.5Y5/4）粘土（砂混入）
43 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土（砂礫混入）
44 明黄褐色（10YR6/6）砂質土（粘性あり）
45 黄褐色（2.5Y5/6）粘土（砂混入）
46 褐色（7.5YR4/4）粘質土
47 褐色（7.5YR4/6）粘質土（砂混入）
48 褐色（7.5YR4/4）砂質土
49 暗褐色（10YR3/4）砂質土
50 明褐色（7.5YR5/8）砂質土（マンガン粒沈着）
51 褐色（10YR4/6）砂質土
52 緑灰色（5G6/1）粘土
53 灰黄褐色（10YR5/2）粘土
54 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土
55 黄褐色（10YR5/6）粘質土（10mmの石英含む）
56 緑灰色（5G6/1）粘土（ブロック土）
57 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土
58 明黄褐色（10YR6/6）砂質土（粘性あり）
59 明褐色（7.5YR5/6）砂質土（5mmの石英混入）
60 明褐色（7.5YR5/8）砂質土（石英少量含む）
61 明褐色（7.5YR5/6）砂質土
62 黄褐色（10YR5/6）砂質土（粘性あり）
63 黄褐色（10YR5/6）砂質土（上面マンガン粒沈着）
64 灰色（5Y5/1）粘土（ブロック土）
65 明黄褐色（10YR6/6）砂質土
66 明黄褐色（10YR6/6）粘質土
67 褐色（10YR4/4）粘質土
68 明褐色（7.5YR5/8）粘質土
69 明黄褐色（10YR6/6）粘質土
70 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土
71 褐色（10YR4/6）粘質土
72 明黄褐色（10YR6/6）粘質土
73 明黄褐色（10YR6/8）砂質土（下部マンガン粒多量沈着）
74 灰オリーブ色（5Y5/2）粘土
75 黄褐色（10YR5/6）粘質土
76 明黄褐色（10YR7/6）砂質土（粘性あり）
77 暗褐色（7.5YR3/3）砂質土
78 にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土（マンガン粒多量沈着）
79 褐色（10YR4/6）砂質土（粘性あり）
80 黄褐色（2.5Y5/3）粘土
81 褐色（10YR4/6）粘質土
82 褐色（10YR4/4）粘質土
83 黄褐色（10YR5/6）砂質土（粘性あり）
84 暗褐色（10YR3/4）砂質土
85 明黄褐色（10YR6/6）砂質土（粘性あり）
86 明黄褐色（10YR6/6）粘質土
87 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土（マンガン粒沈着）
88 褐色（10YR4/6）粘質土
89 明褐色（7.5YR5/6）砂質土（粘性あり）
90 明褐色（7.5YR5/6）粘質土（マンガン粒沈着）
91 にぶい黄褐色（2.5Y6/4）粘質土
92 明黄褐色（10YR6/6）粘質土
93 褐色（10YR4/6）粘質土
94 緑灰色（5G6/1）粘土（ブロック土）
95 褐色（10YR4/6）砂質土（マンガン粒少量沈着）
96 黄褐色（10YR5/6）粘質土
97 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土
98 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土
99 褐色（10YR4/6）粘質土
100 黄褐色（10YR5/6）粘質土
101 黄褐色（10YR5/6）粘質土
102 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土（マンガン粒沈着）
103 褐色（10YR5/6）粘質土

後世盛土 ⇒ 48～58層
墳丘盛土Ⅲ ⇒ 1～17層
墳丘盛土Ⅱ ⇒ 18～33層
墳丘盛土Ⅰ（掘方埋土） ⇒ 34～44・68～72層
墳丘盛土Ⅰ ⇒ 59～67層
墳丘築造時整地土 ⇒ 45～47・73～103層

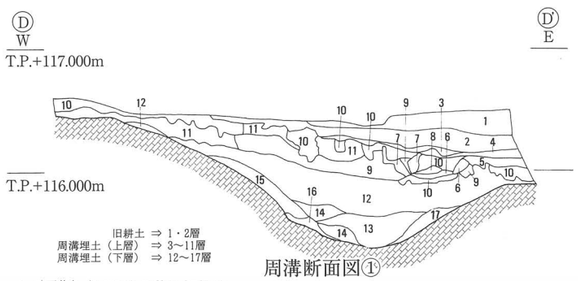
墳丘盛土横断面図②（羨道部）



墳丘盛土断面図

1 黄橙色（10YR7/8） 砂質土（粘性あり）
2 明褐色（7.5YR5/6）砂質土（2～10mmの礫含む）
3 褐色（10YR4/6）砂質土（2～18mmの礫含む・植物痕跡）
4 褐色（7.5YR4/6）砂質土
5 褐色（7.5YR4/3）砂質土（粘性あり・植物痕跡）
6 橙色（7.5YR6/6）砂質土（2～15mmの礫含む）
7 明褐色（7.5YR5/8）砂質土（2～10mmの礫含む）
8 橙色（7.5YR6/8）砂質土（粘性あり）
9 明褐色（7.5YR5/8）砂質土（粘性あり）
10 赤褐色（5YR4/8）砂質土（2～10mmの礫含む・粘性あり）
11 明褐色（7.5YR5/6）砂質土（2～8mmの礫含む・地山ブロック土）
12 明黄褐色（10YR6/6）砂質土（粘性あり）
13 橙色（7.5YR6/6）砂質土（粘性あり）
14 褐色（7.5YR4/6）砂質土（2～10mmの礫少量含む）
15 にぶい黄褐色（10YR6/4）粘質土（砂混入・炭化物少量混入）
16 黄褐色（10YR5/8）粘質土（砂混入・炭化物少量混入）
17 明褐色（7.5YR5/8）粘質土（砂混入）
18 黄褐色（10YR5/6）粘質土（砂混入）
19 明褐色（7.5YR5/6）粘質土（砂混入・炭化物少量混入）
20 黄褐色（10YR5/8）粘質土（砂礫混入）
21 褐色（7.5YR4/6）粘質土（砂混入）
22 褐色（7.5YR4/4）粘質土（砂混入）
23 褐色（7.5YR4/6）粘質土（砂混入）
24 褐色（7.5YR4/5）粘質土（砂混入）
25 褐色（10YR4/6）粘質土
26 橙色（7.5YR6/8）粘質土（花崗岩風化土）
27 褐色（10YR4/6）粘質土
28 黄褐色（10YR5/8）粘質土（花崗岩風化土）

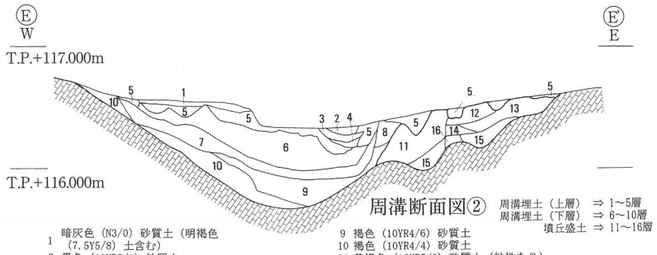
旧耕土・植物痕 ⇒ 1～3層
墳丘盛土Ⅲ ⇒ 4～11層
墳丘盛土Ⅱ ⇒ 12～17層
墳丘盛土Ⅰ（掘方埋土） ⇒ 18～25層
地山 ⇒ 26～28層



旧耕土 ⇒ 1・2層
周溝埋土（上層） ⇒ 3～11層
周溝埋土（下層） ⇒ 12～17層

1 暗灰黄色（2.5Y5/2）砂質土（旧耕土）
2 暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質土（旧耕土）
3 灰色（5Y5/1）砂質土（粘性あり）
4 褐灰色（10YR4/1）砂質土（粘性あり）
5 黒褐色（10YR3/1）砂質土（石英少量含む）
6 灰黄褐色（10YR4/2）砂質土
7 黒褐色（7.5Y3/1）砂質土（上面マンガン粒沈着）
8 明黄褐色（2.5Y6/6）砂質土（粘性あり）
9 黒褐色（10YR3/1）粘質土
10 明褐色（7.5YR5/6）砂質土（粘性あり）
11 褐色（10YR4/4）砂質土（粘性あり・上面マンガン粒沈着）
12 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土（礫混入）
13 褐色（10YR4/4）砂質土
14 褐色（10YR4/4）砂質土（粘性あり）
15 褐色（10YR4/6）砂質土
16 黄褐色（10YR5/6）砂質土（粘性あり）
17 にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土（粘性あり）

周溝断面図①

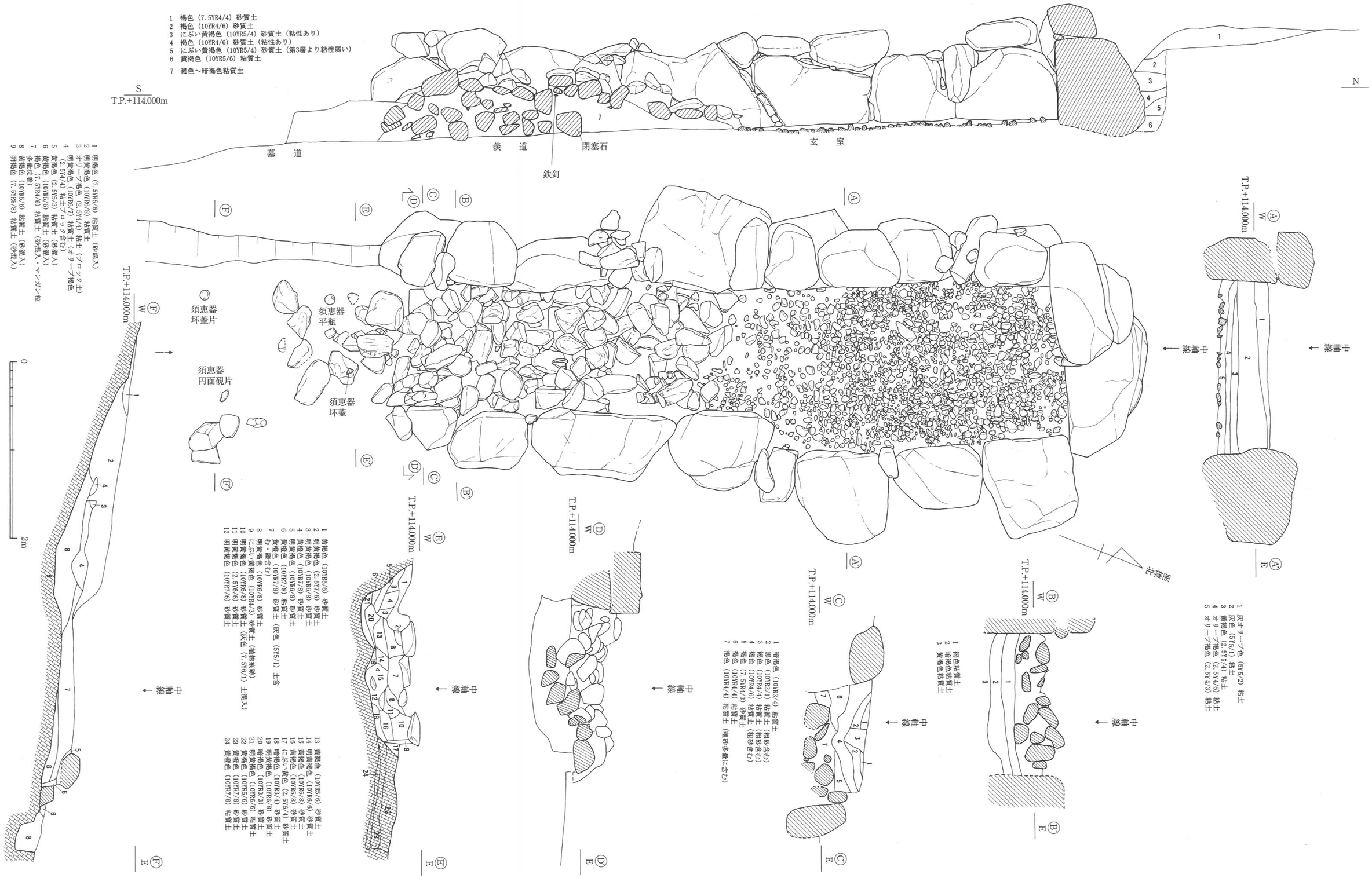


1 暗灰色（N3/0）砂質土（明褐色（7.5Y5/8） 土含む）
2 黒色（10YR2/1）粘質土
3 黄灰色（2.5Y4/1）粘質土
4 灰色（5Y5/1）砂質土（粘性あり）
5 明褐色（7.5YR5/6）砂質土（粘性あり）
6 灰黄褐色（10YR4/2）砂質土（粘性あり・礫多量含む）
7 褐灰色（10YR4/1）砂質土（粘性あり）
8 にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土（粘性あり）
9 褐色（10YR4/6）砂質土
10 褐色（10YR4/4）砂質土
11 黄褐色（10YR5/6）砂質土（粘性あり）
12 褐色（10YR4/4）粘質土
13 明褐色（7.5YR5/8）砂質土
14 黄褐色（10YR5/6）砂質土（粘性あり・ブロック土）
15 にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土（粘性あり）
16 黄褐色（10YR5/6）砂質土（粘性あり・ブロック土）

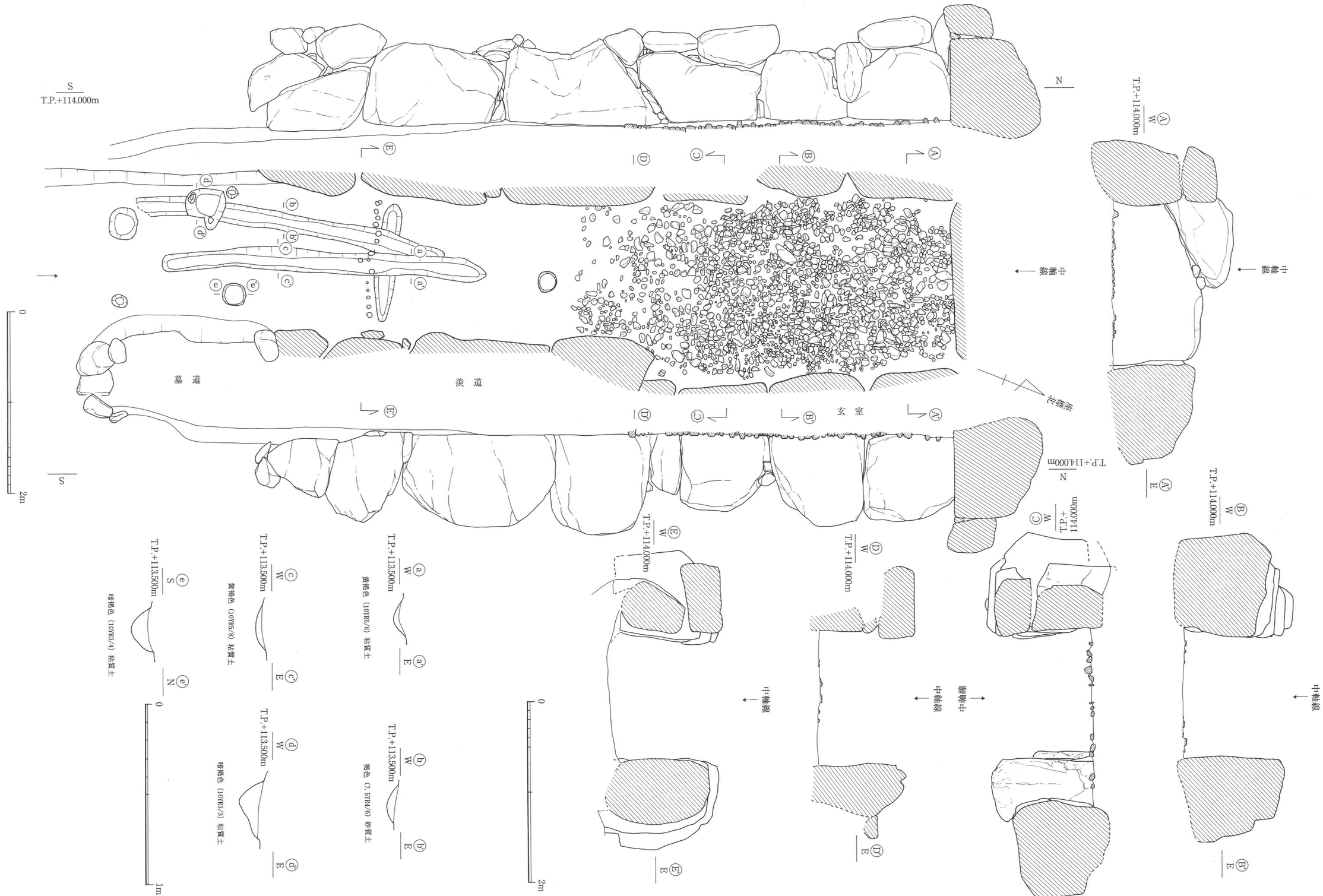
周溝埋土（上層） ⇒ 1～5層
周溝埋土（下層） ⇒ 6～10層
墳丘盛土 ⇒ 11～16層

周溝断面図②

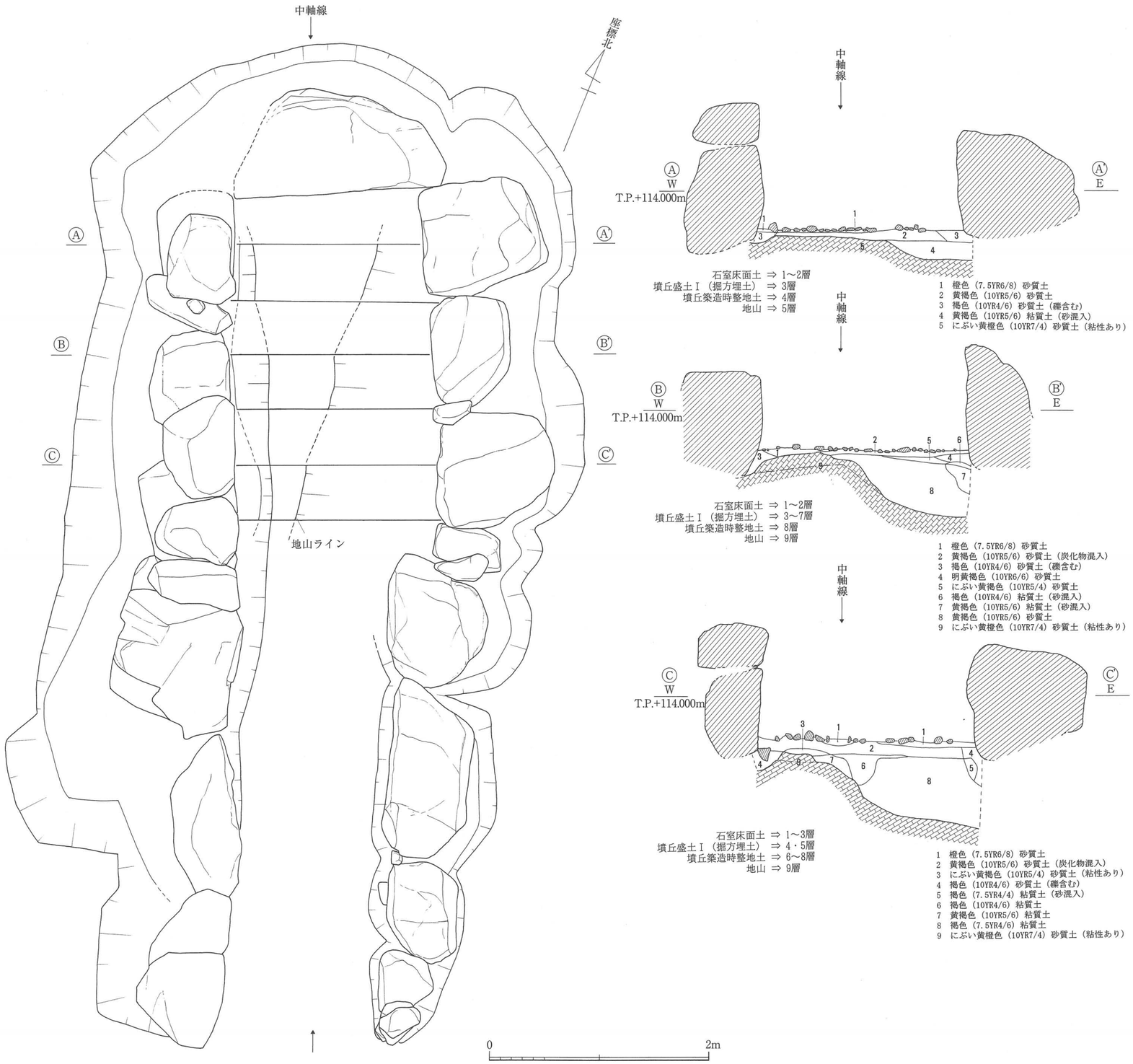
第12図 加納1号墳墳丘盛土および周溝断面図（1/50）



第13図　加納１号墳石室検出状況平面図・断面図（1/40）



第14図　加納１号墳石室平面図・断面図（1/20・1/40）



第15図　加納１号墳玄室断ち割り状況平面図・断面図（1/40）

羨道長4.48 m、羨道幅1.5 m、石室残存高1.3 mを測り、玄室長：羨道長は1：1.4の比率である。床面の高さは、玄室部では敷石上面でT.P.113.65 mを測るが、玄門部から墓道にかけての高さは徐々に低くなり、羨道部中央でT.P.113.55 m、羨門部付近でT.P.113.40 m、墓道先端でT.P.113.20 mを測る。玄室部と墓道先端との比高差は約0.45 mである。

（2）石室の規模（第14図）

玄室部の規模　玄室長3.24m、玄室幅は奥壁付近で1.80 m、左側壁ラインがやや外反しているため玄門部で1.94 mを測る。平面形は玄室長：玄室幅が1.7：1の長方形である。袖幅は0.45 mを測る。玄室高は石室上部が破壊されているため不明であるが、残存高は奥壁で1.3 m、左側壁で1.0 m、右側壁で1.2 mを測る。

羨道部の規模　羨道長4.48 m、羨道幅は玄門部1.48 m、中央1.45 m、羨門部1.65 mを測る。羨道幅が中央から羨門部にかけて広がっているのは、右側壁ラインが外反しているためである。羨道高は玄室高同様に不明であるが、左側壁で1.1 m、右側壁で1.2 mが残存していた。

（3）石室の構造　石材はすべて花崗岩の割石を用いているが、石室内面に比較的平らな剥離面を向けて構築されている。特に奥壁の基底石は、加工痕等は確認できず、平滑で整った面をもつ石材を選択したようである。

玄室部壁面構成　基底石は奥壁1石、左側壁4石、右側壁3石で構成されている。ただし左側壁については、奥壁側から数えて第3石目の基底石と袖石との間隙に第4石目となる基底石を充填したようで、基本構造は両側壁とも3石構成を意識したと思われる。奥壁の基底石は、縦1.2 m、横幅2.0 m、厚さ1.0 mの石材1石を横位に据えている。壁面は、床面に対して直立している。

右側壁側上面は角が取れているので、その形状に合わせるように奥壁2段目の石材が積まれている。2段目は2石で構成されていたと思われるが、左側壁側は欠損している。

左側壁の基底石は、奥壁側から第1石が縦1.0 m、横幅1.0 m、厚さ1.1 m、第2石が縦1.1 m、横幅1.1 m、厚さ0.7 m、第3石が縦1.1 m、横幅1.1 m、厚さ1.1 m、第4石が縦0.7 m以上、横幅0.4 m、厚さ0.6 mを測る石材を使用し、奥壁・右側壁とは異なり、縦位に据えている。第2石と第3石、第4石と袖石との間隙には数石の詰石が見られる。2段目以降の壁面構成は、右側壁のように間詰め石をもって谷積みした後2段目の石材を積んだのか、2号墳左側壁のように、直接2段目の石材を積み上げていったのか、現状では判断できない。

右側壁の基底石は、奥壁側から第1石が縦0.9 m、横幅1.2 m、厚さ0.7 m、第2石が縦1.0 m、横幅1.0 m、厚さ0.8 m、第3石が縦1.0 m、横幅1.3 m、厚さ0.9 mを測る石材を横位に据えている。第1石と第2石の間隙には、間詰め石を谷積みにし、基底石の高さを揃えている。2段目は4石で構成されていたものと思われるが、第2石目の石材が欠損している。2段目は奥壁側より第1石が縦0.3 m、横幅0.8 m、厚さ0.6 m、（1石欠損、横幅0.9 m）、第3石が縦0.5 m、横幅0.9 m、厚さ0.7 m、第4石が縦0.2 m、横幅0.5 m、厚さ0.8 mの細長の石材を

横位に積んでいる。

羨道部壁面構成　基底石は左側壁が袖石を含む４石、右側壁が３石で構成されている。左側壁の先端には長辺0.35 m、短辺0.25 mの石材を、主軸に対し長辺を垂直にして置かれている。右側壁の先端にもこれに似た石材があったらしい。この石材は、梅原末治「近時調査せる河内の古墳（上）」（梅原 1914）の「南加納村石槨平面図及断面図」（第５図）にも見られるように羨道の終止符を示すと考えられる。

左側壁の基底石の第１石は袖石である。袖石の大きさは縦1.3 m、横幅1.2 m、厚さ0.8 mを測り、縦位に据えている。第２石目以降は、第２石が縦1.2 m、横幅1.7 m、厚さ0.8 m、第３石が縦1.0 m、横幅0.9 m、厚さ0.7 m、第４石が縦1.0 m、横幅0.7 m、厚さ0.5 mを測る石材を、その先端には上述した羨道部の終止符の石を据えている。右側壁の基底石は、玄門側から第１石が縦1.0 m、横幅1.6 m、厚さ1.1 m、第２石が縦0.9 m、横幅1.4 m、厚さ0.7 m、第３石が縦0.7 m、横幅1.1 m、厚さ0.7 mを測る石材を横位に据えている。第３石上面は羨門側に傾斜しているため、縦0.8 m、横幅0.4 mと縦0.9 m、横幅0.4 mの２石の石材を積み上げ、その間隙に約0.1 ～ 0.25 m大の詰石数石を充填し、基底石の高さを合わせている。

（4）敷石（バラス敷）（第14図）　玄室部床面には敷石（バラス敷）が施され、玄門部を越えて羨道の一部（玄門部より約0.9 m）にまで及んでいた。上面の高さはT.P.113.65 mを測る。礫の大きさは５～ 10㎝と小振りで不揃いであった。敷石中に棺台となるような石材は確認できなかった。敷石上面より鉄釘が３点出土した。第17図１が玄室部西側、2･3が玄室部東側にあった。鉄釘以外の遺物は出土しなかった。

（5）溝状遺構・柱穴列（第14図）　羨道部中央から墓道にかけて（玄門部から1.9 ～ 5.8 m）、溝状遺構と柱穴列を検出した。溝状遺構は、主軸方向に並行して２条（東側溝・西側溝）、直交して１条、計３条の溝が検出された。東側溝は検出長3.54 m、幅約0.25 m、深さ約0.05 m、西側溝は検出長3.42 m、幅約0.2 m、深さ約0.05 m、主軸に直交している溝は、検出長1.28 m、幅約0.2 m、深さ約0.05 mを測り、断面形はいずれも浅い椀形を呈する。また玄門部より約3.1 mの位置には主軸方向に直交させて径３～ 6㎝の柱穴痕16基が一列に並んで検出された。この柱穴列は溝状遺構を切っている。溝状遺構が玄門部付近から墓道にかけて床面の高さが下がる位置にあることや、遺構南端が自然に浅く終えていることに注目すれば、雨水等による流水の痕跡の可能性が高い。石材を運搬した際の転の痕跡とした既刊の概要報告書（大阪府教育委員会 2002）の説明を改めたい。柱穴列は、石室を構築後、閉塞石を施すまでの期間に設けた木柵など一時的な封鎖施設と思われる。なお、溝状遺構（東側溝）からは須恵器杯蓋片が出土しているが、図化に堪えない細片であった。

（6）閉塞施設（第13図）　玄門部から0.5 ～ 4.5 mの地点、つまり敷石の先端部から羨門部までの間に、0.1 ～ 0.4 m大の自然石が積み上げられていた。上部は消失しているが、最も残りの良い所で４段積みまでを確認し、残存高は約0.9 mを測る。平面図では、閉塞石を羨道

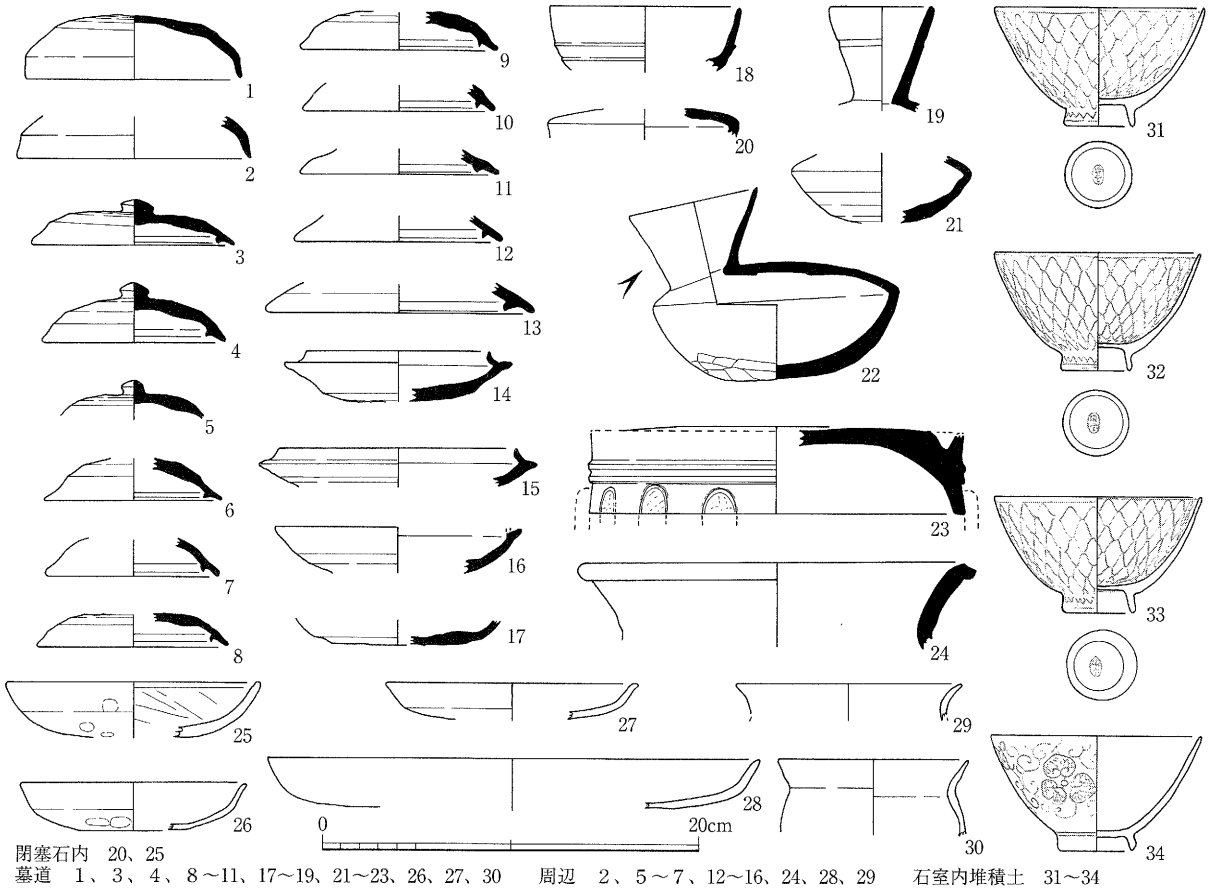
部一帯に詰め込んでいるかのように見えたが、縦断面図を見ると、閉塞石南側（羨門側）は自然石のみで小高く積み上げられており（下場長約 2.3 m）、それより北側（玄門側）は褐色～暗褐色系の粘質土層の上面に閉塞石が積まれていることがわかる。褐色～暗褐色系の粘質土層から須恵器壷片（第 16 図 20）と土師器杯片（同図 25）が出土していることから、閉塞石北側は 8 世紀前葉から中葉にかけて撹乱を受けたものと思われる。また鉄釘が 3 点出土している（第 17 図 4 ～ 6）。1 点は褐色～暗褐色系の粘質土層中から出土したが、追葬時にかき出されたか、撹乱時に混入したかは不明である。残りの 2 点は羨道部床面より出土している。

（7）墓道（第 13・14 図）　羨門部から墳丘先端までの約 2.7 m間で墓道を確認した。墓道の長さは右側壁側 2.73 m、左側壁側 1.91 mを測る。墓道幅は羨門部幅 1.65 mに対して、中央（羨門部より 0.9 m）で 1.7 m、先端部（羨門部より 1.8 m）で 1.9 mを測り、羨道部より継続して外開きの平面形を呈している。墓道床面の高さ（主軸上）は羨門部 T.P.113.40 m、中央 T.P.113.35 m、先端部 T.P.113.20 mを測る。左側壁側の先端には、0.2 m× 0.25 m・厚さ 0.1 m、0.3 m× 0.5 m・厚さ 0.2 m、0.2 m× 0.3 m・厚さ 0.15 mの石材が 3 石置かれていた。墓道先端と墳丘裾部との境界を示す石と考えられる。墓道からは須恵器杯（第 16 図 1･3･4･8 ～ 11･17）、平瓶（同図 19・22）、円面硯（同図 23）などが出土しているが、すべて墓道床面上に堆積していた褐色土より出土した。

（8）石室内の堆積土（第 13 図 A - A′横断面図）　石室内堆積土は、玄室部床面より黄褐色～オリーブ褐色粘土層→灰色粘土層→明褐色砂質土層→納屋建築時整地土層の順に堆積していた。敷石上面に堆積した黄褐色～オリーブ褐色粘土層は層厚約 0.2 m、上面の高さは T.P.113.8 mである。遺物は出土しなかった。その上に堆積した灰色粘土層は層厚約 0.35 m、上面高さは T.P.114.2 mである。この層は、さらに 2 層に細別でき、上層が灰オリーブ色（5Y5/2）粘土、（層厚約 0.05 ～ 0.15 m）、下層が灰色（5Y5/1）粘土（層厚約 0.2 ～ 0.35 m）である。灰色粘土層より鉄釘 1 点（第 17 図 7）が出土している。明褐色砂質土層の厚さは側石上面で約 0.15 m、石室内で約 0.6 mを測り、上面高さは西側 T.P.114.9 m、東側 T.P.114.6 mを測る。この層より磁器碗 4 点（第 16 図 31 ～ 34）が出土している。納屋が建てられた当時の整地土は、層厚 0.1 ～ 0.4 mを測り、上面の高さは T.P.115.0 mを測る。ここで奥壁基底石とこれに隣接する両側壁の第 1 基底石の上部に付着していた煤痕に注目しておきたい。この下面の高さを見ると、奥壁材は T.P.114.0 m、側壁材は T.P.114.2 mを測る。これは上記の灰色粘土層上面の高さと一致する。よって、灰色粘土の堆積後、明褐色砂質土が堆積するまでに石室内で火が使用されたことがわかる。石室が開口状態であったため、近世に農作業の際に石室内部が利用された可能性がある。

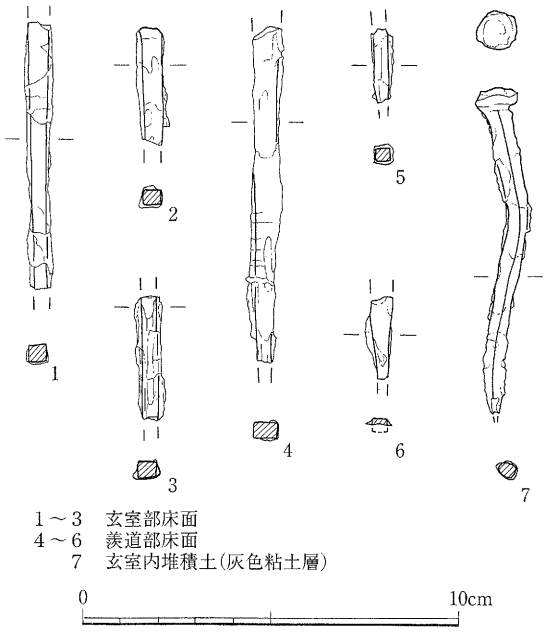
5．出土遺物（第 16・17 図、表 1）

石室床面での出土遺物はなかった。墓道床面上の褐色土中より須恵器坏（第 16 図 1・3・4・8 ～ 11・17）、無蓋高杯杯部（同図 18）、平瓶（同図 19・22）、壷底部（同図 21）、円面硯（同図 23）、土師器杯・皿（同図 26・27）、土師器甕（同図 30）が、閉塞石内より須恵器小型壷（同



第16図　加納１号墳出土遺物実測図（1/4）

図20)、土師器杯身（同図25）が出土した。その中で最も古い時期を示す須恵器は陶邑Ⅱ－５～６で、次いで陶邑Ⅲ～Ⅳ、その他８世紀代の遺物である。初葬、追葬、撹乱という変遷が反映されているのであろうか。鉄釘は計７点出土しており、最大幅が６～8cmを測る（第17図)。

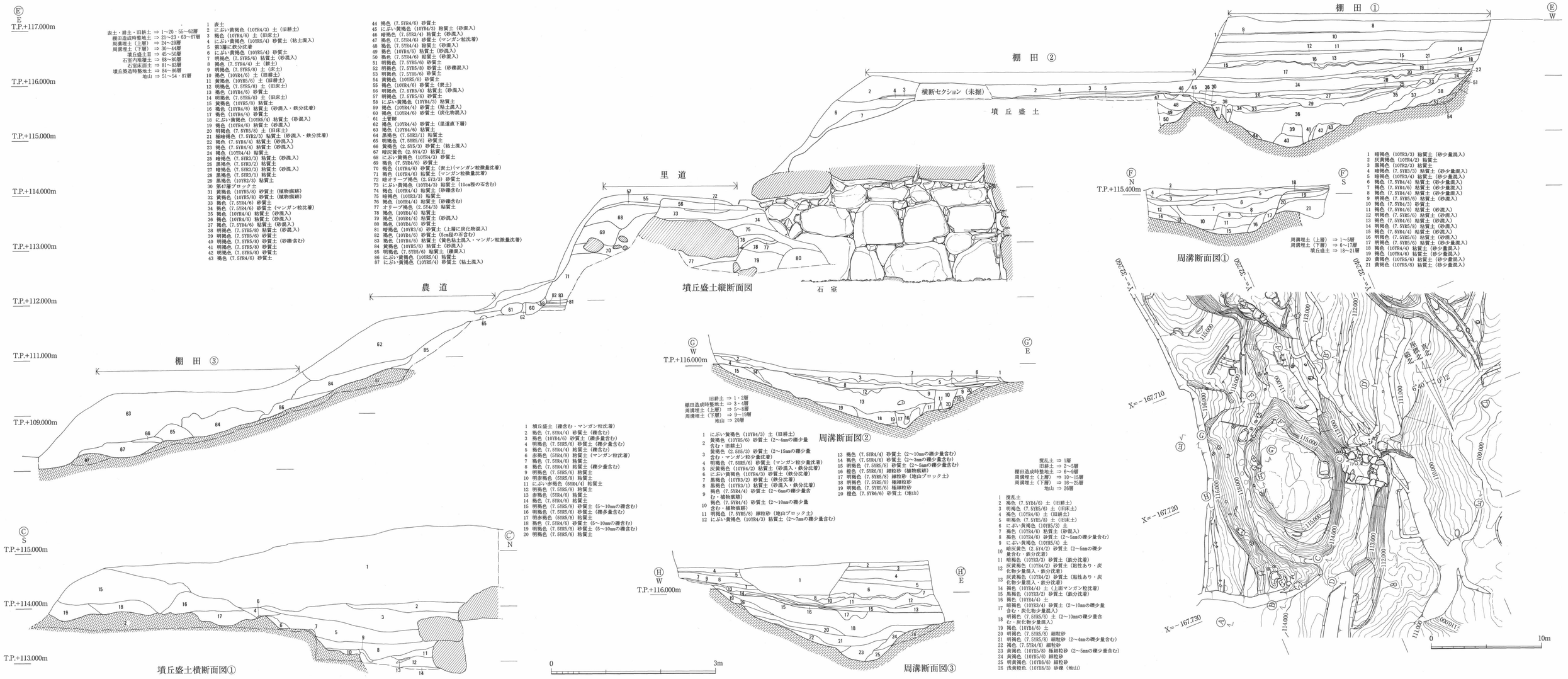


第17図　加納１号墳出土鉄釘実測図（1/2）

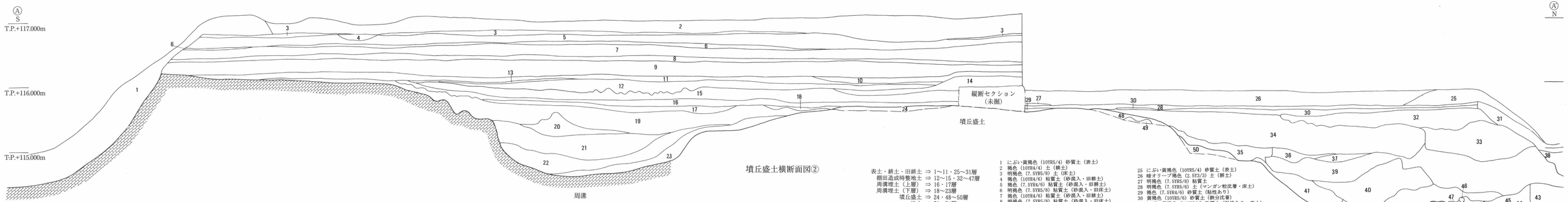
第２節　加納２号墳

１．調査前の地形

調査区南西の尾根の東斜面腹部、１号墳の南方に隣接して築造された横穴式石室墳である。調査前は、棚田斜面上に、羨道部の天井石第１石の先端が露出し、開口して久しい状態であった。開口部の規模は幅1.5 m、高さ0.2～0.3 mであり、大人が石室内に容易に入れる広さではない。開口部前(羨道部上面)を里道が横切っ



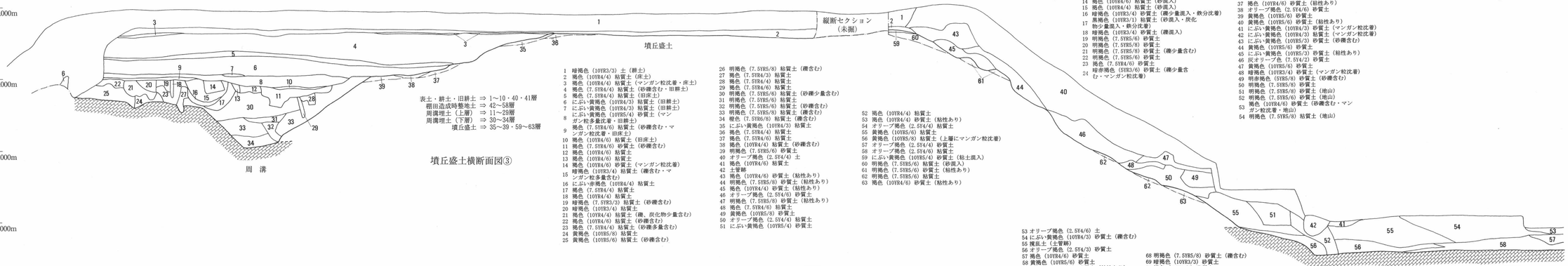
第18図　加納２号墳全体図、墳丘盛土および周溝断面図（1/50）



墳丘盛土横断面図②

表土・耕土・旧耕土 ⇒ 1～11・25～31層
棚田造成時整地土 ⇒ 12～15・32～47層
周溝埋土（上層） ⇒ 16・17層
周溝埋土（下層） ⇒ 18～23層
墳丘盛土 ⇒ 24・48～50層
地山 ⇒ 51～54層

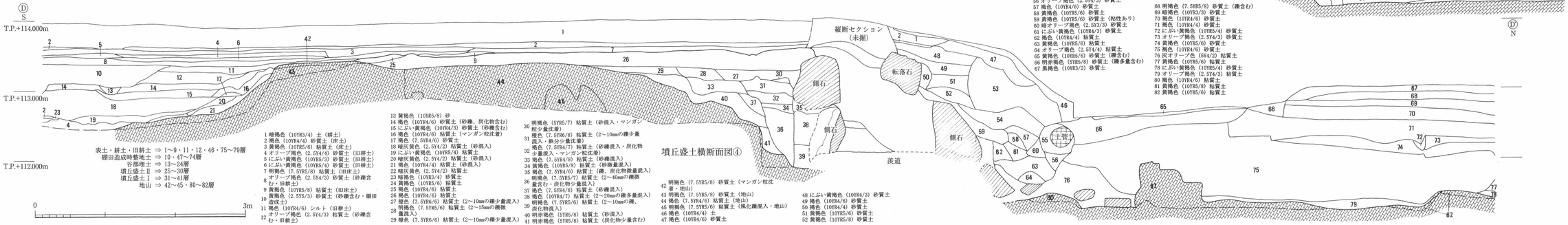
1 にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土（表土）
2 褐色（10YR4/4）土（耕土）
3 明褐色（7.5YR5/8）土（床土）
4 褐色（10YR4/6）粘質土（砂混入・旧耕土）
5 褐色（7.5YR4/6）粘質土（砂混入・旧耕土）
6 明褐色（7.5YR5/8）粘質土（砂混入・旧床土）
7 褐色（10YR4/6）粘質土（砂混入・旧耕土）
8 明褐色（7.5YR5/8）粘質土（砂混入・旧耕土）
9 褐色（10YR4/6）粘質土（砂混入・旧耕土）
10 明褐色（7.5YR5/8）粘質土（砂混入・旧床土）
11 明褐色（7.5YR5/8）粘質土（砂混入・旧床土）
12 褐色（10YR4/6）粘質土（砂混入）
13 12層上面に顕著に炭化した炭分層
14 褐色（10YR4/6）粘質土（砂混入）
15 褐色（10YR4/4）粘質土（砂混入）
16 暗褐色（10YR3/4）砂質土（礫少量混入・鉄分沈着）
17 黒褐色（10YR3/1）粘質土（砂混入・炭化物少量混入・鉄分沈着）
18 暗褐色（10YR3/4）砂質土（礫混入）
19 明褐色（7.5YR5/6）砂質土
20 明褐色（7.5YR5/8）砂質土
21 明褐色（7.5YR5/8）砂質土（礫少量含む）
22 明褐色（7.5YR5/6）砂質土
23 褐色（7.5YR4/6）砂質土
24 暗赤褐色（5YR3/6）砂質土（礫少量含む・マンガン粒沈着）
25 にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土（表土）
26 暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）土（耕土）
27 明褐色（7.5YR5/8）粘質土
28 明褐色（7.5YR5/6）土（マンガン粒沈着・床土）
29 褐色（7.5YR4/6）砂質土（粘性あり）
30 黄褐色（10YR5/6）砂質土（鉄分沈着）
31 にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土（粘性あり・表土）
32 にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土
33 褐色（10YR4/6）砂質土
34 褐色（10YR4/6）砂質土
35 明赤褐色（5YR5/6）砂質土（粘性あり）
36 褐色（10YR4/4）砂質土
37 褐色（10YR4/6）砂質土（粘性あり）
38 オリーブ褐色（2.5Y4/6）砂質土
39 黄褐色（10YR5/6）砂質土
40 黄褐色（10YR5/6）砂質土（粘性あり）
41 にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土（マンガン粒沈着）
42 にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土（マンガン粒沈着）
43 にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土（砂礫含む）
44 黄褐色（10YR5/6）砂質土
45 にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土（粘性あり）
46 灰オリーブ色（7.5Y4/2）砂質土
47 黄褐色（10YR5/6）砂質土
48 暗褐色（10YR3/4）砂質土（マンガン粒沈着）
49 明赤褐色（5YR5/8）砂質土（砂礫含む）
50 明褐色（7.5YR5/8）砂質土
51 明褐色（7.5YR5/8）砂質土（地山）
52 明褐色（7.5YR5/6）砂質土（地山）
53 褐色（10YR4/6）砂質土（砂礫含む・マンガン粒沈着・地山）
54 明褐色（7.5YR5/8）粘質土（地山）



墳丘盛土横断面図③

表土・耕土・旧耕土 ⇒ 1～10・40・41層
棚田造成時整地土 ⇒ 42～58層
周溝埋土（上層） ⇒ 11～29層
周溝埋土（下層） ⇒ 30～34層
墳丘盛土 ⇒ 35～39・59～63層

1 暗褐色（10YR3/3）土（耕土）
2 褐色（10YR4/4）粘質土（床土）
3 褐色（10YR4/4）粘質土（マンガン粒沈着・床土）
4 褐色（7.5YR4/4）粘質土（砂礫含む・旧耕土）
5 褐色（7.5YR4/4）粘質土（旧床土）
6 にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土（旧耕土）
7 にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土（旧耕土）
8 にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土（マンガン粒多量沈着・旧耕土）
9 褐色（7.5YR4/6）粘質土（砂礫含む・マンガン粒沈着・旧床土）
10 褐色（10YR4/6）粘質土（旧床土）
11 褐色（7.5YR4/6）砂質土（砂礫含む）
12 褐色（10YR4/6）粘質土
13 褐色（10YR4/6）粘質土
14 褐色（10YR4/6）砂質土（マンガン粒沈着）
15 暗褐色（10YR3/4）粘質土（礫含む・マンガン粒多量含む）
16 にぶい赤褐色（10YR4/4）粘質土
17 褐色（7.5YR4/4）粘質土
18 褐色（10YR4/4）粘質土
19 暗褐色（7.5YR3/3）粘質土（砂礫含む）
20 暗褐色（10YR3/4）粘質土
21 褐色（10YR4/4）粘質土（礫、炭化物少量含む）
22 褐色（10YR4/6）粘質土（砂礫含む）
23 褐色（7.5YR4/4）粘質土（砂礫多量含む）
24 黄褐色（10YR5/8）粘質土
25 黄褐色（10YR5/6）粘質土（砂礫含む）
26 明褐色（7.5YR5/8）粘質土（礫含む）
27 褐色（7.5YR4/3）粘質土
28 褐色（7.5YR4/4）粘質土
29 褐色（7.5YR4/6）粘質土
30 明褐色（7.5YR5/6）粘質土（砂礫少量含む）
31 明褐色（7.5YR5/6）粘質土
32 明褐色（7.5YR5/6）粘質土（砂礫含む）
33 明褐色（7.5YR5/8）粘質土（礫含む）
34 橙色（7.5YR6/8）粘質土（礫含む）
35 にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土
36 褐色（7.5YR4/4）粘質土
37 褐色（7.5YR4/6）粘質土
38 褐色（10YR4/4）粘質土（砂礫含む）
39 明褐色（7.5YR5/6）砂質土
40 オリーブ褐色（2.5Y4/4）土
41 褐色（10YR4/6）粘質土
42 土管礫
43 褐色（10YR4/6）砂質土（粘性あり）
44 明褐色（7.5YR5/8）砂質土（粘性あり）
45 褐色（10YR4/4）砂質土（粘性あり）
46 オリーブ褐色（2.5Y4/6）砂質土
47 明褐色（7.5YR5/8）砂質土（粘性あり）
48 褐色（7.5YR4/6）粘質土
49 黄褐色（10YR5/8）砂質土
50 オリーブ褐色（2.5Y4/4）粘質土
51 にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土
52 褐色（10YR4/4）粘質土
53 褐色（10YR4/4）砂質土（粘性あり）
54 オリーブ褐色（2.5Y4/4）粘質土
55 黄褐色（10YR5/6）粘質土
56 黄褐色（10YR5/8）粘質土（上層にマンガン粒沈着）
57 オリーブ褐色（2.5Y4/4）砂質土
58 オリーブ褐色（2.5Y4/6）粘質土
59 にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土（粘土混入）
60 明褐色（7.5YR5/6）粘質土（砂混入）
61 明褐色（7.5YR5/6）砂質土（粘性あり）
62 明褐色（7.5YR5/6）粘質土
63 褐色（10YR4/6）砂質土（粘性あり）

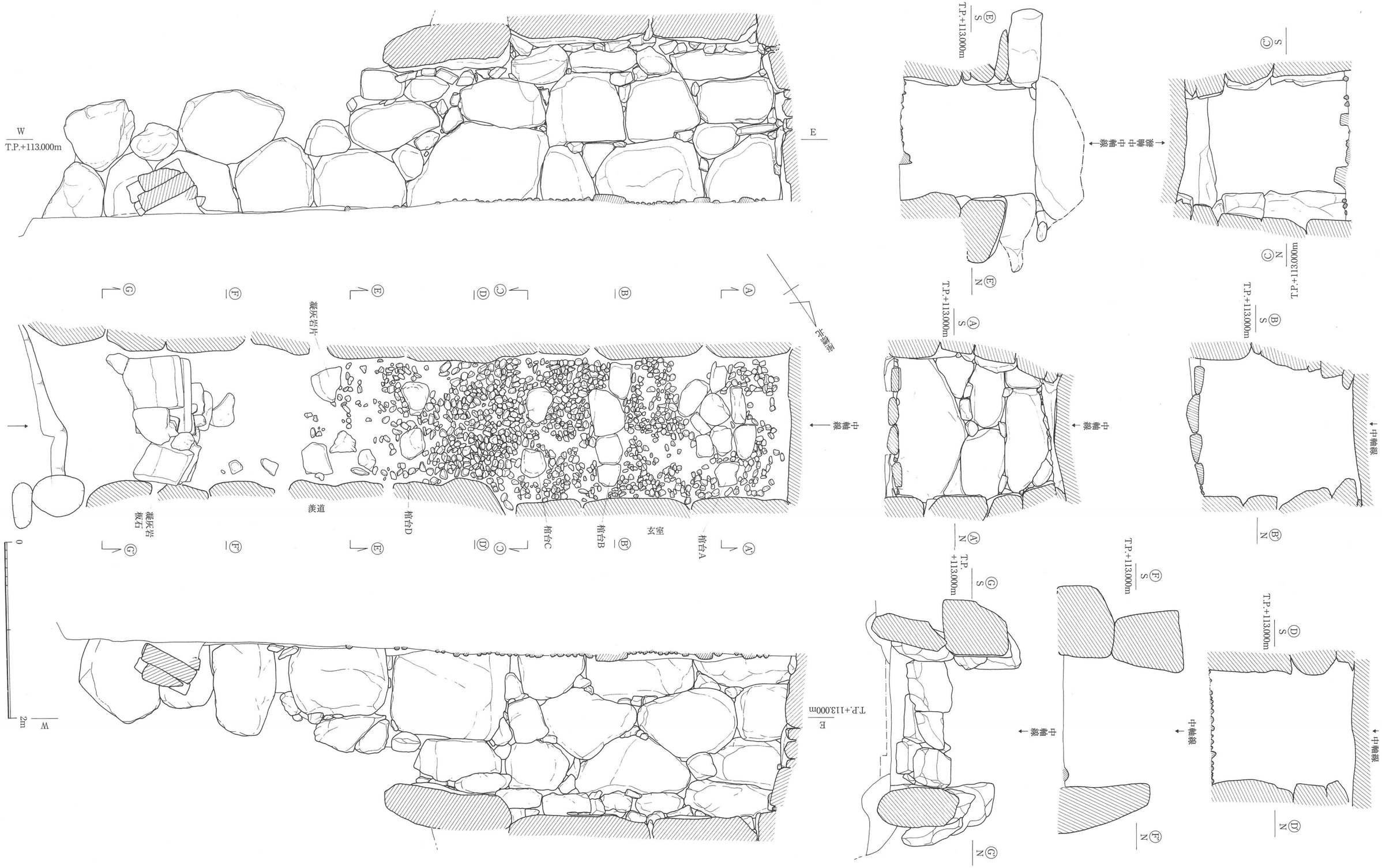


墳丘盛土横断面図④

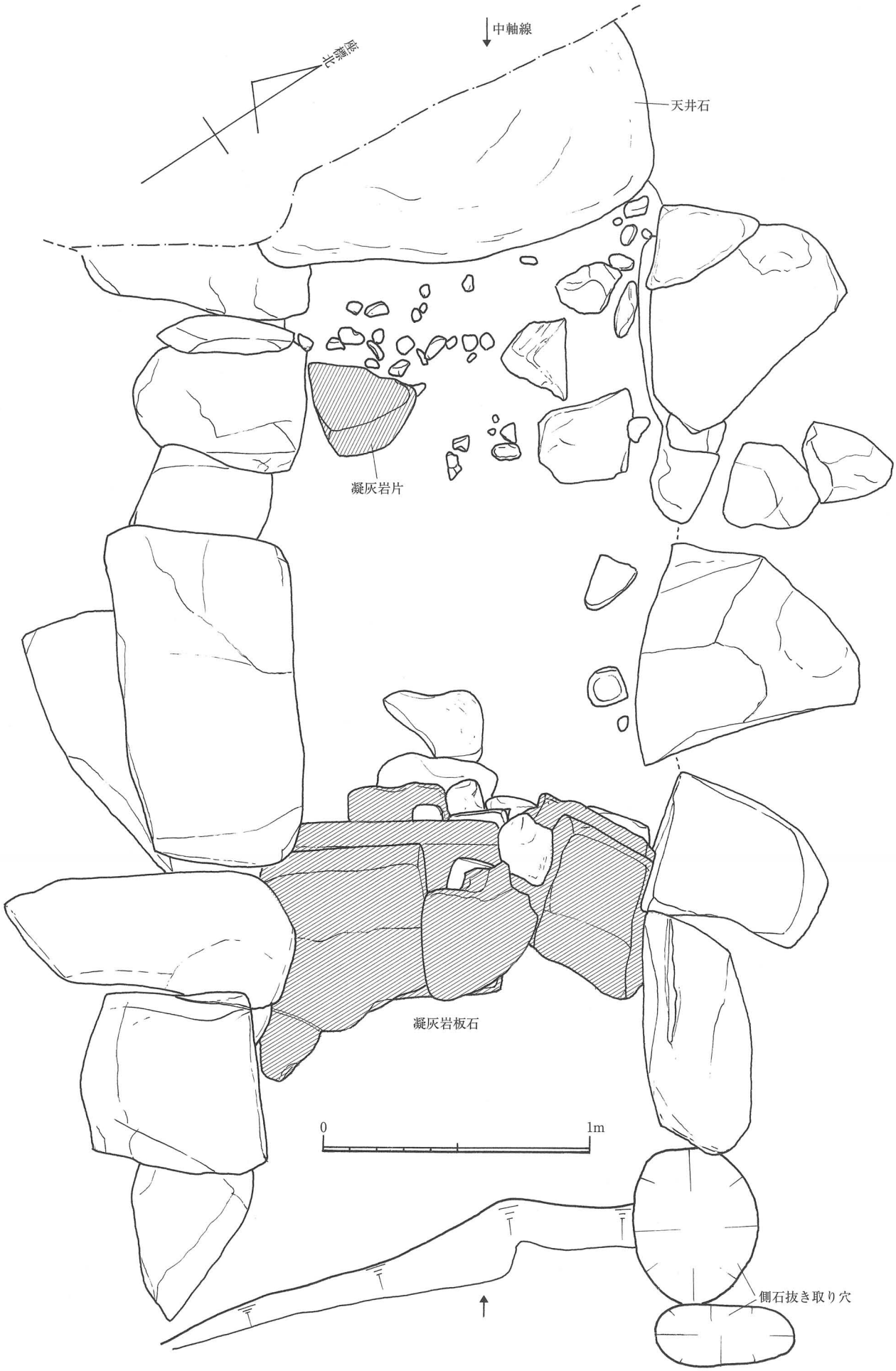
表土・耕土・旧耕土 ⇒ 1～9・11・12・46・75～79層
棚田造成時整地土 ⇒ 10・47～74層
谷部埋土 ⇒ 13～24層
墳丘盛土Ⅱ ⇒ 25～30層
墳丘盛土Ⅰ ⇒ 31～41層
地山 ⇒ 42～45・80～82層

1 暗褐色（10YR3/4）土（耕土）
2 褐色（10YR4/4）砂質土（床土）
3 黄褐色（10YR5/6）粘質土（床土）
4 オリーブ褐色（2.5Y4/4）砂質土（旧耕土）
5 にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土（旧耕土）
6 にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土（旧耕土）
7 明褐色（7.5YR5/8）粘質土（旧床土）
8 オリーブ褐色（2.5Y4/3）砂質土（砂礫含む・旧耕土）
9 黄褐色（10YR5/8）粘質土（旧床土）
10 黄褐色（2.5Y5/3）砂質土（砂礫含む・棚田造成土）
11 褐色（10YR4/6）シルト（旧耕土）
12 オリーブ褐色（2.5Y4/3）粘質土（砂礫含む・旧耕土）
13 黄褐色（10YR5/8）砂
14 褐色（10YR4/6）砂質土（砂礫、炭化物含む）
15 にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土（砂礫含む）
16 褐色（10YR4/6）粘質土（マンガン粒沈着）
17 褐色（7.5YR4/6）砂質土
18 暗灰黄色（2.5Y4/2）粘質土（砂混入）
19 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土
20 暗灰黄色（2.5Y4/2）粘質土（砂混入）
21 褐色（10YR4/4）粘質土（砂混入）
22 暗灰黄色（2.5Y4/2）粘質土
23 暗褐色（10YR3/4）砂質土
24 黄褐色（10YR5/6）粘質土
25 褐色（10YR4/6）粘質土
26 褐色（10YR4/6）粘質土
27 橙色（7.5YR6/6）粘質土（砂礫含む・細田盛土）
28 明褐色（7.5YR5/6）粘質土（2～15mmの礫微量混入）
29 橙色（7.5YR6/6）粘質土（2～10mmの礫少量混入）
30 明褐色（5YR5/7）粘質土（砂混入・マンガン粒少量沈着）
31 褐色（7.5YR6/8）粘質土（2～10mmの礫少量混入・鉄分少量沈着）
32 褐色（7.5YR4/7）粘質土（砂礫混入・炭化物少量混入・マンガン粒沈着）
33 褐色（7.5YR4/8）粘質土（砂礫混入）
34 黄褐色（10YR5/8）粘質土（砂微量混入）
35 褐色（7.5YR4/6）粘質土（礫、炭化物微量混入）
36 明褐色（7.5YR5/7）粘質土（2～40mmの礫微量含む・炭化物少量混入）
37 褐色（7.5YR4/8）粘質土（砂礫混入）
38 褐色（10YR4/7）粘質土（2～20mmの礫多量混入）
39 明褐色（7.5YR5/6）粘質土（2～10mmの礫、炭化物混入）
40 明赤褐色（5YR5/8）粘質土（砂混入）
41 明赤褐色（5YR5/8）粘質土（炭化物少量含む）
42 明褐色（7.5YR5/8）砂質土（マンガン粒沈着・地山）
43 明褐色（7.5YR5/8）砂質土（地山）
44 褐色（7.5YR4/6）粘質土（地山）
45 明褐色（7.5YR5/6）粘質土（風化礫混入・地山）
46 褐色（10YR4/4）土
47 褐色（10YR4/6）砂質土
48 にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土
49 褐色（10YR4/6）砂質土
50 褐色（10YR4/4）砂質土
51 黄褐色（10YR5/6）砂質土
52 黄褐色（10YR5/8）砂質土
53 オリーブ褐色（2.5Y4/6）土
54 にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土（礫含む）
55 撹乱土（土管礫）
56 オリーブ褐色（2.5Y4/3）砂質土
57 褐色（10YR4/6）砂質土
58 黄褐色（10YR5/6）砂質土
59 黄褐色（10YR5/6）砂質土（粘性あり）
60 暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）砂質土
61 にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土
62 褐色（10YR4/4）粘質土
63 黄褐色（10YR5/6）粘質土
64 オリーブ褐色（2.5Y4/4）粘質土
65 黄褐色（10YR5/6）砂質土（礫含む）
66 明赤褐色（5YR5/8）砂質土（礫多量含む）
67 黒褐色（10YR3/2）砂質土
68 明褐色（7.5YR5/8）砂質土（礫含む）
69 暗褐色（10YR3/3）砂質土
70 褐色（10YR4/6）砂質土
71 褐色（10YR4/4）砂質土
72 にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土
73 オリーブ褐色（2.5Y4/3）砂質土
74 黄褐色（10YR5/6）砂質土
75 褐色（10YR4/6）砂質土
76 灰オリーブ色（5Y4/2）粘質土
77 黄褐色（10YR5/6）粘質土
78 にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土
79 オリーブ褐色（2.5Y4/3）粘質土
80 褐色（10YR4/6）粘質土
81 黄褐色（10YR5/8）粘質土
82 黄褐色（10YR5/6）粘質土

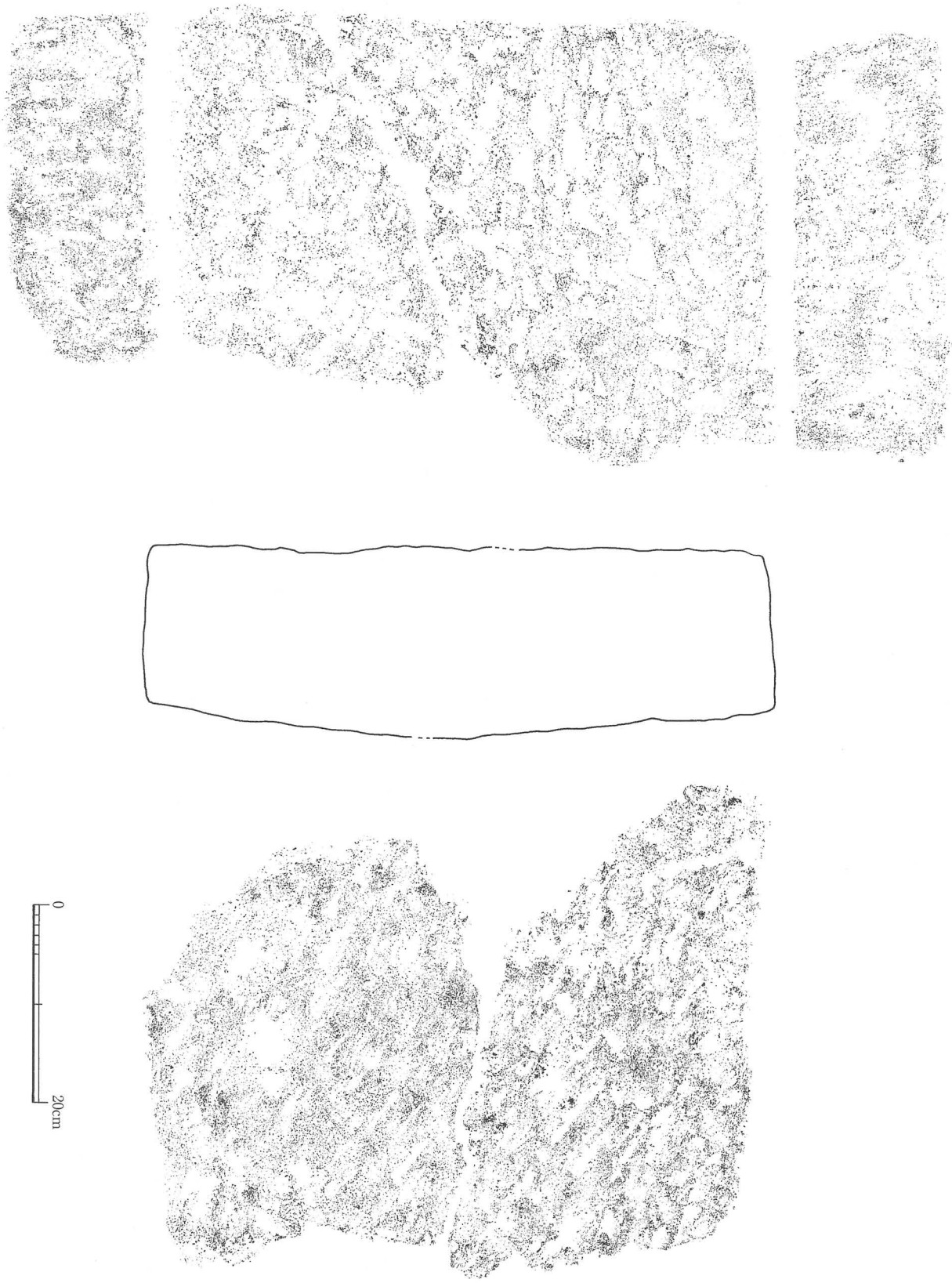
第19図　加納２号墳墳丘盛土断面図（1/40）



第20図　加納２号墳石室平面図・立面図・断面図（1/40）



第21図　加納２号墳羨道部平面詳細図（1/20）



第22図　加納２号墳閉塞凝灰岩加工痕拓影（1/60）

ていた。石室内を覗き見ると、自然石を積み上げた横穴式石室で、多量の土砂が流入していることが認められた。昭和45・46年度の分布調査では、玄室長3.2 m、玄室幅2.8 mの片袖式の横穴式石室が完存し、漆喰が残ると報告されている。しかし、平成12・13年度調査では、玄室幅は1.6 mで漆喰が塗布された形跡はなかった。

2．墳丘（第18・19図）

（1）墳丘の形状と規模　　1号墳と同様に尾根の東斜面腹部に築造されている。標高T.P.112.0 mに位置する径約16 mの円墳であるが、羨道部上面や墳丘北、東側は後世の撹乱で崩壊し正確な墳形ははっきりしない。墳丘西側は頂部が削平されているものの、比較的良好に残っていた。全体図からすると円形を意識しているようである。1号墳と同じく築造が尾根の東斜面腹部であるためか、正面となる東側は自然地形をそのまま利用している。

墳丘は玄門部を中心として構築したようである。現状の規模は、玄門部より墳丘裾部まで西へ7 m、南へ8 m、北へ4 m（残存長）、周溝の規模も含めると西・南ともに10.5 mを測る。よって、墳丘裾部は径16 m、周溝の外周は径21 mとなった。墳丘高は、墳丘頂部が棚田造成時に削平されていて判然としないが、残存墳丘高（T.P.115.7 m）と羨門部の床面高さ（T.P.112.1 m）との比高差は約3.6 mを測る。墳丘東側の旧地形に沿って傾斜しているため、見かけ上の墳丘はさらに高かったようである。

（2）古墳の選地と墳丘構築方法　　墳丘盛土断面図（第18・19図）を観察すると、第3節にも示した通り、上から順に表土・耕土層、旧耕土層、棚田造成時整地土層、その下に墳丘盛土層、地山層となる。立地は他の3基に比して良好な地点を占める。古墳群が営まれた尾根の頂上は、現在では地形が変貌してしまっているが、昭和39年以前の旧地形図では標高はT.P.143.3 mとある。この尾根の頂から南東方向に下降する稜線の先端で、急傾斜から緩傾斜に変化する開けた地点を選んでいる。

墳丘の構築方法では、1号墳と同様に石室予定地を整地するために地山成形を行っている。西側の地山を削平し、石室予定地となる東側に盛っている（第18図縦断面第84・85層）。次に、炭を混入した砂質土と粘質土を約5cmの厚さで水平な互層となるように敷き床面を形作っている（同図縦断面第81～83層）。炭を混入させるのは排水性や吸水性を高めるためであろうか。玄室部床面ではその状況をはっきり検出できた（第23図）。

床面を整えた後、掘方をつけ、奥壁、袖石を先置し、基底石を構築した。基底石を据え置いた後、掘方に裏込土を充填していく。その際、まず石材の間隙に裏込土を充分に押し込み、基底石を固定している（第19図墳丘盛土横断面④第38・39層）。それから層厚約0.2～0.3 mの間隔で水平に盛っている。側壁2段目、3段目も同様に構築している。天井石横架後の盛土断面は1号墳の場合と違い、細かく分層できなかった（第18図墳丘盛土横断面①第1層）。

3．外部施設（第18図）

墳丘東側で周溝を検出した。幅3～4 mで円形に廻らしており、深さ1.1 m、断面は皿形を

呈する。周溝の平面形は、墳丘北側では1号墳の周溝と交差するのを避けるかのように大きく内傾させている。墳丘北側から東側にかけて周溝が廻らないのは、1号墳と同様尾根と墳丘とを区画するための掘割的機能を有していたからであろう。一方、墳丘南側は谷筋へ合流している。周溝堆積土は2層に大別できる。上層は泥炭質の土、下層は尾根からの流土であった。上層より8世紀中頃の土師器鉢（第25図8・9）が出土し、周溝が埋まったのはこの頃だろう。

4．埋葬施設（第20～24図）

（1）石室の概略（第21図）　2号墳の埋葬施設は、1号墳と同じく左片袖式の横穴式石室である。尾根の稜線に沿って石室が設計されているため、石室の主軸方向はN—56°30′－Wを示し、南東に開口する。石室は玄室部と羨道部からなる。羨道部中央から羨門部にかけての石室上部は破壊されていたが、それ以外は完存していた。現状での石室の全長は、右側壁面で8.63 m、左側壁面で8.11 mを測る。羨門部の床面は撹乱されていたが、左側壁の先端には側石2石分の抜き取り穴が検出され、その規模も含めると全長は約8.8 mになる。石室の規模は、玄室長3.44 m・玄室幅1.6 m・玄室高1.8 m、羨道長5.37 m・羨道幅1.4 m・羨道高1.5 mを測り、玄室長：羨道長は1：1.6の比率となる。石室床面の高さは、玄室部敷石上面でT.P.112.32 mを測る。2号墳も玄門部から羨門部にかけてやや低くなり、羨道中央でT.P.112.20 m、羨門部でT.P.112.12 m、玄室部と羨門部との比高差は約0.20 mとなる。

（2）石室の規模（第21図）

玄室部の規模　玄室長は3.44 m、玄室幅は奥壁付近1.63 m・中央部1.57 m・玄門部1.65 mを測り、平面形は玄室長：玄室幅の比率が2.1：1の長方形を呈する。袖幅は0.21 mを測る。玄室高はどの位置でも一定しており、約1.8 mを測る。壁面は2段目より持ち送りが認められ、また見上げ石（高さ約0.3 m）が玄門部の位置よりも約0.25 m入り込むため、天井部付近の長さは2.80 m、幅は奥壁付近1.1 m・中央1.0 m・見上げ石付近1.1 mを測る。立面形は台形状である。

羨道部の規模　羨道の長さは、右側壁面5.19 m、左側壁面4.67 m（側石抜き取り穴の規模も含めると5.37 m）、羨道幅は玄門部1.33 m、中央1.46 m、羨門部1.47 mを測る。羨道高は玄門部で1.55 m、羨道部天井石第1石先端で1.50 mを測る。中央から羨門部にかけて側石上部と天井石が欠損しているため、高さは不明である。残りの良いところでは1.3 m残存していた。

（3）石室の構造　石材に花崗岩の割石を用いる2号墳の壁面構成は、以下の通りである。

玄室部壁面構成　奥壁は3段積みである。基底石は縦0.8 m以上・横1.6 m以上を測る石材1石で、壁面が直立するように据えられている。上部は三角形であるため、両端に三角形の石材を1石ずつ施している。さらに、中央の0.6 mの間に生じた凹みに0.1～0.25 m大の石材を3石充填し、基底石の高さを整えている。2段目は、縦0.4 m・横0.5 m以上と縦0.35 m・横0.5 mの2石で構成される。3段目は、縦0.5 m・横1.2 mの石材と縦0.25 m・横0.2 mの2石

で構成される。また左側壁側に0.15 × 0.3 m大の石材を1石充填して、3段目の高さを合わせている。3段目の上部には0.05 ～ 0.15 m大の小ぶりな石材を積み、やはり天井部の高さを調整する。持ち送りは2段目から生じて、その角度は約75°を測る。

玄室部側壁は左側壁が4段積みで、右側壁が3段積みである。基底石は両側壁ともに3石で構成され、横位に据えられている。しかし、石材の形状・大きさが不揃いであるため、左右の壁面構成に違いが生じている。左側壁の基底石は3石から構成され、奥壁側より第1石が縦0.4 m以上・横1.1 m、第2石が縦0.6 m以上・横1.2 m、第3石が縦0.5 m以上・横0.8 mを測る石材である。各石材の上部両端は丸みを帯び、そのために生じた相互の間隙に石を詰めて基底石の高さを調整している。特に、第2石と第3石との間の凹みが大きいため、2段目の第3石は谷積み状に積んでいる。2段目は、第1石が縦0.7 m・横0.6 mの方形の石材を積み、奥壁基底石との高さを合わせている。第2・3石にはともに縦0.8 m・横1.1 mの石材を積んでいる。第4石は0.4 × 0.5 m大の方形の石材を第3石と袖石の間に斜めに据え、さらに小振りな石数点を充填し、袖石の上面の高さおよび玄室の幅を合わせている。3段目は3石で、特に2段目の第2・3石との間の凹みに第2石の縦0.7 m・横1.3 mの逆三角形の石材を積むなどして、3段目の上面高さの調整に役立たせている。4段目は5石で第1石は縦0.4 m・横1.0 mを測る石材で、第2～5石は縦約0.2 m・横約0.3 ～ 0.4 mを用いて上面の高さを揃えている。

右側壁の壁面は各段ともに上面の高さが揃っているので整然としている。まず基底石は、奥壁側より第1石が縦0.8 m以上・横0.9 m、第2石が縦0.8 m以上・横1.2 m、第3石が縦0.7 m以上・横0.6 mの石材3石を使用している。第1石の上部は玄門側に窪んでいるため、その間隙に長辺0.5 m・短辺0.4 mの楕円形を呈した石材を積み、さらに、奥壁との間には縦0.1 m、横0.5 mの石材を積み、奥壁基底石の高さと合わせている。第2石と第3石の間隙にも縦0.4 m・横0.4 mの逆三角形の石材を充填し、基底石の高さを調整している。左側壁では、玄室長に合わせて基底石が設置されていたが、右側壁では袖石が玄室側に入り込む位置に設置されていることから、側壁が左側から造られていることが判明した。そのために、基底石の上面の高さは、奥壁側T.P.113.18 m、羨道側でT.P.112.93 mを測り、約0.25 mの比高差を生じている。しかし、この比高差は、2段目の石材を積み上げて修正している。2段目は3石で構成され、第1石が縦0.5 m・横0.9 m、第2石が縦0.7 m・横0.9 m、第3石が縦0.8 m・横0.9 mの石材を積み、2段目の高さをT.P.113.72 mに揃えている。3段目は玄室長に合わされ、第1石が縦0.4 m・横1.1 m、第2石が縦0.4 m・横0.4 m、第3石が縦0.3 m・横0.8 m、第4石が縦0.4 m・横0.7 mを測る。3段目の上面には天井部との高さを調整するために、0.1 ～ 0.3 m大の石材を10石詰めている。

羨道部壁面構成　基底石は、左側壁では袖石を含む5石、右側壁では6石が残存していた。ただし、左側壁の先端には側石抜き取り穴が2基検出されており、基底石は本来7石であったと思われる。中央部から羨門部にかけて上部が欠損しているため詳細を欠くが、壁面構成は玄門

付近で２段積み、中央から羨門部にかけては３段積みであろう。左側壁基底石の第１石は袖石である。縦 1.0 m以上・横 1.1 m・厚さ 0.5 m以上を測る方形の石材である。第２石は縦 0.8 m以上・横 1.1 mの石材を横位に据えているが、第３～５石は縦 1.1 m以上・横 0.7 mと縦 0.8 m以上・横 0.7 mと縦 1.0 m以上・横 0.9 mを測る石材を縦位に据えている。袖石の上部には２段目となる石材（縦 0.5 m・横 1.0 m）を積み上げ、これと玄室部３段目の第３石との凹みに詰石を１石充填して高さを調整し、天井石（見上げ石）を架構している。羨道部基底石の第２石の上面には縦 0.4 m・横 0.8 mの石材を積み上げている。

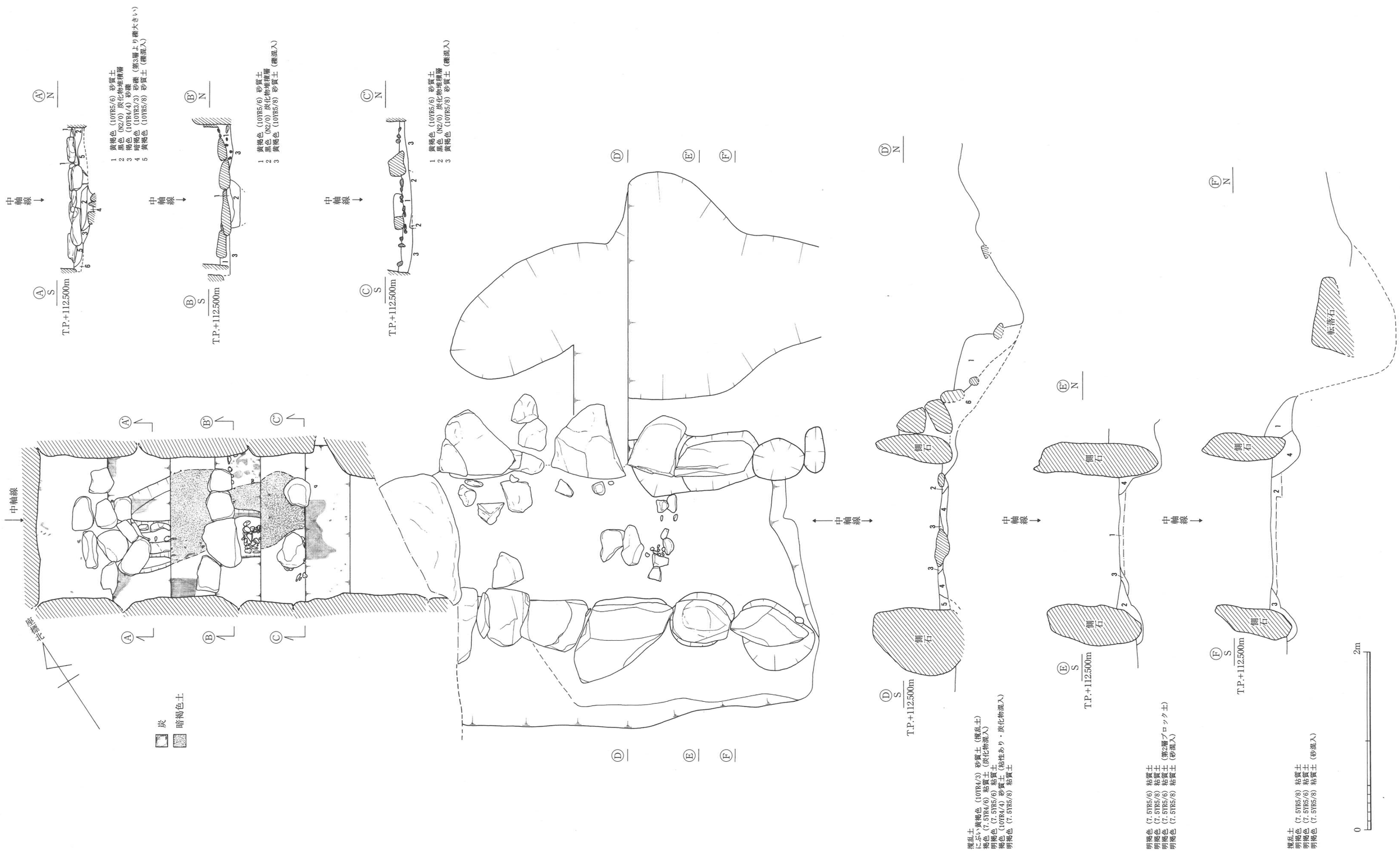
右側壁の基底石第１石は縦 0.9 m以上・横 1.5 mの石材を使用している。この石材は玄門部をまたいで据えている。第２石目以降は、左側壁同様、縦 0.7 m以上・横 1.1 mを測る第２石は横位に、第３～６石は縦位に据えている。右側壁の各基底石の上面平坦ではないことから、２段目の石材を谷積みしている。基底石の第１石上面には縦 0.5 m・横 1.0 mの石材を積み上げ、玄室部の２段目の高さと合わせている。また羨門側の傾斜した個所には 0.3 ～ 0.4 m大の石材を３石充填している。その上面に縦 0.6 m・横 1.0 mの石材が、さらに３段目となる 0.3 × 0.5 mの石材を２石積み上げている。天井部との間隙には約 0.2 mの石材を充填する。

天井石は、玄室部が２石で構成され、羨道部が見上げ石にあたる１石だけが残る。玄室部の天井石２石の大きさは、奥壁側で長さ 1.2 m、玄門側で長さ 1.6 m・高さ 0.5 m以上、見上げ石は長さ 1.45 m・高さ 0.3 mを測る。

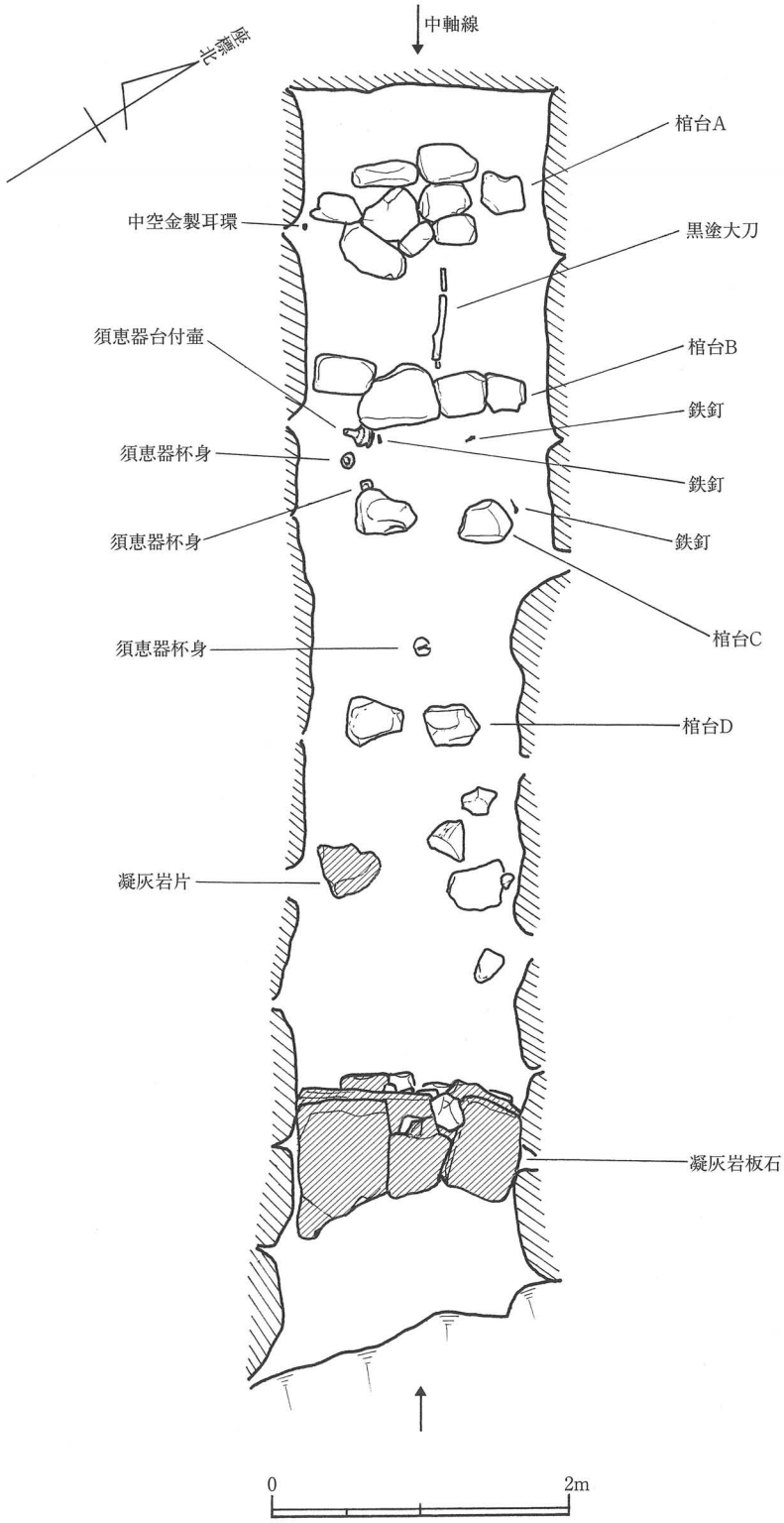
（4）敷石（バラス敷）・棺台（第 23 図）　石室床面には４～ 15㎝大の白みがかった石が敷かれていた。1・5・6 号墳とは異なり、大きさや色合いが揃っている。石室内には棺台となる扁平な石材が置かれていた。

棺台は奥壁より 0.8 m（0.41 ～ 1.28 m間）で９石（棺台 A）、2.0 m（1.79 ～ 2.29 m間）で４石（棺台 B）、2.9 m（2.69 ～ 3.06 m間）で２石（棺台 C）、4.3 m（4.10 ～ 4.45 m間）で２石（棺台 D）が検出された。棺台 A は、両側壁側に１石ずつ、中央に７石を並べる。縦 0.87 m・横 1.42 mを測る。石材の大きさは、0.15 × 0.20 ～ 0.45 × 0.25 m、厚さは 0.1 m程度であった。棺台 B は、４石を横１列に並べ、縦 0.5 m・横幅 1.39 mを測る。石材の大きさは左側壁側より 0.25 × 0.25 m、0.30 × 0.30 m、0.40 × 0.55 m、0.25 × 0.40 mで、厚さは 0.1 ～ 0.2 mを測る。棺台 A・B 間は約 1.2 mを測る。使用されている石材は、棺台 C・D よりも扁平である。棺台 C の２石の間は約 0.7 m、棺台 D は約 0.6 m、両者の間は約 1.4 mである。石材は 0.3 ～ 0.4 mで、やや角ばった石材を使用している。棺台 C の右側壁側の石材は、須恵器杯（第 25 図 3）の上に置かれていた。棺台の状況からみて、玄室内に１体（棺台 A・B 間）、玄門をまたぐように１体（棺台 C・D 間）が安置され、少なくとも２体は埋葬されていたであろう。また、棺台 D の位置から約１mのところで２石検出されており、これらを棺台とするならば、羨道部中央にもう１体埋葬されていた可能性がある。

（5）玄室床面排水施設（第 23 図）　敷石除去後、玄室部の床面３個所に横断トレンチを設

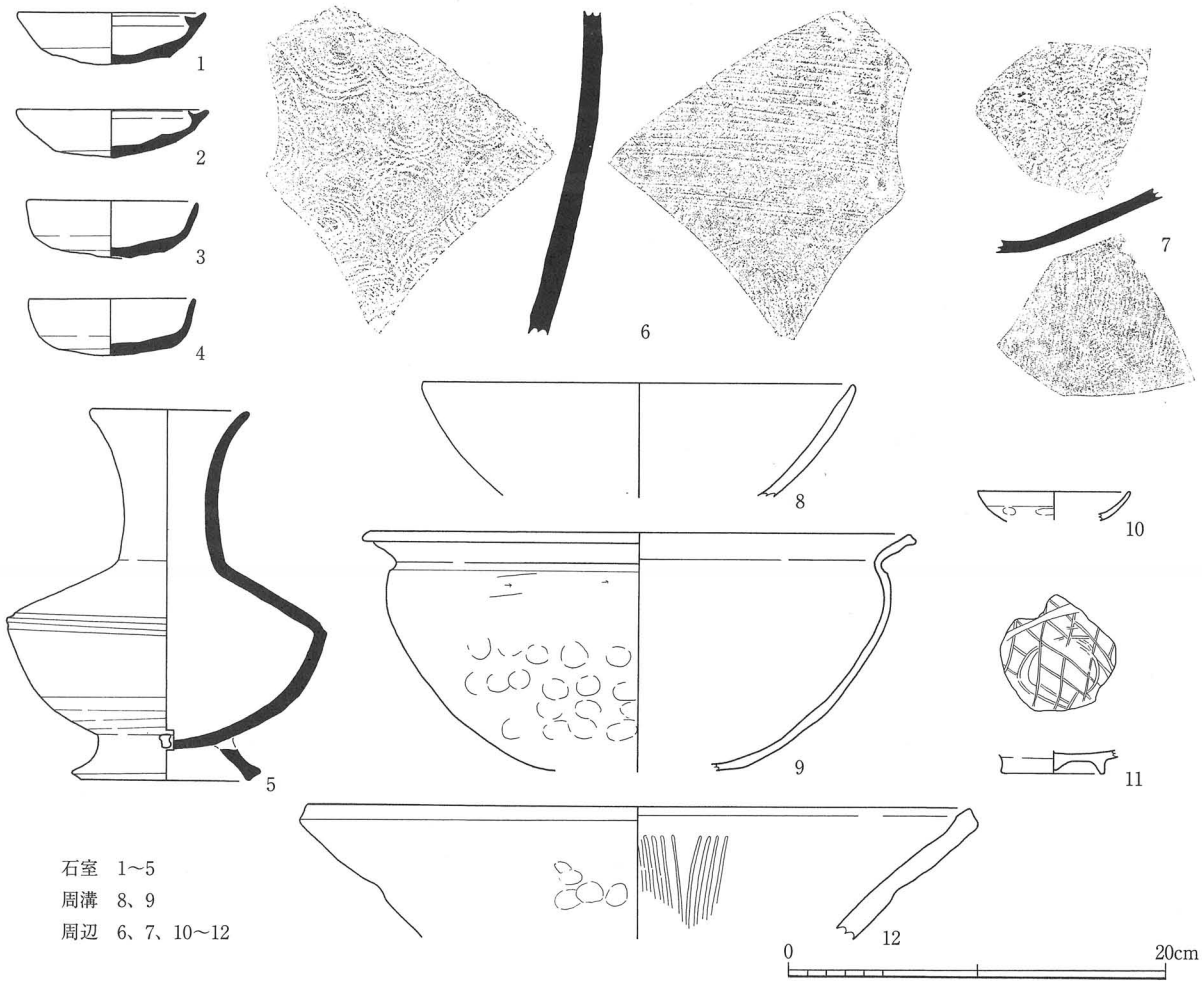


第23図　加納２号墳石室床面断ち割り状況平面図・断面図（1/40）



第24図　加納２号墳遺物出土状況図（1/50）

定し、床面直下の構造を調べた。敷石直下の床面土は、黄褐色系の粘質土で、炭が多量に混入する。また、中軸線上に沿って暗褐色土が縞状に延び、それを掘りあげた底面で排水溝が検出された。5・6号墳の排水溝のように形は整ってはいない。玄門付近に設けたトレンチからは、検出されなかった。排水溝の長さは1.4 m、幅0.2 ～ 0.4 mを測る。これが羨道部に延びるかどうかは確認で



第25図　加納２号墳出土遺物実測図（1/4）

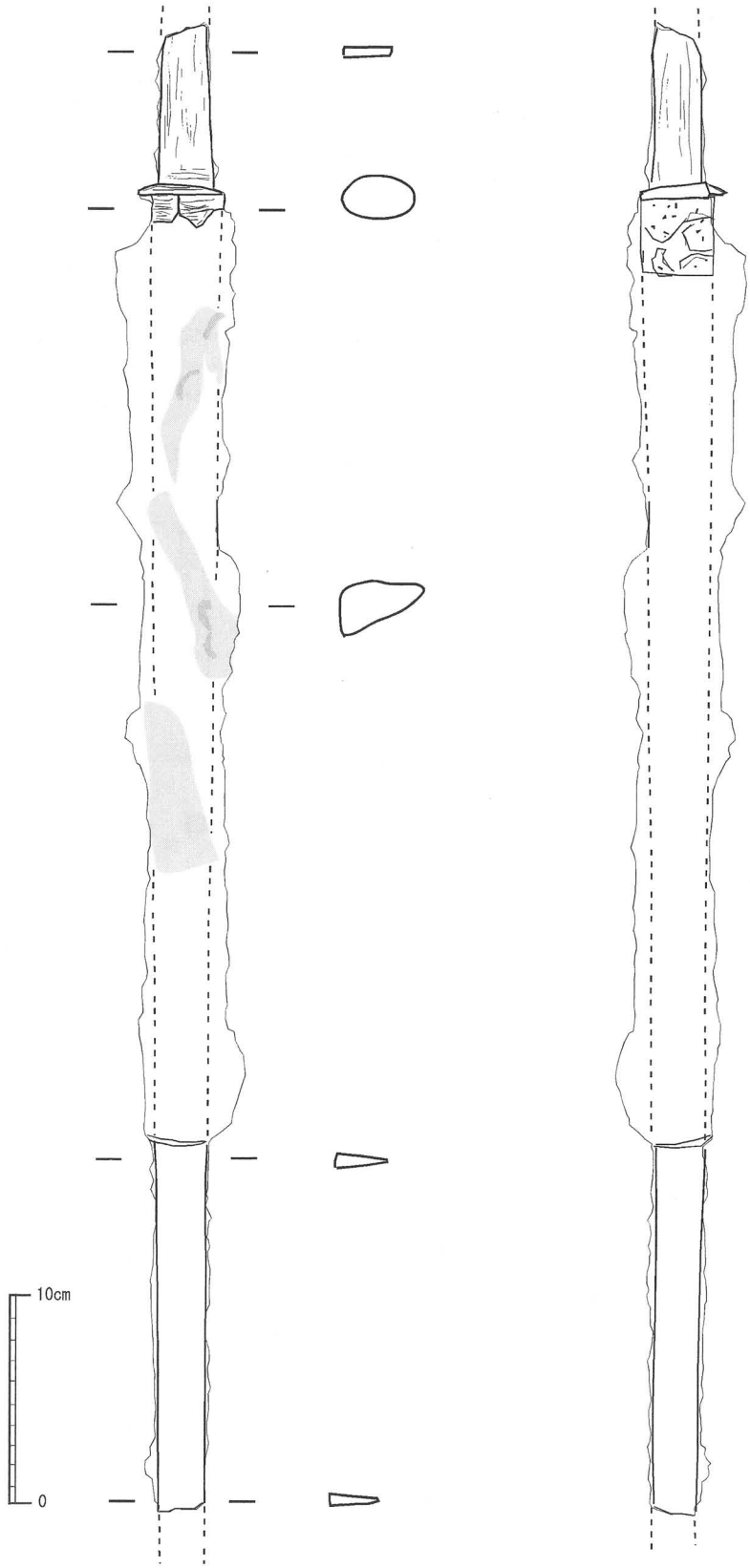
きなかった。

（６）石室内遺物出土状況（第24図）　石室床面より、黒塗大刀１振（第26図）、中空金製耳環（第27図27）、須恵器杯身３点（第25図１・３～４）、壷１点（同図５）、鉄釘６点（第27図１～６）が出土した。石室敷石直上出土の鉄釘は３点であった。黒塗大刀は、棺台A・B間の木棺があったと思われる位置で、中軸線より左側壁側に約0.15 mの位置で検出された。切先は奥壁を向いていた。大刀の付近には敷石が少なく、浅い皿形の窪みとなっていた。その付近の敷石や土には、炭が付着していた。中空金製耳環は、右側壁基底石の第１・２石付近で出土したが、盗掘の際に原位置より動かされたと思われる。須恵器杯身（第25図3･4）と壷（同図５）は棺台B・C間の右側壁側で出土した。杯身（同図３）は棺台C（右側壁側）の石材の下に挟まれていた。また棺台C・D間の中軸線上で須恵器杯身（同図１）が出土している。

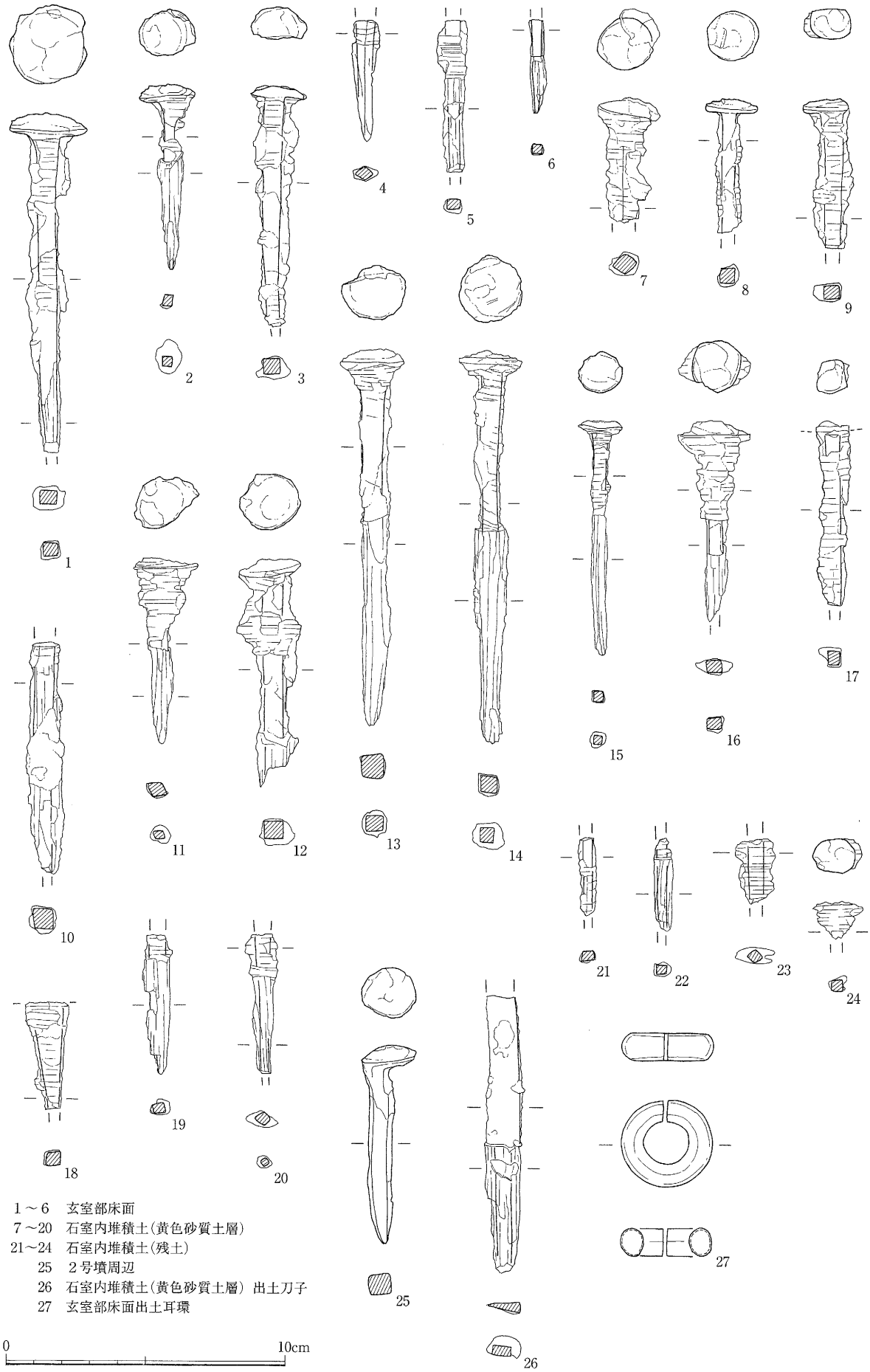
（７）凝灰岩板石（第21・22図）　羨門部に凝灰岩板石が積まれていた。玄門部より約3.4 mの位置に0.2～0.6 m大の自然石が一列に並べられ、その上に羨門側に約30°傾斜させて凝灰岩板石が２段に重ねられていた。上段の凝灰岩板石の上部は風化していたが、側面には鑿による加工痕がよく残っていた。凝灰岩の厚さはいずれも0.15 m前後であった。２号墳の羨道部に

は１号墳のように自然石を積み上げた閉塞石が認められなかったこと、２号墳の凝灰岩が明らかに人為的に積み上げられたことからすると、これらの凝灰岩板石は、閉塞扉の石材であった可能性は否定できない。

（8）石室内の堆積土（第18図）　玄室部には開口部より流れ込んだ土が堆積していたが、作業途上、不用意に掘削してしまい図化できなかった。玄室部では、右側壁側は２段目中央付近まで、左側壁側は基底石上面まで土砂が堆積していた。床面直上には、厚さ0.3ｍの黄色砂質土が堆積し、ここから鉄釘18点（第27図7～24）と刀子１点（図26）が出土している。羨道部内には側石が転落し、里道はその上面を整地して設けられていた。



第26図　加納２号墳出土黒塗大刀実測図



第27図　加納2号墳出土鉄製品・耳環実測図 (1/2)

5．出土遺物（第25～27図、表2）

石室床面より出土した黒塗大刀（第26図）は、柄頭と刀身の先端が欠失しているが、黒塗の鞘が部分的に残っている。鞘の黒漆の上部には、赤漆で雲文状のものを表現しているのが確認できる。また、鍔も半分ほど遺存し、刀身が鞘から抜け出さないための金具である金銅製鏻（はばき）も遺存している。鏻部分には列点状の文様が確認されるが、明確ではない。刀身は真っ直ぐ細身であり、実戦的な武器とは思えない。そういう意味からも儀仗用の大刀の可能性が高い。法量については、残存長69.9cm、柄部残存長7.7cm、同幅2～2.4cm、刀身残存長58.2cm、同幅2.5cm、鏻長3.3c、同幅3.0cmをはかり、重量は945.6gである。中空耳環（第27図34）は金製で、直径3.3㎝を測る。石室内より須恵器杯身4点（第25図1～4）と壺1点（同図5）が出土している。（1、2）は陶邑Ⅱ－6、（3～5）は陶邑Ⅲ－2～3の器と思われ、初葬と追葬の時期を示す遺物であろう。ほかに鉄釘25点、刀子1点が出土した（第27図）。

なお、第25図9は、周溝埋没後正置された土師器鉢で、8世紀中頃のものである。

第3節　加納5号墳

1．調査前の地形

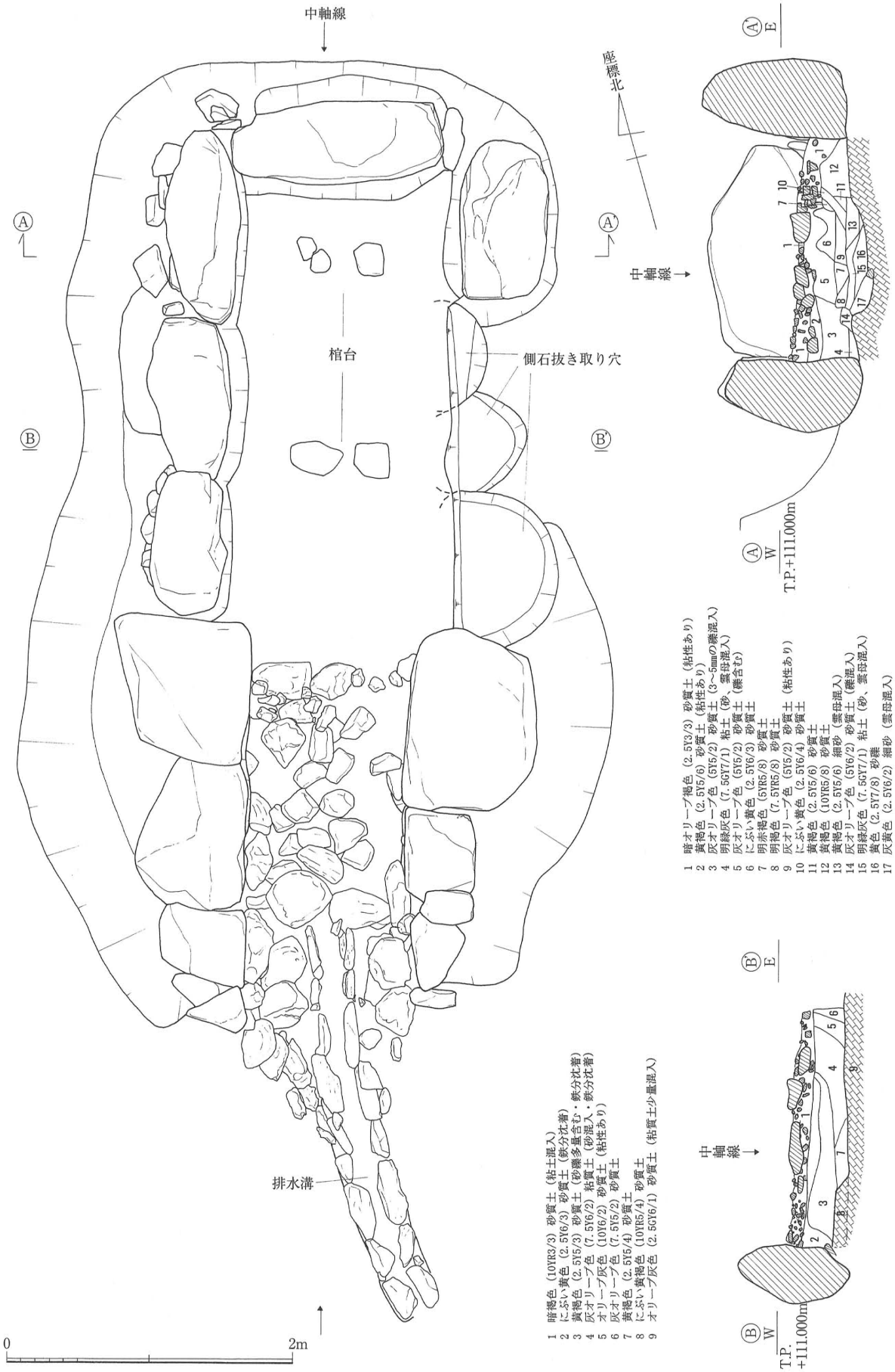
5号墳は、調査区中央部北側、丘陵東斜面の裾部に築造された横穴式石室墳であり、平成12年度の調査で新規発見された。農道東側の2～5段目の棚田の耕土・旧耕土層（層厚0.2～0.4 m）を除去すると、墳丘盛土・石室の側石材が露出した。しかし、石室上部は完全に破壊され、基底部のみ残っていた。石室主軸ラインを境として棚田の段がつけられたため、羨道部右側壁が残っていたのは2段目までであった。左側壁の石材は基底石を残すのみであった。特に、玄室部左側壁基底石は、中世の開墾の際に掘られた溝の石垣として利用されたため、原位置を保っていなかった。第8図にみられるように、この溝の位置は現在までほとんど変わっていない。

2．墳丘（第29図）

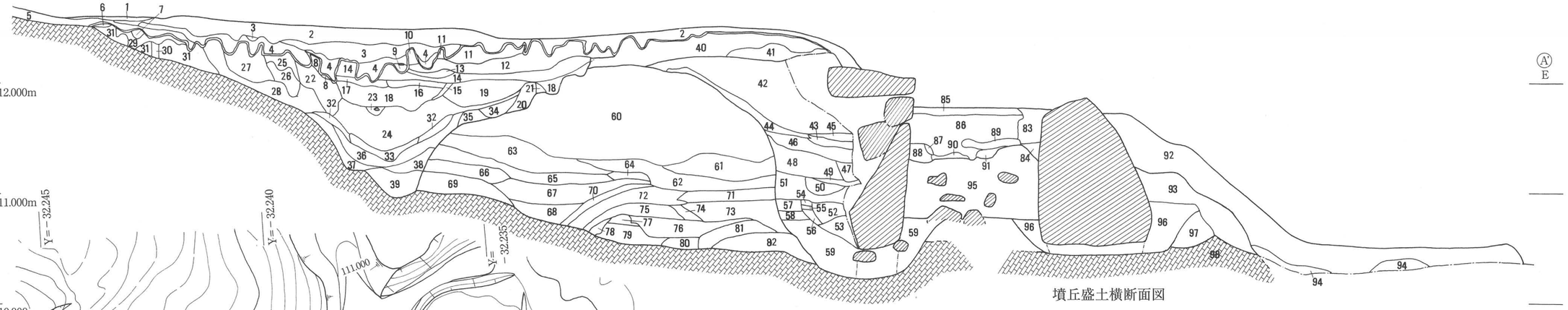
（1）墳丘の形状と規模　　5号墳は尾根裾の標高T.P.110.5 m付近に築造された。墳丘西側で検出した周溝の形状より、主軸（南北）方向に長い楕円形で、規模は南北約14 m・東西約11 mを測る。墳丘基底部のみが形状をとどめる。中世の開墾時に墳丘盛土の大半が削平されてしまい、耕土・旧耕土層を除去すると地山面となる個所もあった。その中でも2段目棚田の直下（石室西側）が比較的良好に残存していた。墳丘東側裾は6号墳の周溝に切られている。

（2）墳丘の構造　　墳丘の残り具合がよくないため、構築の過程については不明なところが多い。第29図の墳丘横断面より、旧地形の尾根の傾斜に沿って堤状に第70～82層が盛られ、それから第61～69層・第60層と盛っている。断面状況からみる限りは墳丘築造時の盛土である。

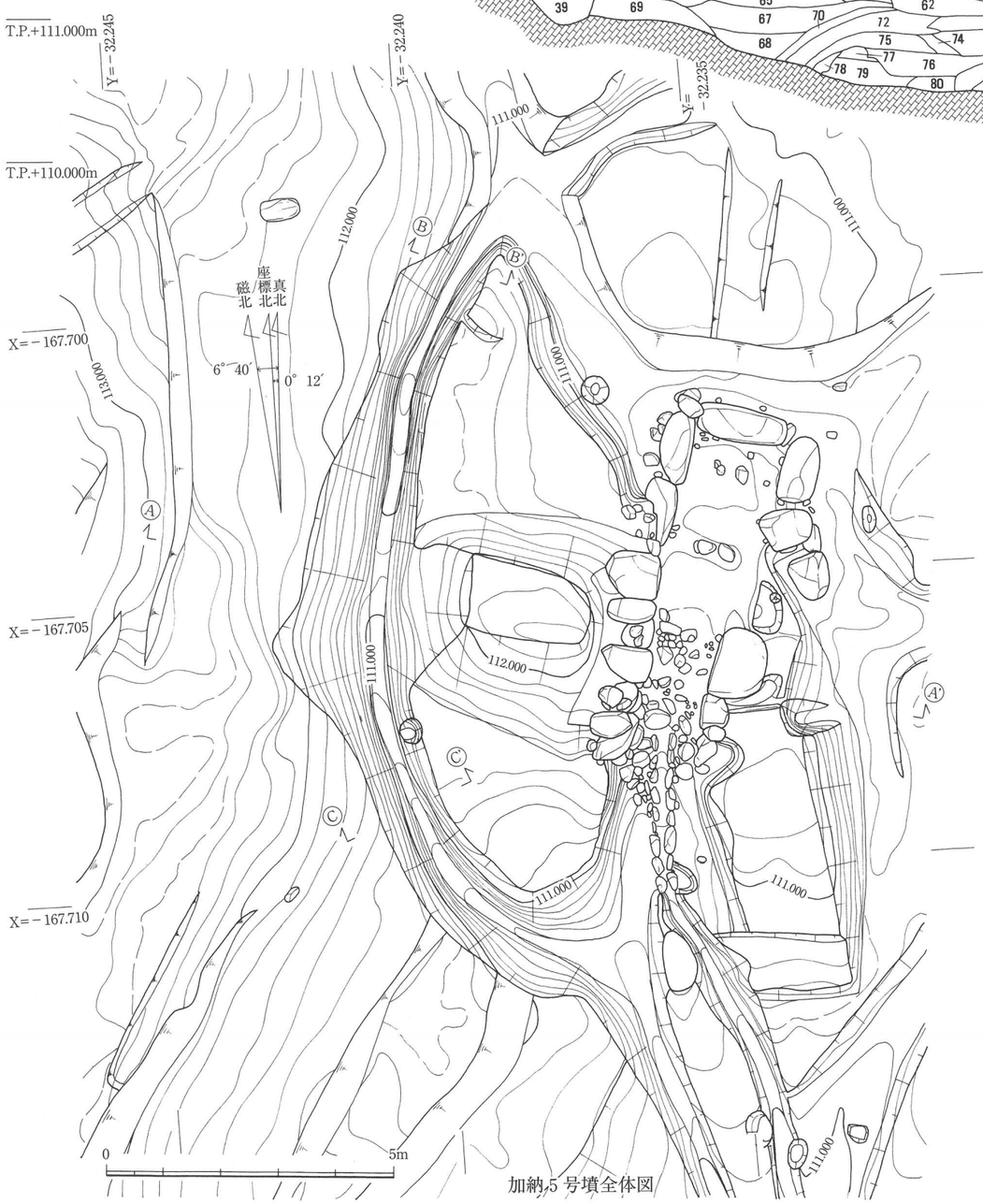
石室は長さ9.8 m・幅4.5 mの墓壙を設け、掘方を掘削した後基底石を据えている。墳丘東側の盛土状況は不明であるが、墳丘西側では基底石の据え付け後、掘り方に0.1～0.4 mの厚



第28図　加納５号墳平面図・立面図・断面図 (1/40)



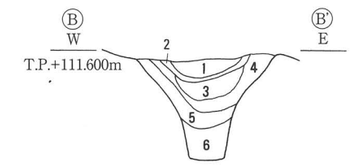
墳丘盛土横断面図



加納5号墳全体図

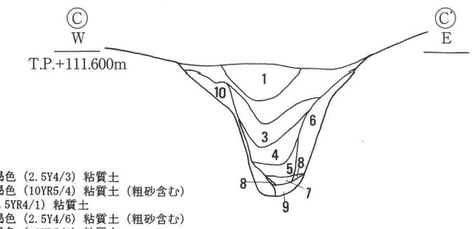
1 にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土（砂礫含む）
2 褐色（10YR4/4）砂質土
3 黒褐色（10YR3/1）砂質土（2～20mmの礫含む）
4 黄褐色（10YR5/6）粘質土（砂混入）
5 明褐色（7.5YR5/8）砂質土
6 褐色（7.5YR4/4）砂質土
7 褐色（10YR4/6）粘質土（砂混入）
8 暗褐色（10YR3/3）粘質土（砂礫含む）
9 オリーブ褐色（2.5Y4/4）粘質土
10 黒褐色（10YR2/3）粘質土
11 黒褐色（10YR2/2）砂質土
12 褐色（10YR4/4）砂質土（粘土混入）
13 にぶい赤褐色（5YR4/4）砂質土（粘土混入）
14 暗褐色（7.5YR3/4）砂質土（粘質土混入）
15 褐色（10YR4/6）粘質土
16 褐色（7.5YR4/3）シルト
17 にぶい赤褐色（5YR4/4）粘質土（砂礫含む）
18 褐色（7.5YR4/4）粘質土（粗砂含む）
19 褐色（10YR4/4）粘質土（粗砂多量含む）
20 黄褐色（10YR5/6）粘質土
21 にぶい黄褐色（10YR5/3）粘質土
22 褐色（10YR4/6）粘質土（粗砂含む）
23 褐色（10YR4/4）粘質土（粗砂含む）
24 オリーブ褐色（2.5Y4/6）粘質土
25 にぶい赤褐色（5YR4/4）粘質土
26 褐色（10YR4/6）粘質土
27 褐色（7.5YR4/4）砂質土（粘質土微量混入）
28 褐色（10YR4/6）粘質土
29 明褐色（7.5YR5/8）粘質土（砂礫含む）
30 明褐色（7.5YR5/8）粘質土
31 明褐色（7.5YR5/6）粘質土
32 褐色（10YR4/6）粘質土（粗砂含む）
33 黒褐色（10YR2/3）粘質土（砂礫含む）
34 暗褐色（10YR3/3）粘質土
35 オリーブ褐色（2.5Y4/6）粘質土
36 オリーブ褐色（2.5Y4/6）粘質土（砂礫含む）
37 黄褐色（10YR5/6）粘質土（砂礫含む）
38 褐色（10YR4/6）粘質土（粗砂多量含む）
39 黄褐色（10YR5/6）砂（粘質土、礫混入）
40 褐色（7.5YR4/4）粘質土（粗砂多量含む）
41 褐色（10YR4/6）砂質土
42 明褐色（7.5YR5/8）粘質土（礫混入）
43 オリーブ褐色（2.5Y4/6）粘質土（砂混入）
44 黄褐色（10YR5/8）粘質土（礫、炭化物混入）
45 にぶい黄褐色（10YR5/3）粘質土（砂混入・炭化物少量混入）
46 明褐色（7.5YR5/8）粘質土（下層に炭化物混入）
47 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土（砂混入）
48 褐色（7.5YR4/4）粘質土（砂、炭化物混入）
49 黄褐色（10YR5/6）粘質土（砂混入）
50 にぶい黄橙色（10YR6/4）粘質土（砂、炭化物混入）
51 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土（砂、炭化物混入）
52 明褐色（7.5YR5/5）粘質土（砂混入）
53 灰黄色（2.5Y6/2）砂質土（粘性あり）
54 黄褐色（2.5Y5/6）粘質土（砂少量混入）
55 黄褐色（2.5Y5/5）粘質土
56 明黄褐色（2.5Y6/6）粘質土
57 灰黄褐色（10YR5/2）砂質土（粘土混入）
58 明褐色（7.5YR5/6）粘質土
59 にぶい黄色（2.5Y6/4）粘質土
60 明赤褐色（5YR5/8）粘質土（礫混入）
61 黄褐色（10YR5/6）粘質土（礫混入）
62 明赤褐色（5YR5/8）粘質土（砂少量含む）
63 明褐色（7.5YR5/8）粘質土（礫多量混入）
64 褐色（10YR4/6）粘質土（砂少量含む）
65 橙色（7.5YR6/8）砂質土（粘性あり）
66 明褐色（7.5YR5/6）粘質土（砂混入）
67 褐色（10YR4/6）粘質土（礫多量混入）
68 黄褐色（10YR5/8）砂質土
69 黄褐色（10YR5/6）粘質土（礫多量混入）
70 にぶい黄褐色（10YR5/4）細砂
71 褐色（10YR4/4）粘質土（礫混入）
72 にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土（粘性あり・礫混入）
73 黄褐色（2.5Y5/4）粘質土（砂少量混入）
74 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土（礫多量混入）
75 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土（砂混入）
76 黄褐色（2.5Y5/4）砂質土（粘性あり）
77 黄褐色（10YR5/6）砂質土
78 橙色（5YR6/6）砂質土（粘性あり）
79 橙色（7.5YR6/6）砂質土
80 橙色（7.5YR6/6）砂質土
81 にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土（礫多量混入）
82 黄褐色（10YR5/6）砂質土（粘性あり）
83 褐色（10YR4/4）砂質土
84 褐色（10YR4/4）粘質土
85 褐色（7.5YR4/4）砂質土
86 にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土（砂礫混入）
87 オリーブ黒色（5Y3/1）砂
88 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土
89 褐色（10YR4/4）粘質土（黒褐色（10YR3/2）砂混入・マンガン粒微量沈着）
90 オリーブ褐色（2.5Y4/4）粘質土
91 暗褐色（7.5YR3/4）粘質土（マンガン粒微量沈着）
92 にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土（砂礫含む）
93 暗褐色（10YR3/3）粘質土
94 緑灰色（10GY5/1）粘土（砂混入）
95 褐色（10YR4/6）粘質土（上層部マンガン粒微量沈着）
96 黄褐色（2.5Y5/3）砂質土（粘性あり・礫含む）
97 黄褐色（2.5Y5/4）粘質土（砂礫含む）
98 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土（砂礫含む）

旧耕土 ⇒ 1～5層
棚田造成時整地土 ⇒ 83～94層
閉塞石内堆積土 ⇒ 95層
周溝埋土 ⇒ 6～39層
墳丘盛土Ⅱ ⇒ 40～42層
墳丘盛土Ⅰ ⇒ 43～59・96層
墳丘築造時整地土 ⇒ 60～82・97層
地山 ⇒ 98層



1 暗褐色（10YR3/4）粘質土（礫含む）
2 黄褐色（10YR5/6）粘質土（砂含む）
3 黄褐色（10YR5/8）粘質土
4 黄褐色（2.5YR5/6）粘質土
5 黄褐色（2.5Y5/4）粘質土
6 オリーブ褐色（2.5Y4/6）砂（礫含む）

周溝断面図①

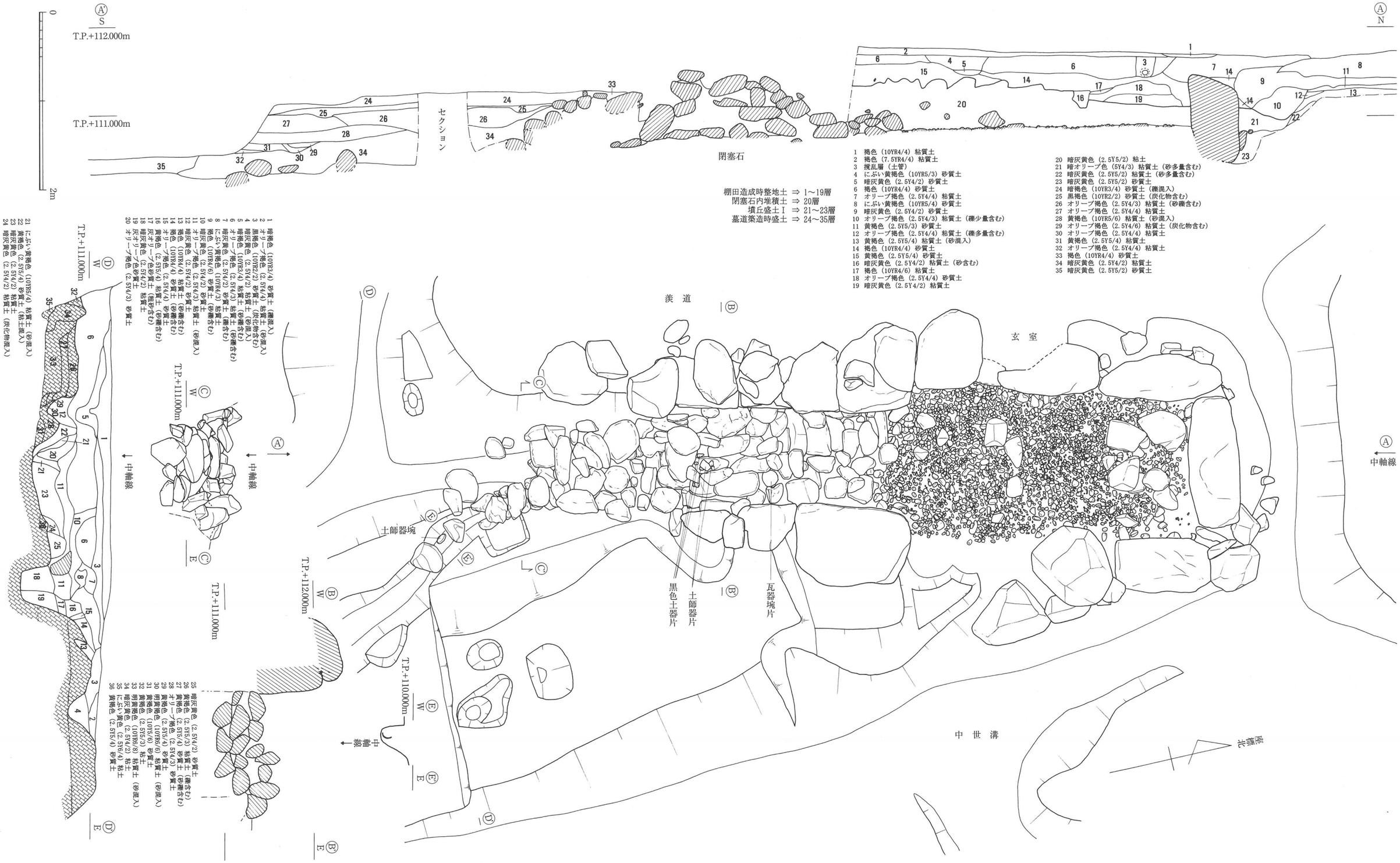


1 オリーブ褐色（2.5Y4/3）粘質土
2 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土（粗砂含む）
3 褐灰色（7.5YR4/1）粘質土
4 オリーブ褐色（2.5Y4/6）粘質土（粗砂含む）
5 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土
6 にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土
7 黄褐色（2.5Y5/4）粘質土（粗砂含む）
8 暗灰黄色（2.5Y4/2）粘質土
9 黄褐色（10YR5/6）粘質土（粗砂含む）
10 黄褐色（2.5Y5/6）粘質土

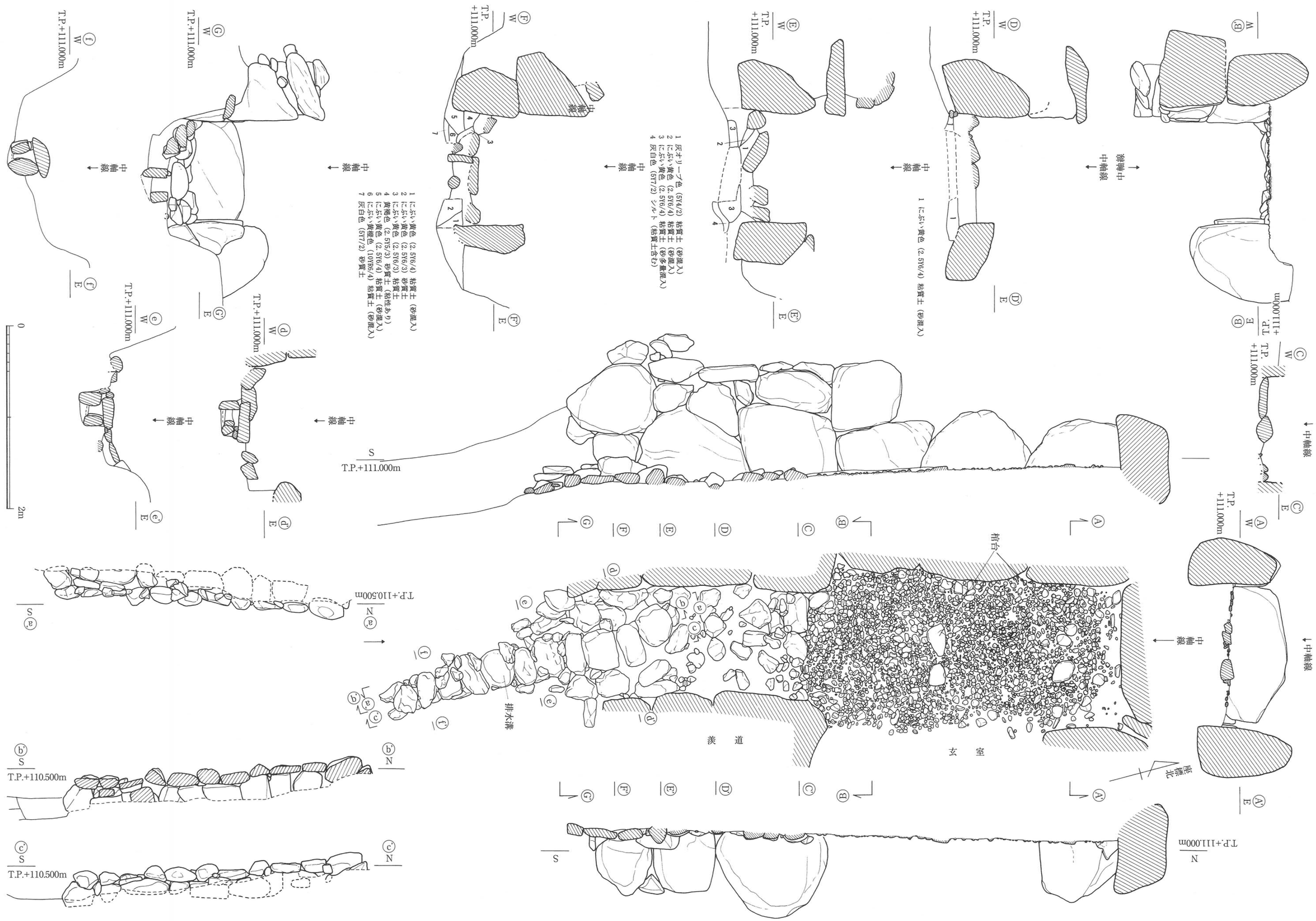
周溝断面図②

0 2m

第29図　加納5号墳全体図（1/100）・墳丘盛土横断面図・周溝断面図（1/40）



第30図　加納５号墳平面図・立面図・断面図（1/40）


中軸線
T.P.+111.000m
T.P.+110.500m
T.P.+110.500m
T.P.+110.500m
T.P.+111.000m
T.P.+111.000m
T.P.+111.000m
T.P.+111.000m
T.P.+111.000m
T.P.+111.000m
T.P.+111.000m
T.P.+111.000m
T.P.+111.000m
T.P.+111.000m
T.P.+111.000m
T.P.+111.000m
T.P.+111.000m
T.P.+111.000m
T.P.+111.000m
T.P.+110.500m
T.P.+110.500m
T.P.+111.000m
T.P.+111.000m
T.P.+111.000m
T.P.+111.000m
T.P.+111.000m
T.P.+111.000m
T.P.+111.000m
T.P.+111.000m
T.P.+111.000m
T.P.+111.000m
T.P.+111.000m
T.P.+111.000m
T.P.+111.000m
T.P.+111.000m
T.P.+111.000

さで裏込土を充填している（同図第 40 ～ 59 層）。

3．外部施設

墳丘西側で周溝を検出した。周溝は幅 1.5 m・深さ 1.6 mを測り、断面形は逆台形を呈する。溝の側面には流水の渦巻によって抉られた凹凸が見られ、尾根からの流水が激しかったことがうかがえる。中世になると、墳丘北西側から奥壁付近を横断して墳丘東側へ延びる溝が造られていることから、流水対策には注意が払われ続けたようである。墳丘北東側で見られる溝も周溝の一部であると思われるが、古墳築造以降の溝の可能性も指摘しておきたい。周溝以外に墳丘に付属する施設を示唆するような遺構・遺物は確認できなかった。

4．埋葬施設

（1）石室の概略（第 28・30 ～ 31 図）　5 号墳の埋葬施設は、両袖式の横穴式石室である。石室の主軸方向はＮ－ 17°－Ｗを示し、南向きに開口している。石室は玄室部と羨道部からなり、羨道部の先端には墓道が付設されている。

石室の現状は、後世の撹乱、特に中世の棚田造成により側石材の多くが取り外されてしまっている。羨道部右側壁が最もよく遺存しており、2 段目まで確認できる。玄室部左側壁の一部は、前述したように、移動され中世溝の石垣に利用されていた。石室上部の残存状況は悪いが、石室床面や羨道部排水溝などは完存していた。

石室の規模は、全長 5.67 m（墓道も含めると約 8.1 m）、玄室長 3.40 m・玄室幅 1.6 m、羨道長 2.27 m・羨道幅 1.15 m、石室残存高 1.6 mを測る。玄室長：羨道長は 1.5：1 の比率となり、羨道部は玄室部より短い。石室の床面の高さは、奥壁付近で T.P.110.9 mを測るが、玄門部では T.P.110.8 mで、緩やかに傾斜している。羨道部は T.P.110.8 mと一定している。石組み排水溝の先端では T.P.110.5 mを測り、羨門部との比高差は約 0.3 mである。

（2）石室の規模（第 30 図）

玄室部の規模　玄室の長さは 3.40 m・幅は奥壁付近で 1.54 mを測る。玄室部の中央から玄門部にかけて左側壁を欠くが、側石抜き取り穴や敷石の残存状況により、玄門部の幅は 1.7 m であったと思われる。両側壁ともにやや湾曲している。平面形は玄室長：玄室幅が 2.1：1 の長方形である。袖幅は右側壁側で 0.2 m、左側壁側は定かではないが約 0.2 mであったと思われる。玄室高は上部が破壊されているため不明であるが、残存高は 0.65 mを測る。

羨道部の規模　羨道の長さは 2.27 m・幅は 1.15 mを測る。羨道部の側壁ラインは両側壁ともに主軸と平行する。羨道部の残存高は、左側壁側で 0.9 m、右側壁側で 1.6 mを測る。

（3）石室の構造　石材は花崗岩の割石を使用している。玄室部の残存状況は悪く、基底石の構造を把握できたに過ぎない。羨道部では右側壁が比較的良好に残存して、壁面の状況を観察できた。基底石の底部に石を詰め安定を図っているところもあった。

玄室部壁面構成　基底石は奥壁 1 石、右側壁 3 石で構成されている。左側壁は奥壁に接する第 1 石のみ残存していた。第 2 石目以南は中世溝の石垣に転用されていた。しかし、転用され

た石材の大きさと側石抜き取り穴の状況からすれば、4石で構成されていたと思われる。

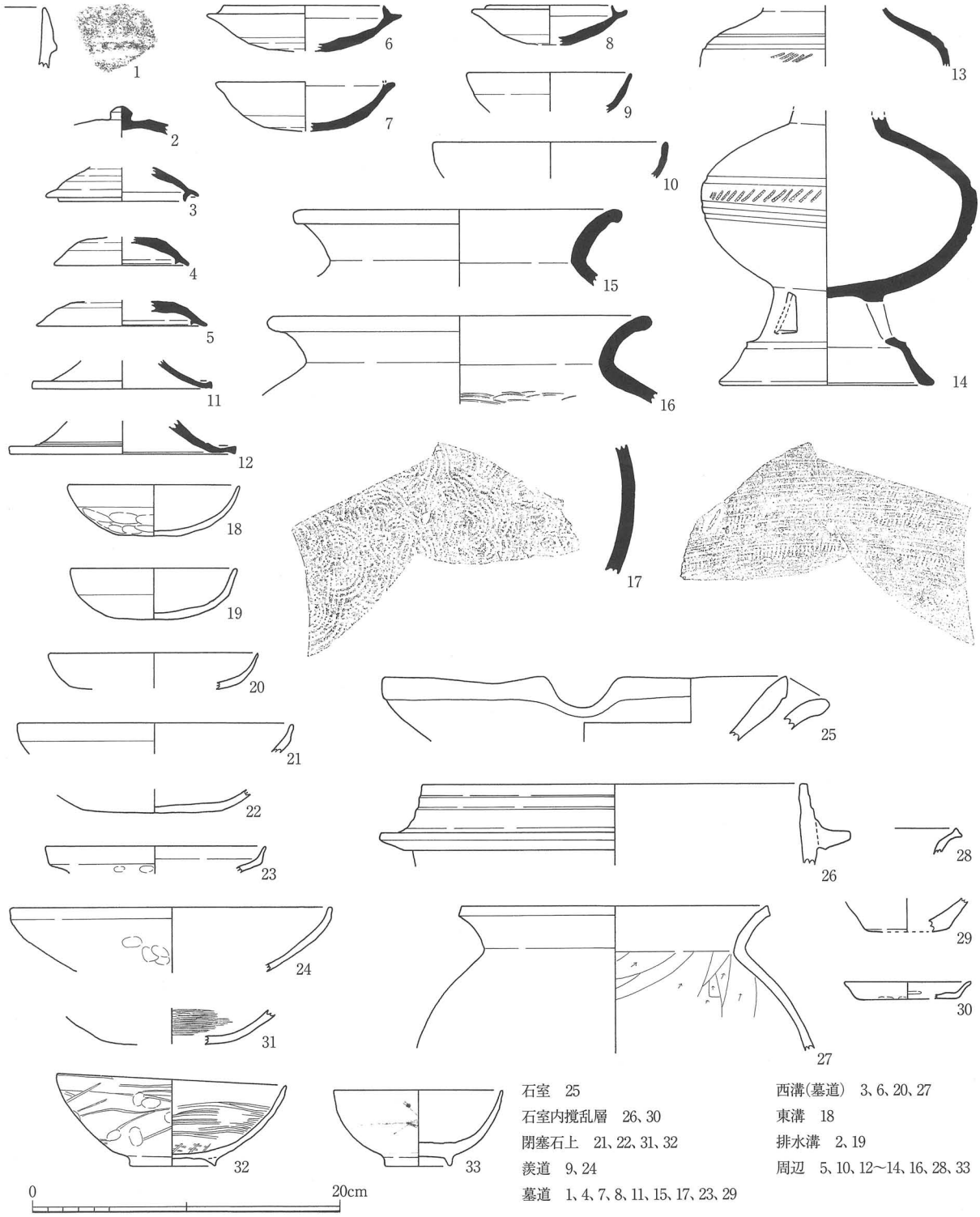
奥壁基底石は、縦1.0 m・横1.5 m・厚さ0.6 mを測る石材を横位に据えている。壁面はやや内傾している。この石材と左側壁第1石との間には詰石が施されていたようであるが、現状では1石しか残っていなかった。左側壁基底石の第1石は、縦1.0 m・横1.1 m・厚さ0.6 mの石材を横位に据えている。右側壁の3石の基底石は、奥壁側より第1石が縦1.0 m・横1.3 m・厚さ0.6 m、第2石が縦1.0 m・横約1.1 m・厚さ約0.6 m、第3石が縦0.6 m以上・横1.0 m・厚さ0.5 mを測る石材を横位に据えている。第1・2石の上面は三角形を呈している。第3石は方形を呈しており、その上面に縦0.8 m・横0.8 m・厚さ0.9 mを測る石材（2段目）が羨道部壁面に隣接して残存している。この石材の上面には後世の楔穴があった。

羨道部壁面構成　基底石は両側壁ともに3石で構成され、その先端には長辺軸を石室主軸に対し直交させる形で置かれている石材があった。

左側壁基底石の第1石目にあたる袖石は、縦1.3 m・横1.2 m・厚さ0.9 mで上部が三角形である。第2石は縦1.0 m・横0.7 m・厚さ0.4 m、第3石は縦0.9 m・横0.6 m・厚さ0.5 mを測る。これらの石材の間には縦0.2 m・横0.3 mの三角形の石材を逆さに充填し、基底石との高さを調整している。袖石との高さは2段目の積み上げ後になされたと思われる。右側壁は2段目まで確認できた。基底石第1石の袖石は、縦・横・厚さともに1.0 mを測る。続く第2・3石の大きさは縦1.0 m・横1.1 m・厚さ0.8 mと縦0.7 m・横0.5 m・厚さ0.6 mで、大きさも形も不揃いであるから、2段目の石材をうまく組み合わせることで高さを合わせ、玄室部2段目石材との整合を図っている。羨門に最も近い2段目石材は、縦0.8 m・横1.0 m・厚さ0.6 mを測るため、ここでは2段目が1石で構成されている。それ以外のところでは2段目の石材の上に扁平な石材を横位に積み上げて上面の高さを合わせている。

（4）敷石（バラス敷）（第31図）　玄室部の床面で敷石（バラス敷）を検出した。上面の高さはT.P.109.7 mを測る。礫の大きさは5～10㎝で小振りである。玄室のほぼ中央には棺台となる石材が4石置かれていた。奥壁より0.6 mに2石、2.0 mに2石あり、棺台の平面は1.4×0.4 mであった。なお、棺材や鉄釘などの遺物は出土しなかった。また、玄門部には仕切石が検出された。玄門部の西半部（右側壁側）に2石あり、それぞれ0.44×0.26 m、厚さ0.1 m（右側壁側）と0.34×0.23 m、厚さ0.2 m（玄門部中央）を測る比較的扁平な石材を用いていた。左側壁側では検出できなかった。

（5）羨道部排水溝（第31図）　羨道部中央（玄門部より1.5 m）から墓道先端にかけて石組みの排水溝が検出された。排水溝の中軸線は石室主軸に対して14°西に振れる。これは旧地形に沿って設置されているためである。検出長3.25 m、幅0.4 mを測る。まず0.3～0.4 mの幅で溝を掘削し、厚さ10～15㎝の側石を縦位に据えている。左側石は8石、右側石は9石を数える。側石の上に0.2×0.4 m大の蓋石11石を被せている。この排水溝の上面に閉塞石や墓道設置のための盛土があるので暗渠として機能していたらしい。石組み排水溝の南端は、なお



第32図　加納５号墳出土遺物実測図（1/4）

も排水溝が伸びており、その埋土中より土師器杯（第32図18）が出土している。

（6）閉塞施設（第30図）　羨道部一帯に0.2～0.5 m大の自然石が積み上げられていた。上部は消失しているが3・4段まで残存し、残存高は約1.0 mを測る。これらの石は閉塞石が崩れたものと思われる。残存した閉塞石上で土師器（第32図21・22）や黒色土器（同図31）、瓦器（同図32）が出土しており、これらは盗掘、撹乱の際に混入したのであろう。この中より

古墳築造期と考えられる遺物は出土しなかった。

(7)墓道（第30図）　羨門部より2.4 m間で墓道が検出された。上記した石組み排水溝を設置後、T.P.111.1 mまで盛土し(層厚0.3～0.6 m)、墓道を形成している。当層より縄紋土器(第32図1)、須恵器杯（同図4・7・8)、高杯脚部（同図11)、甕（同図15・17)、土師器（同図23・29）などが出土している。

(8)石室内の堆積土（第29･30図）　石室内には、暗灰色（2.5Y5/2）粘土が奥壁側で、約0.2 m、玄門部で約0.6 m堆積していた（第31図石室縦断面第20層)。主軸より左側壁側にかけては当層上面より掘り込まれた撹乱層があった。中世溝の石垣として転用された左側壁第2石目の石材の付近から14～15世紀の土師質羽釜片（第32図26）が出土し、その撹乱層中には土師質皿片（同図30）が含まれていた。中世の棚田や溝を造成する際に撹乱されたのであろう。中世棚田造成時の整地土はこの撹乱層（基底石上面高さT.P.+116.7 mまで）の上に盛土されている。

5．出土遺物（第32図、表2～3)

石室内から出土した土師器（第32図25・26・30）は、13～15世紀代に盗掘や撹乱によって混入した遺物である。石室内より古墳築造期の遺物は出土していない。

第4節　加納6号墳

1．調査前の地形

6号墳は調査区中央東側で、5号墳と同じく平成12年度の調査時に新しく発見された横穴式石室墳である。この古墳は、調査区中央を分断する農道の東側の谷筋に造成された棚田の5段目を占めている。

棚田の上面の高さはT.P.110.6 mを測り、層厚0.4 mの耕土・旧耕土層を除去して玄室部基底石を検出することができた。しかし、後世の撹乱によりその大半は消失してしまい、残ったのは墳丘、周溝、玄室部の基底部、石室床面下の排水溝であったが、残存状態はよくない。

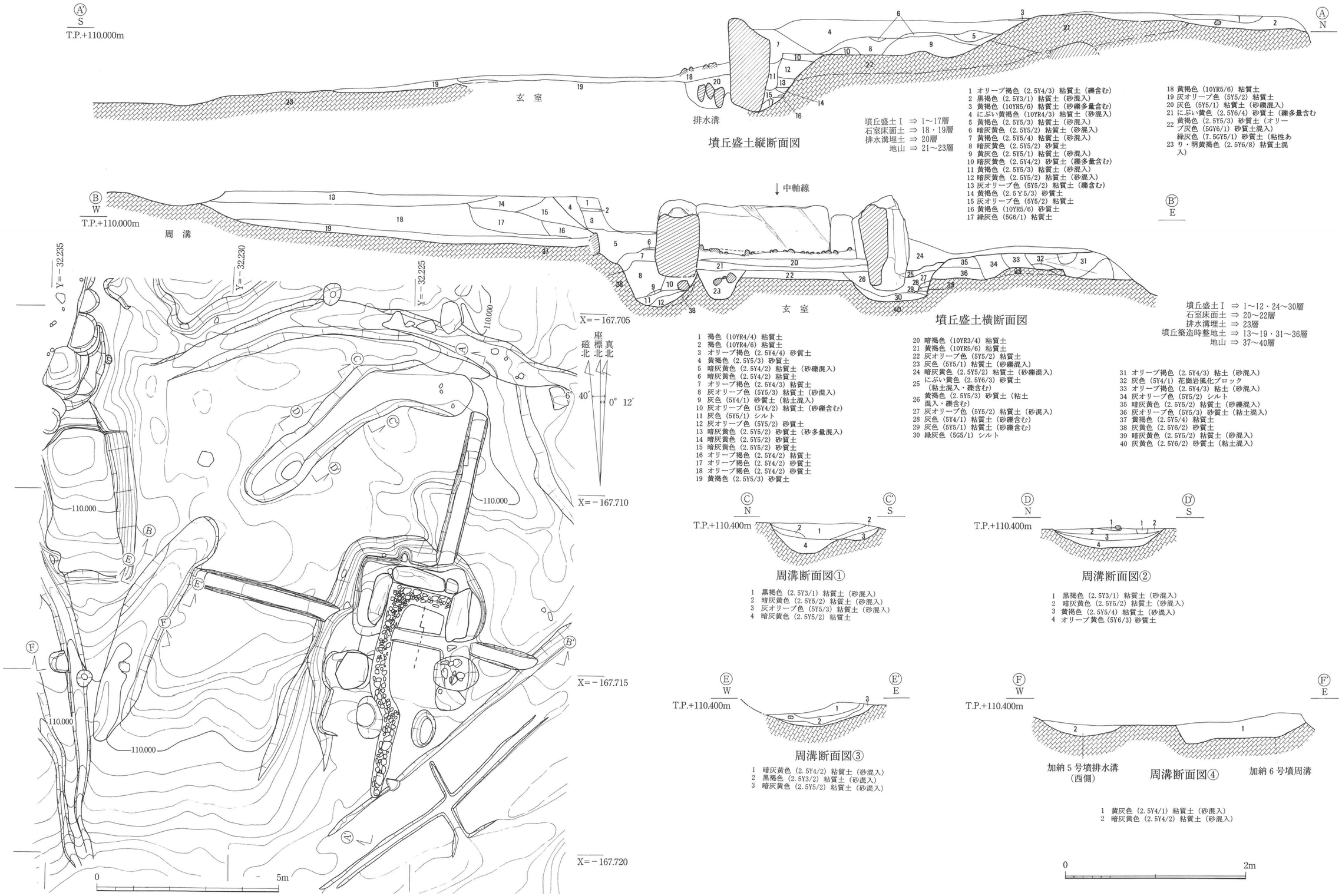
2．墳丘（第33図)

(1) 墳丘の形状と規模　6号墳は尾根の裾、標高T.P.109.5 m付近に築造された墳丘西側に残る周溝の位置、形状から径約14 mの円墳であったと考えられる。後世の棚田造成時に大きく削平を受け、墳丘の基底部のみが残存していた。

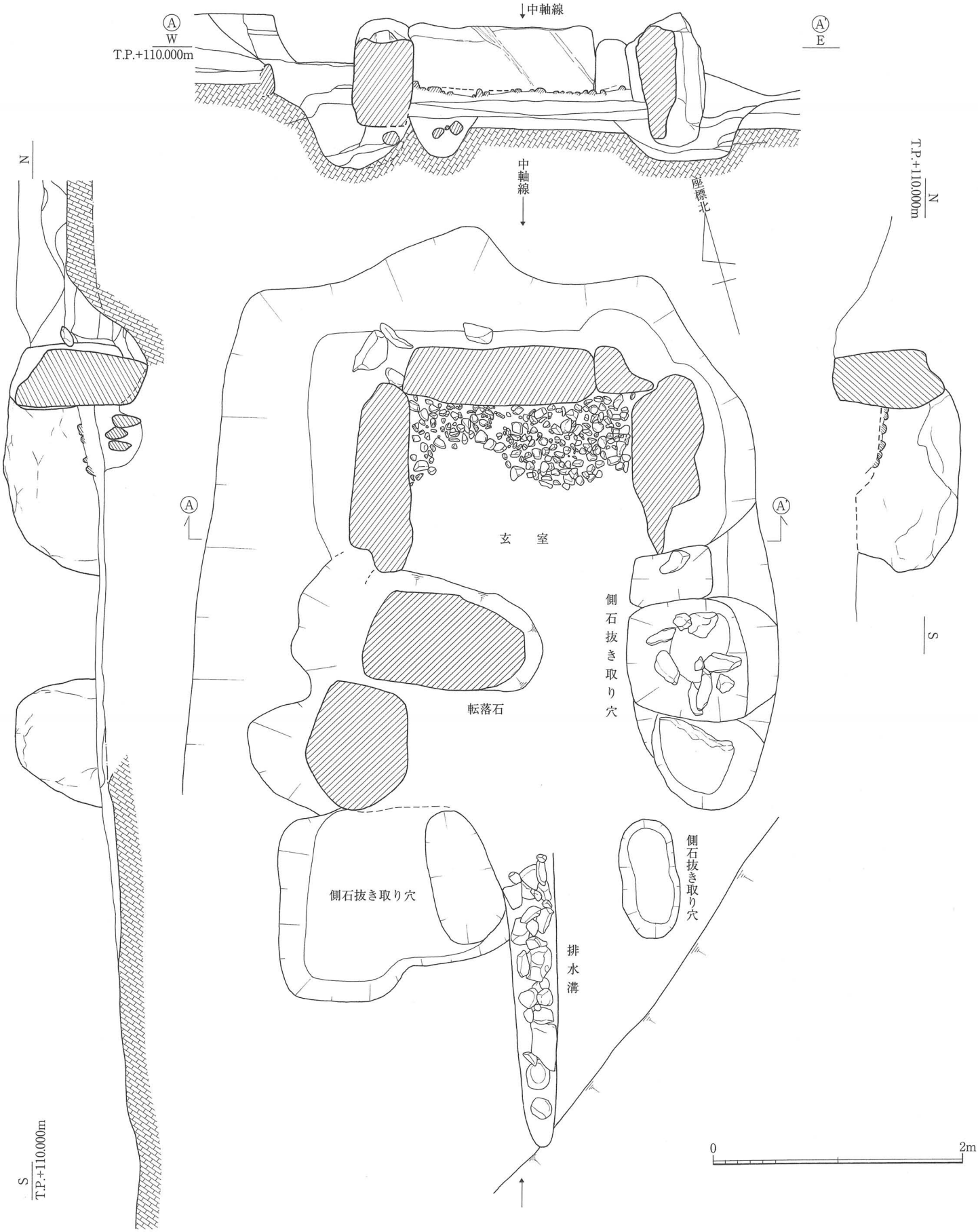
(2) 墳丘の構造　北西から南東に傾斜する地山を成形した後、長さ4.6 m以上、幅4.6 mの墓壙を設け、基底石を据えている。墳丘盛土は、掘方を埋める際の裏込土の一部が残存しているにすぎず、墳丘盛土の詳細は把握できなかった。

3．外部施設（第33図)

墳丘西側で周溝を検出した。検出できたのは底部のみであったため、詳細は不明である。幅1.2 m、深さは0.3 mが残っていた。埋土は1～4層に分層できる。周溝の北側では加納5号墳の



第33図　加納６号墳全体図（1/100）・墳丘盛土断面図・周溝断面図（1/40）



第34図　加納６号墳石室平面図・立面図（1/40）

周溝を切っている可能性が高く、そのうえ5・6号墳の周溝がさらに中世溝に切られていることとも相俟って、両墳の先後関係は判然としない。周溝の南西端では5号墳の東側排水溝と合流している。この地点は、5号墳と同様、尾根からの流水に見舞われやすかったことは、上記の中世溝の存在からも窺われるし、調査時も石室の東側から南側にかけては常に水はけが悪く、土壌も暗灰色～青灰色粘土を呈していたことからも裏付けられる。

周溝内より須恵器・土師器が出土している（第36図4・6・10・11）。遺物の時期から見て8世紀前半には機能を失っていたようである。周溝以外に墳丘に付属する施設を示唆するような遺構・遺物は確認できなかった。

4．埋葬施設（第34・35図）

（1）石室の概略（第34図）　6号墳の埋葬施設は、両袖式の横穴式石室である。石室の主軸方向は、N－15°－Wを示し、南向きの開口である。

後世の撹乱によって残存状況が悪く、奥壁2石・玄室左側壁第1石・右側壁第1・3石の基底石の計5石が原位置を保っていたにすぎず、右側壁第2石は転倒してしまっていた。また、現存する玄室側壁材に隣接して側石抜き取り穴5個所を、さらに奥壁から右側壁にかけての床面下で排水溝を検出した。全長は5.9 m（残存長）、玄室長3.3 m、玄室幅1.8 mを測る。

（2）石室の規模（第34図）

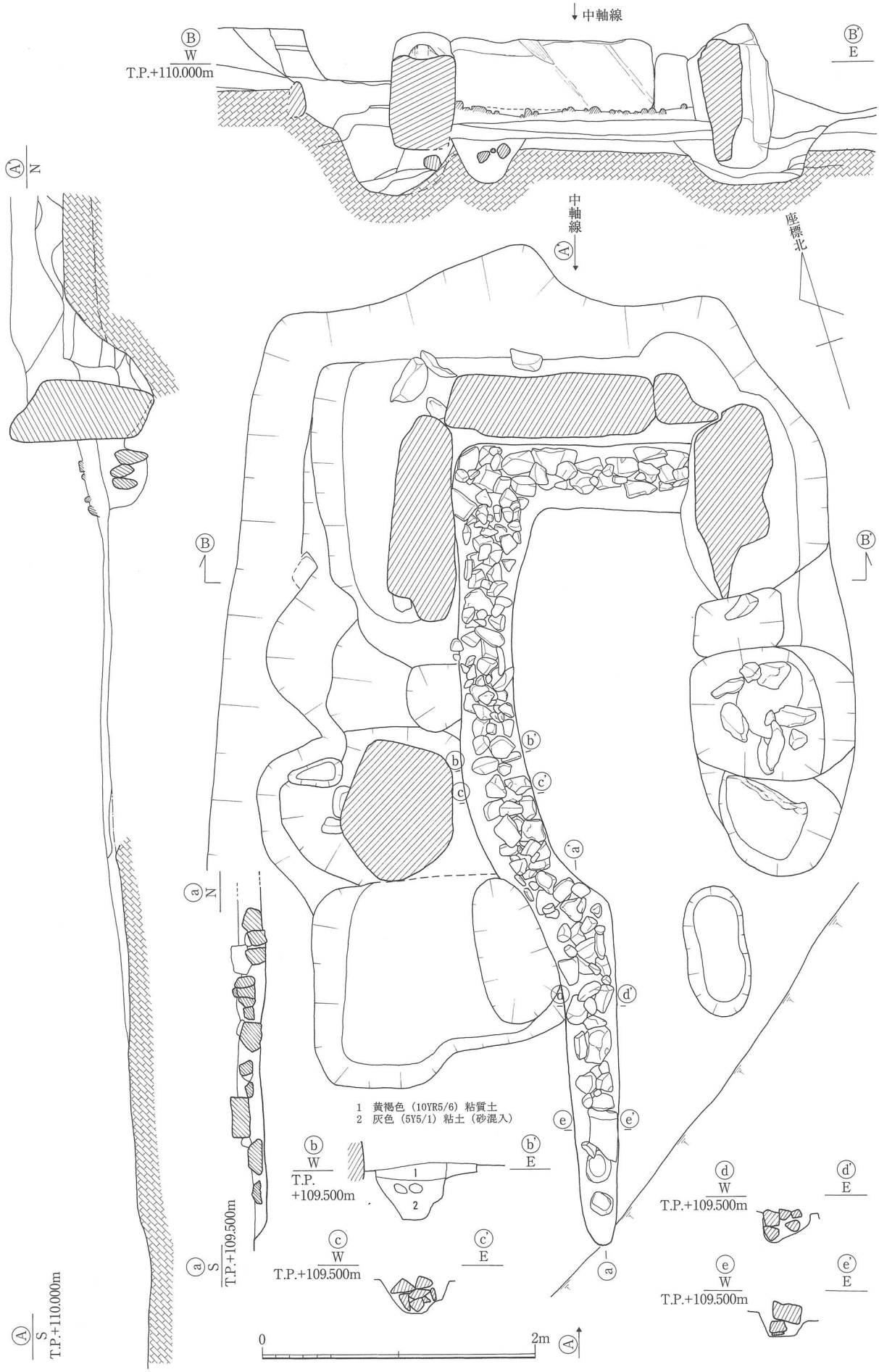
玄室部の規模　玄室長3.3 mを測る。玄室幅は奥壁付近で1.75 mを測り、玄門部は側石抜き取り穴の位置より約1.8 mを測り、幅はほぼ一定であったと思われる。平面形は玄室長：玄室幅が1.8：1の長方形である。袖幅は左側壁側で0.2 m、右側壁側で0.4 mを測る。玄室高は不明だが、残存高は奥壁で0.5 m、左右両側壁ともに0.6 mとなる。

羨道部の規模　羨道部の長さは、石室床面下排水溝に沿って側壁が延びていたとすると、2.6 mとなる。ただし羨道部における側石抜き取り穴は両袖石の2石分しか検出できず、詳細は不明である。羨道幅は玄門部で約1.1 mを測る。

（3）石室の構造　石材は花崗岩の割石を使用している。基底石は奥壁2石、右側壁3石で構成されている。左側壁については、奥壁に隣接する第1石が残存するのみであるが、側石抜き取り穴の検出状況により4石で構成されていたと思われる。6号墳の側石材の厚みは他の古墳のそれに比してより薄かった。

奥壁基底石は、まず、縦1.1 m・横1.5 m・厚さ0.5 mの石材を横位に据え、壁面はほぼ直立させている。この石材と左側壁第1石との間隙は0.3 mであり、縦0.4 m以上・横0.5 m・厚さ0.4 mの石材を1石充填している。

左側壁基底石は第1石しか残存していなかった。第1石は縦1.1 m・横1.4 m・厚さ0.6 mの石材を横位に据えている。奥壁材との接点は、奥壁基底石と組み合わさるように、L字形に切り込まれている。第2石目以南は、不明である。側石抜き取り穴の中には0.1～0.4 mの石材が数石と0.5×0.7 mの砕石が1石あったが、これは撹乱によるものと考えられる。右側壁基



第35図　加納６号墳排水溝検出状況平面図・断面図（1/40）

底石は、第１石は縦 0.9 m・横 1.5 m・厚さ 0.5 m、第３石は縦 1.0 m・横 0.9 m・厚さ 0.9 mの石材を使用し、それぞれ横位に据えている。第２石は転落し横たわっていた。その検出時の状況では東西 1.3 m・南北 0.7 m・高さは 0.55 mを測る。

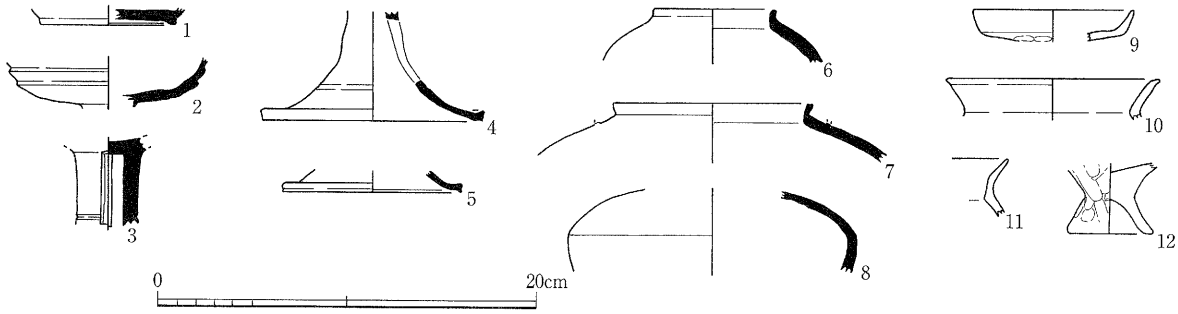
（4）敷石（バラス敷）（第 34 図）　玄室部の床面にて敷石（バラス敷）を検出した。敷石は右側壁第２石目付近まで残存していたが調査担当者が不在時に作業員が掘削してしまい、奥壁付近のみの敷石しか図化することができなかった。5 ～ 10㎝の小振りな石を敷いており、その上面高さは T.P.109.7 mを測る。

（5）石室床面下排水溝（第 35 図）　敷石直下に吸水性の高い黄褐色粘質土を厚さ 0.1 m盛って床面土とする。その下層は灰オリーブ色粘質土で、この上面から排水溝を掘り込んでいる。幅 0.4 ～ 0.5 m・深さ 0.1 ～ 0.3 mの排水溝が奥壁から右側壁に沿って施され、その中に約 0.1 ～ 0.3 m大の石を入れている。平面的には雑な印象を受けるが、断面で観察すると両側に側石を置いて、その上に蓋石を被せているようである。石室検出状況では、袖石中央から羨門にかけて排水溝が露出しているが、これは誤って敷石を除去してしまった際に、排水溝上面の黄褐色粘質土も掘削されてしまったためと考えられる。したがって、この排水溝は古墳の築造後に暗渠となっていたようである。

（6）石室内の堆積土　農道東側の５段目棚田は、耕土・旧耕土層が約 0.4 m堆積していた。石室内には棚田造成時の整地土が堆積していた。

５．出土遺物（第 36 図、表 3）

石室内は後世の撹乱がひどく、遺物も残っていなかった。周溝からは第 36 図 4・6・10・11 の須恵器、土師器が、古墳周辺からは同図 1 ～ 3・5・6・7 の須恵器、同図 8・12 の土師器が出土している。



第36図　加納６号墳出土遺物実測図（1/40）

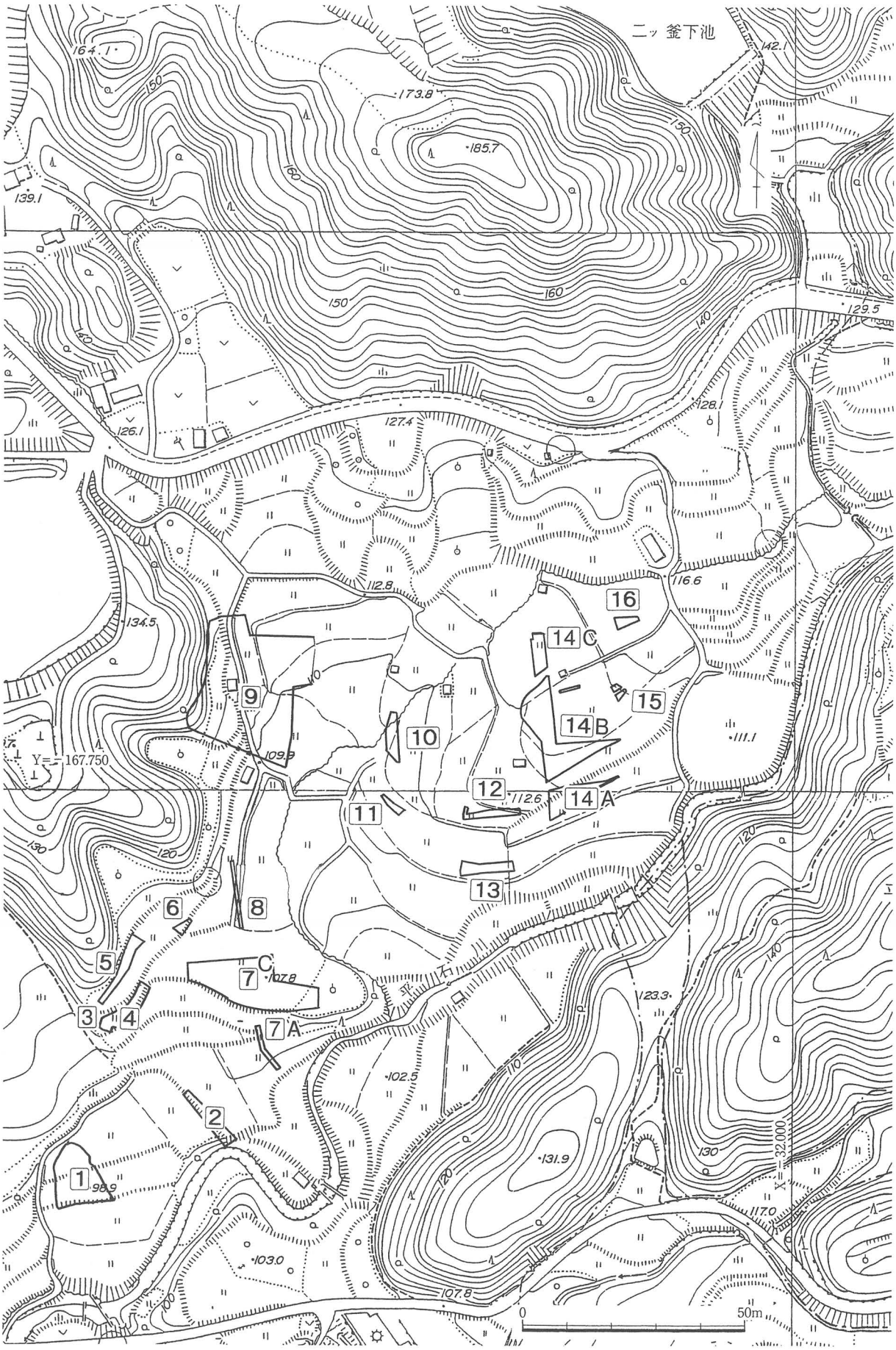
第５節　小結

加納古墳群では計４基の古墳が検出された。しかし、後世の棚田造成に伴う開墾によって２号墳を除く他の３基は上部構造を失っていた。特に、１・２号墳と５・６号墳との間を南北に走る農道を挟んで、東側と西側では壊滅の度合いが違っていた。西側の山塊裾に接する１・２号墳は、

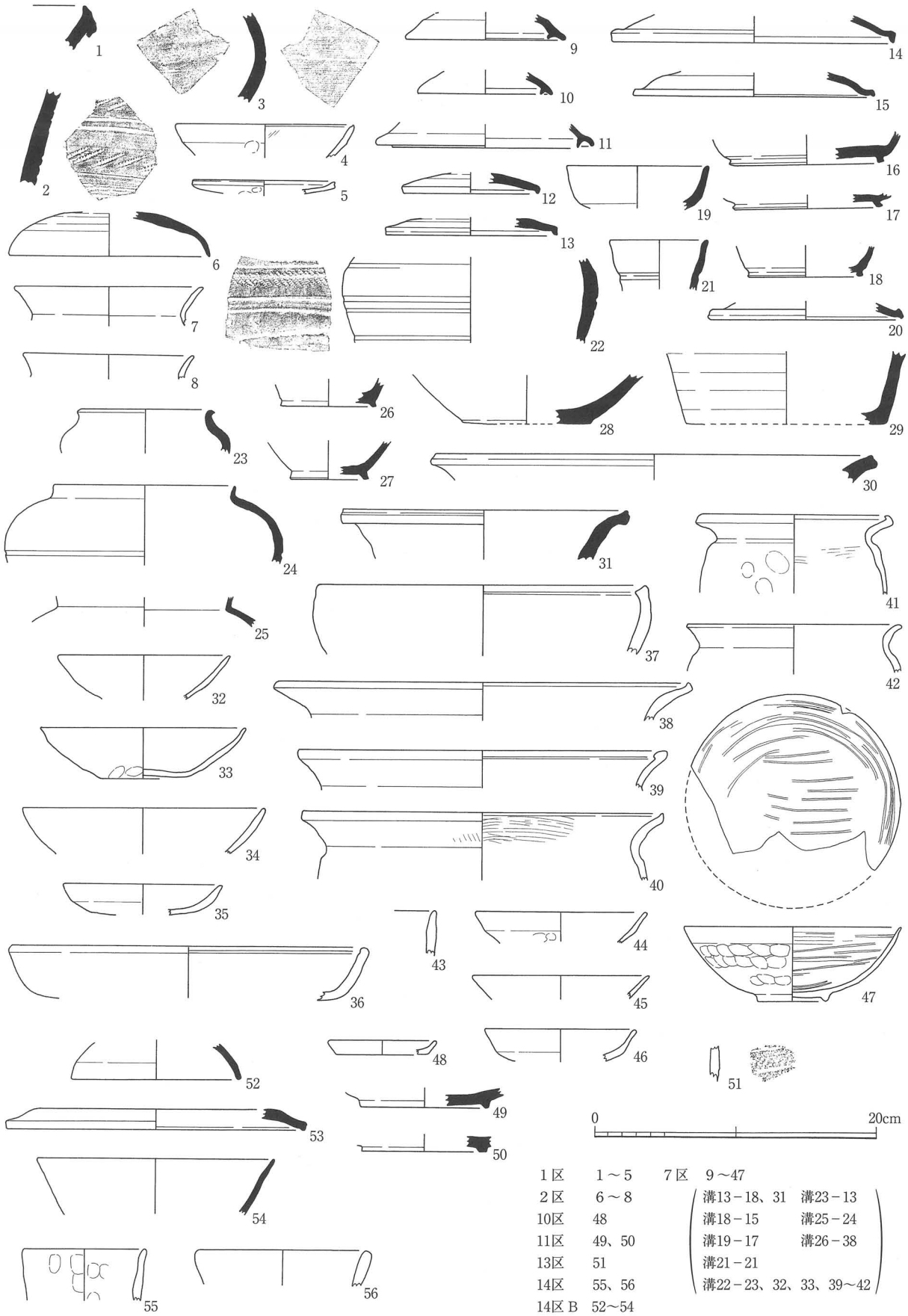
東側の旧谷地斜面に築かれた５・６号墳に比べて残りがよかった。そして、上部構造を残し墳丘もその上が丁度１枚の棚田として残った２号墳では、石室内部に古い堆積土を残し、そこから黒漆塗り大刀、金製耳環、鉄釘それに次いで、須恵器杯身、杯蓋、台付長頸壷が出土している。もちろん、その他の古墳も含めて墓道、閉塞石、周溝など外部施設周辺から遺物は出土しているが、すべて二次的堆積層に伴っている。出土状態から見て２号墳の須恵器５点は他の古墳が大きく損なわれて副葬遺物がはっきりしないこととは対照的に、本墳の副葬時期を示す遺物と捉えられる。

須恵器杯身（第25図１・２）は陶邑編年のⅡ期６段階、杯蓋（同図３・４）はⅢ期２段階、長頸壷（同図５）はⅢ期３段階あたりに該当するのではないかと考えた。飛鳥編年に対比すると、それらは飛鳥Ⅰと飛鳥Ⅲ～Ⅳ、実年代では６世紀末から７世紀前半、そして７世紀後半と大きく２つの時期に分かれる。また、２号墳周溝より出土した土師器鉢（第25図９）は周溝が埋没しきって平坦になった面で口縁部の輪郭が見え、頸部以下が埋まっていた遺物で、８世紀中頃の土器とみられる。このことからすると、２号墳は６世紀末から７世紀前半の間に少なくとも最初の葬送が行われ、７世紀後半に追葬があり、８世紀中頃にはかつて古墳があった墳丘周辺で何らかの供養がなされていたと考えることもできる。１号墳においても２号墳に見るこのような時間の経過をうかがえる須恵器が出土しているが、周辺で出土した須恵器杯身（第16図14～16）にみられるように、１号墳の最初の葬送はどちらかといえば２号墳に先立つように思われる。そして同じように追葬も陶邑編年Ⅲ期に入るが２号墳のそれより若干古いようである。そしてここでも平瓶（同図22）や円面硯（同図23）のような８世紀前半までの土器が出土している。５号墳では、羨道中央から墓道先端にかけてみられる排水溝の埋土より、底部ヘラ削りの飛鳥Ⅱ相当の土師器杯（第32図18）が出土している。その他の遺物は二次的な堆積土より出土しているが、陶邑Ⅱ期４段階の須恵器杯身（同図６～８）や同Ⅱ期５～６段階の台付長頸壷（同図14）、Ⅲ期１～２段階の杯蓋（同図２～５）など時間的な流れは１号墳に似ている。谷地斜面の最も低い位置に築かれて残り状態も悪かった６号墳では周辺から僅かな遺物を出土したにすぎないが、その中では須恵器高杯の破片（第36図３～５）がかろうじて陶邑Ⅱ期４～６段階に相当するものと考えられよう。そうすると６号墳も１号墳や５号墳と同じく初葬の時期はほぼ同じような頃といえよう。以上からすると、４基の古墳の中で２号墳が他より遅れて営まれたことになる。１号墳と５号墳は出土遺物の内容から見るとほぼ同時期である。６号墳も同様と思われるが、追葬については不明である。

一の禿山塊の南尾根の一つの先端で、平成13年に検出した横穴式石室の残骸を、７号墳と名付けた。舌状の尾根の先端は東西に分岐し、その西側に突出する部分で、T.P.116.5～117.0付近に残った玄室部分の痕跡である（図版19）。東西4.0～5.0 m、南北6.0 m、深さは北側で0.5 m、南側で0.1～0.2 m残る。側壁・奥壁の石はすべて抜き取られていた。そのうち左側壁の２石、右側壁の２石、奥壁の３石ほどの抜き取り穴が認められる。石室中軸線は磁北に対して北

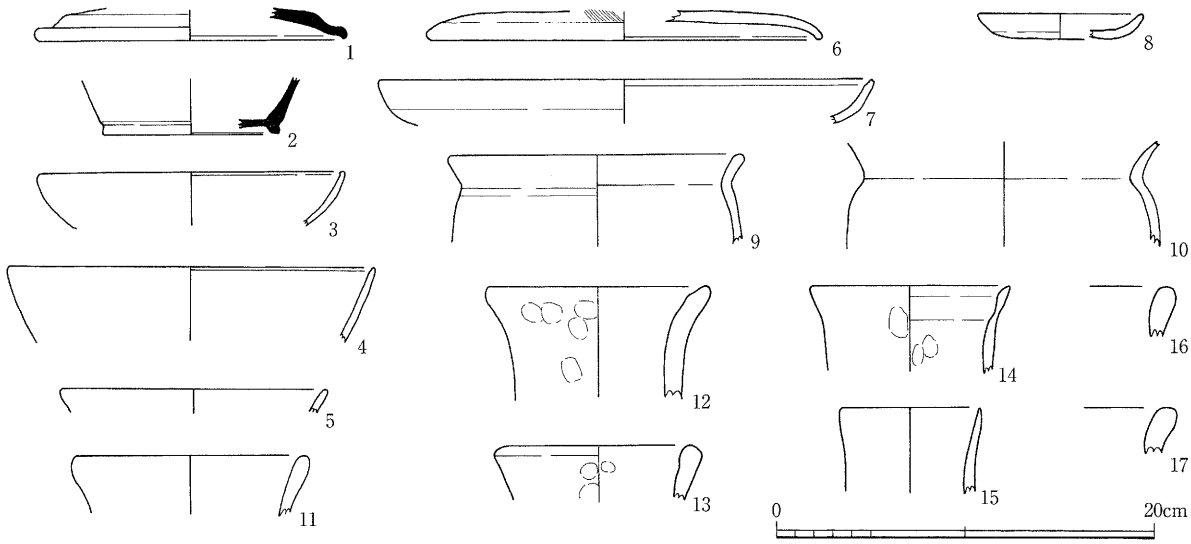


第37図　加納古墳群周辺調査区平面図（1/1250）



1区	1～5	7区	9～47
2区	6～8		溝13－18、31　溝23－13
10区	48		溝18－15　溝25－24
11区	49、50		溝19－17　溝26－38
13区	51		溝21－21
14区	55、56		溝22－23、32、33、39～42
14区B	52～54		

第38図　1・2・7・11・13・14区出土遺物実測図（1/4）



第39図　16区出土遺物実測図（1/4）

でN－21°40′－Eで、南の平石谷開口部を望む形で築かれている。平面形状からみて、左片袖式の横穴式石室と思われる。石室周辺の等高線の屈曲からみて、墳丘の径は約10.0 mで、その周囲に幅約2.0 mの周溝が廻る円墳であったと考えられる。その他の施設の痕跡はなく、出土遺物もない。軸方向からすると5・6号墳に近い。この7号墳は1号墳や2号墳の北東約50 mの、谷地形を挟んだところに南向きに位置していること、周辺に古墳の築かれた痕跡がないこと、これよりさらに50 m東の同じ尾根の別支脈となるところに、シシヨツカ古墳が営まれていることなど、注意すべき立地状況を示している。

加納古墳群の調査区以外にもその南や東の棚田一帯に調査区を設定している。平成12年度の概要報告を補う意味でそれらの調査区より出土した遺物の実測図を掲げた。しかしその中でも7区で出土した遺物の量が最も多い。この調査区の位置は、加納古墳群が築かれた尾根裾の連続が平石谷に突き出るところにあたり、比較的平坦な広い一枚田である。その他の調査も含めて出土遺物には、古墳を削って造成した際に遊離した副葬品としての土器類も含まれている可能性が高い。2区出土の須恵器杯蓋（第38図6）、7区出土の須恵器杯蓋（同図9～11・14・15・20）、14区出土の須恵器杯蓋（同図52）などに、それが反映されている。

古墳時代以降では、8世紀代の遺物が、平成11年度に谷間全域で実施した試掘調査以来注意されるところであった。土師器甕や製塩土器の出土など生活用具としての土器類が、この谷間の右岸一帯で確認されている。先にも述べたように、この時代には古墳周辺での供養も行われつつ、一方では早くも開発が始められたと考えられる。そのためには谷に下る斜面の安定した平坦部で、川水の確保に容易な、しかも氾濫を免れるような場所を拠点とした開墾活動が行われたに違いない。7区の出土遺物はそのことを物語っているようである。

表1　加納古墳群出土土器観察表（1）

挿番	図号	器種	出土個所	法量（cm） 口径	底径（高台径）	器高	その他	特徴	時期
第16図	1	須恵器坏蓋	1号墳墓道	11.30		3.40		丸みのある天井部から口縁部にかけてなだらかに下り、端部丸くおさめる。天井部外面回転ヘラケズリ。口縁部外面～内面回転ナデ。中央付近一定方向ナデ。	陶邑Ⅱ-5～6
	2	須恵器坏蓋	1号墳周辺	12.20				天井部から口縁部にかけてなだらかに下がり端部丸くおさめる。	陶邑Ⅱ-5
	3	須恵器坏蓋	1号墳墓道	10.60		2.40		丸みのある天井部につまみを有し、口端部の内面のかえりは端部より下方に張り出さない。天井部回転ヘラケズリ、ほか回転ナデ。	陶邑Ⅲ-2
	4	須恵器坏蓋	1号墳墓道	9.60		3.15		天井部から口縁部にかかる部分まで回転ヘラケズリ。頂部につまみ。内面かえりは口端部より上方にくる。	陶邑Ⅲ-2
	5	須恵器坏蓋	1号墳周辺					天井部回転ヘラケズリ。内面のかえりは口端部より上方にくる。	陶邑Ⅲ-1
	6	須恵器坏蓋	1号墳周辺	9.30				天井部回転ヘラケズリ。内面のかえりは口端部より上方にくる。	陶邑Ⅲ-2
	7	須恵器坏蓋	1号墳周辺	9.00				小型の器で、かえりは口端部より上方にくる。	陶邑Ⅲ-2
	8	須恵器坏蓋	1号墳墓道	10.00				天井部回転ヘラケズリ。かえりは口端部より上方にくる。	陶邑Ⅲ-2
	9	須恵器坏蓋	1号墳墓道	1.03				天井部回転ヘラケズリ。かえりは口端部より上方にくる。	陶邑Ⅲ-2
	10	須恵器坏蓋	1号墳墓道	9.90				かえり口端部より上方にくる。	陶邑Ⅲ-2
	11	須恵器坏蓋	1号墳墓道	10.60				かえり口端部より上方にくる。	陶邑Ⅲ-2
	12	須恵器坏蓋	1号墳周辺	10.70				かえり口端部より上方にくる。	陶邑Ⅲ-2
	13	須恵器坏蓋	1号墳周辺	13.80				大型の器。かえり口端部より上方にくる。	陶邑Ⅲ-2
	14	須恵器坏身	1号墳周辺	9.60		2.70		底部外面回転ヘラケズリ。口縁端部短く立ち上がり、内傾し、端部をまるくおさめる。	陶邑Ⅱ-4
	15	須恵器坏身	1号墳周辺	12.50				口縁端部短く、内傾する。	陶邑Ⅱ-5
	16	須恵器坏身	1号墳周辺	13.20				口縁端部欠くが、短く内傾して立ち上がる。底部回転ヘラケズリ。	陶邑Ⅱ-5
	17	須恵器坏身底部	1号墳墓道					全体的に摩滅。内面回転ナデ。	
	18	須恵器無蓋高坏坏部	1号墳墓道	10.00				坏部は口縁部が直立気味に外反する深みのある椀形。外面に2条の凸線文。	陶邑Ⅱ-5
	19	須恵器平瓶口縁部	1号墳墓道	5.20			頸部径3.0	斜上方に直線的にのびる口縁部。	陶邑Ⅳ
	20	須恵器小型壺肩部	1号墳閉塞石内	23.40			肩部径10.1	肩が稜をなして張る。	陶邑Ⅳ-1～2
	21	須恵器壺底部	1号墳墓道				体部最大径9.6	体部最大径が器高の1/3にある。体部下半回転ヘラケズリ。	陶邑Ⅳ-1～3
	22	須恵器平瓶	1号墳墓道	6.90		10.10	体部最大径13.0	口頸部が体部の中心から一方の端に偏り、三段接合によって取り付けられている。肩の張りにやや丸みを残している。底部はヘラケズリ。	陶邑Ⅳ-1
	23	須恵器円面硯	1号墳墓道	19.80				蹄脚の円面硯。周縁はV字に深い海により直立気味に上方にのびる。陸は中央のやや凹んだ面をなす。側面はやや下外方に下り、ここに台脚部の取り付け痕がある。その上に2条の凸線が巡る。	8世紀前半
	24	須恵器甕口縁部	1号墳周辺	20.20				外反する口頸部は端部で外方へ屈曲し、肥厚する。内外面回転ナデ。	陶邑Ⅱ-4～6
	25	土師器坏身	1号墳閉塞石内	13.20		2.90		丸みのある底部から内弯して立ち上がる口縁部。端部内側が面をなす。口縁部内外面ヨコナデ、底部外面指オサエ。内底面の周囲より口縁部にかけて粗い1段の放射状暗文。	平城Ⅱ～Ⅳ
	26	土師器坏身	1号墳周辺	11.80		2.50		内弯する弧を描いて立つ口縁部。口縁端部は内端面をなす。口縁部ヨコナデ、以下指オサエ。	平城Ⅲ～V
	27	土師質皿	1号墳墓道	13.20		1.90		ゆるやかに外反する口縁部で、端部がやや面をなす。口縁部内外面ヨコナデ。	平城Ⅲ～V
	28	土師器皿	1号墳周辺	26.00		2.60		ゆるやかに外反する口縁部で、端部がやや面をなす。口縁部内外面ヨコナデ。器表面の摩滅により調整不明。	平城Ⅲ～V
	29	土師器甕口縁部	1号墳周辺	11.90				口縁部外反する形態。内外面ヨコナデ。	8世紀
	30	土師器甕口縁部～頸部	1号墳墓道	10				「く」の字形に外反し、やや内弯気味に立ち上がる口縁部をもつ。口縁部内外面ヨコナデ。	8世紀
	31	磁器碗	1号墳石室内埋土	10.85	3.50	6.35		網目文	近代
	32	磁器碗	1号墳石室内埋土	10.85	3.60	6.30		網目文	近代

表２　加納古墳群出土土器観察表（２）

挿図番号		器種	出土個所	法量（cm） 口径	底径（高台径）	器高	その他	特徴	時期
	33	磁器碗	１号墳 石室内埋土	10.85	3.60	6.20		網目文	近代
	34	磁器碗	１号墳 石室内埋土	11.00	3.80	6.05		蔓巻文	近代
第25図	1	須恵器坏身 底部	２号墳 石室内埋土	9.90		2.65		立ち上がりが受部上端おり下方にある。底部外面回転ヘラケズリ。	陶邑Ⅱ - 6
	2	須恵器坏身 底部	２号墳 石室内埋土	10.00		2.50		立ち上がりが受部上端より下方にある。底部外面未調整。	陶邑Ⅱ - 6
	3	須恵器坏身 底部	２号墳 石室内埋土	8.90		2.95		口縁部直立してやや外反気味にのびる端部をもつ。底部外面回転ヘラケズリ。	陶邑Ⅲ - 2
	4	須恵器坏身 底部	２号墳 石室内埋土	8.60		3.10		口縁部直立してやや外反気味にのびる。底部外面回転ヘラケズリ。	陶邑Ⅲ - 2
	5	須恵器 台付長頸壷	２号墳 石室内埋土	8.10	8.90	19.68	体部最大径 16.90	口頸部は内傾気味に直立し、中ほどから外反して口縁部となり、端部は丸く仕上げる。体部外面に２条の沈線が巡る。肩部は外方へ張り出し、最大径が体部の 2/3 付近にある。底部は丸みをもち、カーブを描いて下る。底部には踏ん張った八の字状の高台がつき、端部は内傾する平面をなし、内側に接地面をもつ。	陶邑Ⅲ - 3
	6	須恵器甕体部	２号墳周辺					内面同心円文タタキ、外面カキメ調整。	
	7	須恵器甕体部	２号墳周辺					内面同心円文タタキ、外面カキメ調整。	
	8	土師器鉢	２号墳周溝	22.80				外斜方にのびる口縁部。端部はやや内傾する。	
	9	土師器鉢	２号墳周溝	27.50				内弯して立ち上がる体部から「く」の字形に屈曲し、短く外反する口縁部がつく。端部は外端面をなす。口縁部内外面ヨコナデ、内面ナデ、頸部以下ヘラケズリ。体部下半指オサエ。	8 世紀中頃
	10	土師質皿	２号墳周辺	8.00				やや内弯気味に立ち上がる口縁部。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面指オサエ。内面ナデ。	
	11	瓦器椀底部	２号墳周辺		5.00			しっかりとした三角高台のつく器。見込みに格子状暗文、その周囲に太いミガキを施す。	Ⅱ期
	12	土師質擂鉢	２号墳周辺	35.00				体部は外斜方にのび、口縁端部は外端面をなす。内面には幅２ミリの条線４本を１単位とする縦方向のおろしめ。体部外面指オサエ、口縁部内外面ヨコナデ。	14 世紀後半
第32図	1	縄文土器甕 口縁部	５号墳墓道	14.40				突帯に刻み目を施す。砂粒を多く含む淡黄色の器。摩滅激しい。	縄文時代晩期
	2	須恵器坏蓋	５号墳 排水溝					天井部回転ヘラケズリ。頂部に宝珠様つまみ。	陶邑Ⅲ - 2
	3	須恵器坏蓋	５号墳 墓道西溝	8.20				内面のかえりは比較的長く、口縁端部より下方に出る。底部外面回転ヘラケズリ。	陶邑Ⅲ - 1
	4	須恵器坏蓋	５号墳 墓道	8.80				天井部回転ヘラケズリ。内面かえりは口縁端部より上方にある。	陶邑Ⅲ - 2
	5	須恵器坏蓋	５号墳 周辺	11.00				天井部回転ヘラケズリ。内面かえりは口縁端部より上方にある。	陶邑Ⅲ - 2
	6	須恵器坏身	５号墳墓道	10.40		3.00		口縁端部立ち上がり短く内傾する。低部外面回転ヘラケズリ。	陶邑Ⅱ - 4
	7	須恵器坏身	５号墳墓道	11.60		3.20		受部立ち上がり欠くが、短く内傾する形態か。底部外面回転ヘラケズリ。	陶邑Ⅱ - 4
	8	須恵器坏身	５号墳墓道	8.10		2.60		受部立ち上がり短くない傾する。底部外面回転ヘラケズリ。	陶邑Ⅱ - 4
	9	須恵器坏身	５号墳墓道	10.60				やや外反気味にのびる口縁部。内外面回転ナデ。	陶邑Ⅲ - 2
	10	須恵器鉢 口縁部	５号墳周辺	15.00				やや内弯気味に直立する口縁部。内外面回転ナデ。	
	11	須恵器高坏 脚裾部	５号墳墓道		11.60			端部で段をなす。	陶邑Ⅱ - 5～6
	12	須恵器高坏 脚裾部	５号墳周辺		14.50			外面に１条の沈線巡る。端部で段をなす。	陶邑Ⅱ - 5～6
	13	須恵器壷 肩部	５号墳周辺					体部上半に２条の沈線が巡り、その下に櫛描き斜行文帯が施される。	陶邑Ⅱ - 5～6
	14	須恵器 台付長頸壷	５号墳周辺		13.60		体部最大径 17.90	体部最大径は体部の中ほどにあり、そこに櫛描きの斜行文帯が通り，その下を２条、上を１条の沈線が巡る。１段の短い脚の裾部は上方で段をなし、凸帯が巡って、下方は底部に向かってなだらかに下る。底端面は平坦な設置面となる。凸帯に１条の沈線が巡る。この上に二等辺三角形の透かし窓が切ってある。体部は沈線以下回転ヘラケズリ。	陶邑Ⅱ - 5
	15	須恵器甕 口縁部	５号墳墓道	20.20				ゆるやかに外反する口縁部の端部が折り曲げられ肥厚する。	陶邑Ⅲ - 1～3

表3　加納古墳群出土土器観察表（3）

挿図番号		器種	出土個所	法量（cm） 口径	底径（高台径）	器高	その他	特徴	時期
	16	須恵器甕 口縁部	5号墳周辺	24.60				ゆるやかに外反する口縁部の端部が折り曲げられ肥厚する。	陶邑Ⅲ-1～3
	17	須恵器甕 体部	5号墳墓道					内面同心円文タタキの上からスリケシ、ナデ。外面平行タタキの上から半スリケシ、ナデ。	
	18	土師器坏	5号墳 墓道東溝	11.10		3.30		丸みのある底部から口縁部が短く立ち上がる無文の器。底部外面ヘラケズリ。	飛鳥Ⅱ
	19	土師器坏	5号墳 排水溝	10.65		3.45		丸底の底部から内弯して立ち上がる口縁部をもつ。摩滅して器表面の調整不明。	平城Ⅲ-Ⅳ
	20	土師器坏	5号墳 墓道西溝	13.40				ゆるやかに外反する口縁部。摩滅して調整不明。	平城Ⅲ-Ⅴ
	21	土師器皿？	5号墳 閉塞石上	18.00				やや内弯気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。	
	22	土師器皿 底部	5号墳 閉塞石上					外面指オサエの後ナデ、内面摩滅により調整不明。	
	23	弥生後期または古式土師器甕口縁部？	5号墳墓道	14.30				内面ナデ、外面摩滅により調整不明。砂粒多く含む。	弥生後期～古墳時代前期
	24	土師器鉢	5号墳墓道	20.60				体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部はわずかに内傾して丸くおさめる。体部外面指オサエ。	平城Ⅱ-Ⅲ
	25	土師器片口鉢	5号墳墓道	26.20				調整不明。	14世紀後半
	26	土師質羽釜 口縁部	5号墳石室 内撹乱層	25.00			鍔部径 30.80	短く内傾する口縁部外面が段をなす。口縁部内外面ヨコナデ、鍔部以下ヘラケズリ。	14～15世紀
	27	土師器甕 口縁部～体部	5号墳 墓道西溝	20.20				球形の体部から外反する口縁部がのびる。口縁端部は外端面をなす。口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ナデ、内面は強くナデ。	8世紀
	28	土師器甕 口縁部	5号墳周辺					口縁端部がわずかに内傾し、外端面をなす。内外面ヨコナデ。	8世紀
	29	土師器甕 底部	5号墳墓道		5.40			やや突出する厚みのある底部。摩滅激しく調整不明。	弥生後期～古墳時代前期
	30	土師質皿	5号墳石室 内撹乱層	8.20		1.15		平たい底部に外販する短い口縁部。1段ナデ。底部外面指オサエ。	11世紀中頃
	31	黒色土器坏	5号墳 閉塞石上					黒色土器A類（坏A）。内面密にミガキ。	9世紀
	32	瓦器椀	5号墳 閉塞石上	14.90	5.50	5.70		深みのある椀形の体部に三角形高台がつく。口縁部内外面ヨコナデ、体部外面指オサエの後、粗く横方向にミガキ。内面横方向にミガキ。見込み格子状暗文。	Ⅱ-1～2
	33	磁器碗	5号墳周辺	10.90	4.20	4.90		草花文染付け碗。見込み蛇の目剥ぎ。波佐見窯系。	17世紀後半～18世紀
第36図	1	須恵器 坏身底部	6号墳 周辺東側		7.00			底端部に低い高台がつく。高台の外端面が接地面。	陶邑Ⅳ-3～4
	2	須恵器無蓋 高坏坏部	6号墳 周辺西側					深みのある椀形の坏部。体部外面に2条の凸線。内外面回転ナデ。	陶邑Ⅱ-1～5
	3	須恵器高坏 脚部	6号墳 周辺東側					脚部外面回転ナデ、内面絞り目残る。長方形の透かし窓は二方向。	陶邑Ⅱ-5～6
	4	須恵器高坏 脚部	6号墳周溝		11.60			外面に1条の沈線巡る。端部で段をなす。	陶邑Ⅱ-4～5
	5	須恵器高坏 脚裾部	6号墳 周辺西側		9.40			端部が段をなす。	陶邑Ⅱ-5～6
	6	須恵器短頸壺 口縁部～肩部	6号墳周溝	6.20				肩の張りのない円弧を描くような体部に直立する短い口縁部がつく。内外面回転ナデ。	陶邑Ⅳ-1～2
	7	須恵器有蓋 短頸壺口縁部～肩部	6号墳周辺 東側	10.60				肩の張りのある体部に短く外反する口縁部がつく。内外面回転ナデ。	陶邑Ⅳ-1～2
	8	須恵器壺 肩部	6号墳 周辺東側				体部最大径 15.20	やや肩の張る体部。	陶邑Ⅳ-2～3
	9	土師質皿	6号墳 周辺西側	8.40		1.65		口縁部1段ナデ。口縁部外反、端部はつまみ上げ細く終える。	11世紀中頃
	10	土師器甕 口縁部	6号墳周溝	11.20				「く」の字形に屈曲する口縁部の端部が小さく外反する。内外面ヨコナデ。	8世紀前半
	11	土師器甕 口縁部	6号墳周溝					直立気味に立ち上がる口縁部がさらに外反して端部にいたる。口縁部内外面ヨコナデ、頸部以下ナデ。	8世紀前半

表４　加納古墳群出土土器観察表（４）

挿図番号		器種	出土個所	法量（cm） 口径	底径（高台径）	器高	その他	特徴	時期
	12	製塩土器 脚台部	６号墳 周辺東側		4.00			脚高 2cm強。脚部と体部は連結して作られている。全面を指オサエ。胎土に砂粒を多量に含む。	古墳時代前期後半～中期前半
第38図	1	須恵器甕 口縁部	１区					口縁端部を上下に拡張する。内側は凹面をなす。	陶邑Ⅰ－４～Ⅲ
	2	須恵器甕 体部	１区					外面に上下に２条の沈線で画して斜行刺突文帯を施す。内面回転ナデ。	
	3	須恵器壷 体部	１区					内面同心円文タタキの後、回転ナデ。外面カキメ。	
	4	土師器坏	１区	12.40				端部内側に巻き込む。内面に細い放射状暗文。	平城Ⅱ～Ⅲ
	5	土師器皿	１区	9.90				口縁の立ち上がりがほとんど目立たない円盤状の器。	中世
	6	須恵器坏蓋	２区	14.10				やや扁平な天井部の低い器。天井部から口縁部へなだらかに移行する。外面回転ヘラケズリ、内面回転ナデ。	陶邑Ⅱ－５
	7	土師器甕 口縁部	２区	13.30				斜上方に直線的にのびる口縁部。端部わずかに上端面をなす。	８世紀
	8	土師器甕 口縁部	２区	11.80				短く外反する口縁部。	８世紀代
	9	須恵器坏蓋	７区	11.40				内面かえりが口縁端部より上にある。	陶邑Ⅲ－２
	10	須恵器坏蓋	７区	9.60				内面かえりが口縁端部ラインに等しい。	陶邑Ⅲ－２
	11	須恵器坏蓋	７区	13.10				内面かえりが口縁端部より下方にある。	陶邑Ⅲ－１
	12	須恵器坏蓋	７区	9.50				天井部から口縁部にかけてなだらかに下り、端部下方に屈曲する。	陶邑Ⅳ－１～２
	13	須恵器坏蓋	７区	12.00				天井部から口縁部にかけてなだらかに下り、端部下方に屈曲する。	陶邑Ⅳ－１～２
	14	須恵器坏蓋	７区	20.00				天井部から口縁部にかけてＺ字状のカーブを描き、端部が下方に屈曲する。	陶邑Ⅲ－３
	15	須恵器坏蓋	７区溝 18	17.00				天井部から口縁部にかけてＺ字状のカーブを描き、端部が下方に屈曲する。	陶邑Ⅲ－３
	16	須恵器坏身	７区	10.20				底端部やや内側に高台を付す。	陶邑Ⅳ－３
	17	須恵器坏身	７区溝 19	10.40				底端部に低い八の字形の高台を付す。	陶邑Ⅳ－３
	18	須恵器坏身	７区	8.00				底端部に低い八の字形の高台を付す。	陶邑Ⅳ－３
	19	須恵器坏身	７区	9.80				口縁部直立してやや外反気味にのび、端部丸くおさめる。	陶邑Ⅲ－２
	20	須恵器坏蓋	７区	6.60				端部で段をなす。	陶邑Ⅱ－５～６
	21	須恵器壷 口縁部	７区溝 21	6.60				提瓶、平瓶、横瓶などを含めた壷類の口縁部か。直立してやや内弯気味にのびる。内外面回転ナデ。１条の沈線巡る。	陶邑Ⅱ－６～Ⅳ
	22	須恵器壷 体部	７区				体部最大径 18.10	体部にはやや省略された刺突文が施され、この文様帯の上に１条、下に２条、さらに間を置いて１条の沈線が巡る。	陶邑Ⅱ－５
	23	須恵器短頸壷 口縁部～肩部	７区溝 22	9.10				体部からなめらかにカーブを描いて、短くやや外反気味に立ち上がる口縁部。	陶邑Ⅳ－１～２
	24	須恵器短頸壷 口縁部～肩部	７区溝 25	12.60				肩に張りのある円弧を描く体部に、短く立ち上がる口縁部がつく。	陶邑Ⅳ－１～２
	25	須恵器壷頸部	７区					円弧を描く体部に短く立ち上がる口縁部がつく。	陶邑Ⅳ－１～２
	26	須恵器壷底部	７区		6.10			底端部に低く小さい高台が八の字形につく。	陶邑Ⅳ
	27	須恵器壷底部	７区		5.60			八の字形の高台がつく。	陶邑Ⅳ
	28	須恵器壷底部	７区		9.00			平たい底部より外斜方に体部がのびる。	
	29	須恵器壷底部	７区		14.00			平底から屈曲して直立気味に体部がつく。内外面回転ナデ、底部外面未調整。	陶邑Ⅳ
	30	須恵器甕 口縁部	７区	30.70				外反する口縁端部が外端面をなす。	
	31	須恵器甕 口縁部	７区溝 13	20.00				ゆるやかに外上方にのびる口頸部が外反する口縁部へと移行し、端部は内方へわずかに屈曲させる。	陶邑Ⅲ－１～３
	32	土師器坏	７区溝 22	12.00				やや内弯気味にのびる口縁部。	
	33	土師器坏	７区溝 22	14.40		3.55		底部から外上方へのびる口縁部をもつ。口縁部は強くヨコナデしているためか、端部はわずかに内傾する。体部は一部に指オサエをとどめる。器表面が摩滅している。	９世紀末～10 世紀初
	34	土師器坏	７区	17.00				やや内弯気味に立ち上がる口縁部をなし、その端部はやや内傾する。調整は摩滅のため不明。	９世紀前半
	35	土師器皿	７区	11.00		2.20		口縁部は底部より滑らかにカーブを描い外斜方にのび、端部は丸くおさめる。	８世紀
	36	土師器坏	７区	25.20		3.70		平たい底部から口縁部が外斜方にのび、端部を内側に巻き込むⅢ。全体的に摩滅し調整不明。	平城Ⅱ～Ⅲ

表5　加納古墳群出土土器観察表（5）

挿図番号		器種	出土個所	法量（cm） 口径	底径（高台径）	器高	その他	特徴	時期
	37	土師器鉢	7区	23.00				内弯して立ち上がる口縁部で、端部は内傾する面をもつ。摩滅のため調整不明。	平城Ⅱ～Ⅲ
	38	土師器甕 口縁部	7区溝26	29.00				ゆるやかに外弯気味にのびる口縁部を呈し、端部が外端面をなす。上端がわずかに立ち上がる。	7世紀後半～8世紀
	39	土師器甕 口縁部	7区溝22	26.00				ゆるやかに外弯気味にのびる口縁部を呈し、端部が外端面をなす。上端がわずかに立ち上がる。	7世紀後半～8世紀
	40	土師器甕 口縁部	7区溝22	25.40				ゆるやかに外弯気味にのびる口縁部を呈し、端部が外端面をなす。上端がわずかに立ち上がる。口縁部外面ハケメの後ナデ、肩部以下ナデ。内面横方向にハケメ、頸部以下はナデ。	7世紀後半～8世紀
	41	土師器甕 口縁部	7区溝22	13.00				やや外弯気味にのびる口縁部で、その端部が内傾し外端面をなす。口縁部内外面ヨコナデ、体部外面指オサエ、内面は横方向のハケメ。	7世紀後半～8世紀
	42	土師器甕 口縁部	7区溝22	15.00				体部から直立気味に立ち上がり、口縁端部がわずかに外反する。口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ナデ。	8世紀前半
	43	製塩土器	7区溝23					直立する口縁部の端部を細く仕上げる。	8世紀
	44	瓦器椀	7区	11.90				薄い器壁で、口縁部内外面ヨコナデ、外面は口縁部以下指オサエ。	Ⅳ
	45	瓦器椀	7区	12.60				薄い器壁で、口縁部内外面ヨコナデ、外面は口縁部以下指オサエ。	Ⅳ
	46	瓦器皿	7区	10.60				深く丸みのある底部から外反するように口縁部がのびる。口縁部内外面ヨコナデ、外面底部指オサエ。	Ⅲ期
	47	瓦器椀	7区	15.20	4.70	5.30		器高指数34.8を測る。体部に断面三角形の高台がつく。見込みには粗い平行暗文を施し、周囲に粗いミガキをかける。外面は口縁部以下指オサエ。	Ⅲ－2～3
	48	土師質皿	10区	7.80		1.00		口縁部1段ナデ。器高は低く、平らな底部から内弯気味に立ち上がる。	11世紀中頃
	49	須恵器坏身	11区		9.20			底端部に低い高台がつく。摩滅のため調整不明。	陶邑Ⅳ－3
	50	須恵器坏身	11区		8.80			底端部に低い高台がつく。摩滅のため調整不明。	陶邑Ⅳ－3
	51	縄文土器甕 体部	14区						
	52	須恵器坏蓋	14区	12.00				天井部に丸みをもち、口縁部にかけてなだらかにカーブを描いて下り、端部は丸くしあがる。口縁部内外面回転ナデ。	陶邑Ⅱ－6
	53	須恵器坏蓋	14区	21.00				端部は下方に屈曲させる。口縁部内外面回転ナデ。	陶邑Ⅳ－1～2
	54	須恵器坏身	14区	16.80				斜上方に直線的にのびる口縁部。内外面回転ナデ。	陶邑Ⅳ
	55	製塩土器	14区	8.40				直立する口縁端部を細く仕上げる。内外面指オサエ。	8世紀
	56	製塩土器	14区	11.70				外反する口縁端部が肥厚する。	8世紀
	1	須恵器坏蓋	16区	16.10				天井部から口縁部にかけてZ字状を描き、短部を下方に屈曲させる。内外面回転ナデ。	陶邑Ⅳ－3～4
	2	須恵器坏身	16区溝13		9.20			底端部に八の字形の低い高台が付く。内面回転ナデ、底部外面ナデ。	陶邑Ⅳ－3
	3	土師器坏	16区	15.90				内弯気味に立ち上がる口縁端部が内傾し、丸くおさめる。内外面ヨコナデ。	平城Ⅱ～Ⅳ
	4	土師器坏	16区	19.20				やや内弯気味に立ち上がる口縁部で、端部は内傾する。内外面ヨコナデ。	平城Ⅱ～Ⅳ
	5	土師器坏	16区	14.00				端部丸く仕上げる。内外面ヨコナデ。	
	6	土師器坏蓋	16区	21.00				口縁端部を内側に丸く仕上げる。端部内外をヨコナデ、天井部外面はヘラミガキを分割して密に重ねる。	平城Ⅱ
	7	土師器皿	16区	26.00				口縁部が内弯して立ち上がる。端部は内側に巻き込み、沈線状となる。口縁部下半指オサエ後ナデ。	平城Ⅱ～Ⅳ
第39図	8	土師質皿	16区	8.70		1.35		平底からなだらかに内弯気味にのびる口縁部。1段ナデ。	13世紀
	9	土師器甕 口縁部～体部	16区	21.60		2.20		くの字形に外反し口縁端部は上端面をなす。口縁部内外面ヨコナデ、以下内外面ナデ。	8世紀
	10	土師器甕 口縁部～体部	16区	15.40				くの字形に外反し口縁端部は上端面をなす。口縁部内外面ヨコナデ、以下内外面ナデ。	8世紀
	11	製塩土器	16区	12.20				外反する口縁部で、端部がやや肥厚する。	8世紀
	12	製塩土器	16区	11.60				外上方にのびて外反する口縁部につづく。端部は丸く仕上げる。口縁部ヨコナデ、以下外面は指オサエ、内面ナデ。	8世紀
	13	製塩土器	16区	9.60				外反する口縁部で、端部が肥厚する。内外面指オサエ。	8世紀
	14	製塩土器	16区	10.40				外反する口縁部。端部は細く丸める。内外面指オサエ。	8世紀
	15	製塩土器	16区	7.40				やや外反気味に直立する口縁部。端部は細く丸める。内外面指オサエの後ナデ。	8世紀
	16	製塩土器	16区					口縁端部肥厚する。	8世紀
	17	製塩土器	16区					口縁端部肥厚する。	8世紀

第５章　平石古墳群の調査成果

第１節　シシヨツカ古墳

１．調査前の地形

平成 11 年度の試掘調査の 2.0 × 6.0 mの南北トレンチでは、現地表面より 1.25 mで石室天井石が存在すること、墳丘盛土は版築状であること、南端部では石槨に向かって盗掘坑が開けられていることを確認していた。それによっても想像以上の良好な残存状況が窺われたので、今回の調査では出来る限り損壊を防ぎ、かつ古墳の構造を掴む必要から、南北方向のトレンチ設定ではこの試掘坑をそのまま延長して縦断面の観察に利用した（第６トレンチ）。したがって、トレンチ全体の方向は石室平面の中軸線と若干ずれが生じている（第 40 図）。

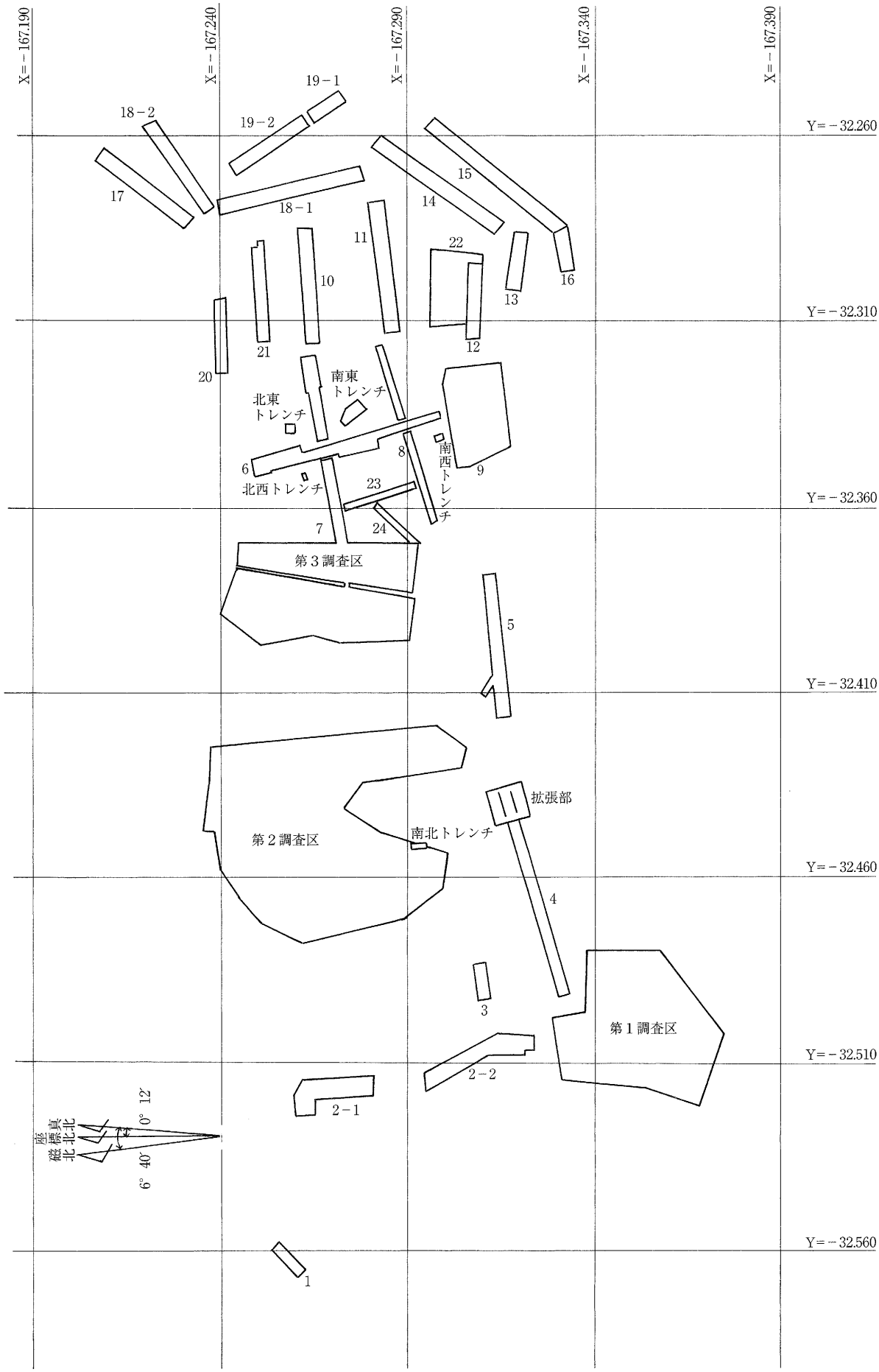
調査前の状況は上底 10.0 m、下底 40.0 m、高さ 2.4 mほどの、平面が台形をなす田が南に突出し、その縁辺を巡るように南側に３段の棚田が取り付いていた。しかし、東側では中段が上段に平行するものの、下段のラインは南東に広がって古墳東の農道と合流し、一方西側では下段の上に盛土をしていたため、下段と中段が同一面の棚田に改変されていた。下段の下には南北 16 mほどの平坦な田があり、その南端の高さ約２mの法面は石垣となっていた。石垣は人頭大の乱石積みであるが、下場には一部コンクリートで固められた長さ 1.0 m以上の大石が据えられていた。

シシヨツカ古墳は、直線距離にして北西 660.0 m、標高 238.97 mに設置されている三角点のある山頂（通称「一の禿」）から、途中南西に屈曲しつつ南東に延びる主尾根が、稜線からやや南にずれる平石谷右岸段丘へと収束する先端を選んで築かれている。現在の府道竹内河南線がこの山裾に沿って大きくカーブを描くところで、東は平石谷の集落から西は富田林方面が望まれる。古墳背後の北に立ち上がるのは、先の主尾根に連なる稜線上を南下する標高 186.6 mの山頂であり、ここからの傾斜面をほぼ現府道の南の崖面あたりで東西に切って南側を独立させ、その南側の緩やかな傾斜面に墳丘が築かれている。上記の南端裾の石垣の下場からこの山頂までは地図上で直線距離にして約 200 m、山頂との比高 70 mで仰角は 19°、山塊を断ち切っている現在の道路面までは約 60 m、比高 25 mで仰角は 11°を測る。当初の墳頂を、高さ 1.0 mほどの削平高を考慮して現状より高さ 1.0 m以内までと考えると、距離 30.0 m、比高 8.0 mで、仰角は 16°程度になる。古墳の立地する位置は東に高く西に低いため、やや西に偏るけれども、仰角 20°以内で仰ぎ見ることのできる山頂と、東西が谷地形で区切られた尾根の先端で、周辺から際立つ墳形は、背後の山塊に無理なく包み込まれ、安定した印象を受ける。

２．墳丘（第 41 図）

（1）墳丘の形状と規模

墳丘第２・３段に版築状盛土を施す３段築成の横長の方墳である。この墳丘を載せる墳丘裾平



第40図　平成13年度調査区位置図

坦面（T.P.117.5 m）と残存墳頂（T.P.122.2 m）との比高差は、4.7 mを測る。規模は、貼石の残りがよい東側と北東隅角・北側を中心に復原してみると、第1段は南北25.5 m、東西34.0～34.4 m、第2段は南北18.0 m、東西24.0 m、第3段は南北12.6 m、東西15.0 mとなる。したがって、各段の南北と東西の辺長の比率は、第1段が1:1.33～1.34、第2段が1:1.33、第3段が1：1.19を得る。第3段の数値は西側が削られているので本来の辺長が掴みにくいためであって、本来は第1・2段と同じような比率をとっていたと考えられる。尺0.3 mとした場合、第1段南北25.5尺、東西34.0～34.4尺、第2段南北18.0尺、東西24.0尺、第3段12.6尺、東西15.0尺に換算できる。以上の各辺の比率からすると、簡便に計測可能な辺長3尺：4尺：5尺の直角三角形を基本とする平面取りも考えられよう。

残存墳頂までの高さは、東辺中央で3.48 m、西辺中央で4.11 m、南辺中央で5.55 m、北辺中央で2.03 mである。各段の高さは、第1段が東辺で0.92 m、西辺で0.98 m、南辺で2.34 m、北辺で0.4 m、第2段が東辺で0.8 m、西辺で1.1 m、北辺で1.5 m、第3段は東辺で1.3 m、西辺で1.13 m、北辺で0.2 mを測る。南辺の第2・3段の立ち上がりは閉塞石の上部や天井石が盗掘など後世の撹乱で1枚外されているので推定せざるを得ないが、側壁や残存する天井石の上面ラインなどを考慮して、第2段が0.7～0.8 m、第3段で1.8 m程度と考えられる。段の傾斜度は南北方向では、南側第1段が35°、第2段が45°、第3段は68°～70°、北側第1段は25°、第2段は40°、第3段は20°を計測する。また東西方向では東側第1段30°、第2段20°以上、第3段38°、西側第1段30°、第2段35°、第3段55°を測る。段と段の間には小テラスが巡る。テラスの幅は一定していない。第1段テラスでは、南辺と東西両辺に比べ北辺は0.5 mと狭い。第2段テラスでは東西両辺に比べて南北両辺が狭くなる。そして北辺ではやや傾斜するが約1.5 mとなり、東西両辺からのテラス面の連続が認められる。以上のように高さ、傾斜角、テラスの取り方などからみると、北から急激に南に下る尾根を背負い、東に高く西に低い地形に制約されながら、その中に正面、つまり南向きを強調しようとする築造企図が窺われる。

（2）墳丘の構造（第42・43図）

墳丘の築成は、第1段については南東コーナーに設定した南東トレンチや第7トレンチ東側西部に現れた、後世の耕作活動により削られた壁面から部分的にではあるが窺われ、また第2～3段については南北断面（第6トレンチ）、東西断面（第7トレンチ）そして第3段の削り取られた西辺（第7トレンチ西側第3段法面）により観察できた。第2～3段では砂質土と粘質土を主体として、これを交互に水平に積み上げている。層厚は2.0～10.0㎝幅が多いが、墳丘中心部の天井石上ではきめ細かく密であり、その周辺はやや粗い。交互といっても、同じ土を何回か積み上げ、その後別の土をまた何回か積み上げているようである。天井石の周囲の若干傾斜する面ではさらに層厚5.0～10.0㎝の粘土を加えている。また砂質土と粘質土を中心に凝灰岩や花崗岩の0.3～0.5㎝の礫粒が混入していたため、断面にはそれらが白っぽく表出していた。